

悠

遊

第十九号



企業OBペンクラブ

ペン・フォト句会（自然編）



君知るや
葡萄紅葉の
妖しさを

大越 浩平

矢澤 正二



雨催ひ
恋の通り路
紅葉散る



見れるかな
孫の白無垢
綿帽子

濱田 優

浜口 須美子



ふるさとを
恋しとキリン
立ち尽くす

悠

遊

第十九号

企業OBペンクラブ

表紙の絵「雷雨の後」

福本多佳子

ドイツから帰国した1984年の初夏に体験した素晴らしい富士の眺望です。父は富士山の眺望を求めて何年もかけて探した土地に家を建てました。ある日の夕べ、突如として雷鳴がとどろき始め、はげしい雨が降り、空が真っ暗に……。嘸然として眺めている内に雨がやみ、黒雲と鮮やかな赤と朱色の空と、かすかに残る空の淡いブルーとが縞模様をなし、やがて雲が消えて茜色の空へと変わっていきました。強烈な色彩の空を茫然と見上げていると、徐々に赤から朱色へ、そして橙色へと変わり始めました。強烈な色彩から穏やかな夕焼けへと変わるあの瞬間を今も思い出させてくれる一枚です。

目次

◇巻頭言……………	西川 武彦 4
-----------	---------

Ⅱ特集Ⅱ 日本の宝もの

◇緑なす島国……………	稲宮 健一 6
◇三種の神器に秘めた願い……………	橋本 政彦 8
◇表記の多様性が語る日本人の感性……………	高口 恵子 10
◇宝ものの持ち腐れ……………	山縣 正靖 12
◇富士は日本一の山……………	志村 良知 14
◇がんばれ、先生……………	小寺 裕子 16
◇日本に政治問題ってありますか……………	上田 信隆 18
◇村に不学の家なく……………	垂水 健一 20
◇伊勢神宮の式年遷宮……………	清水 勝 22
◇俳句の世界に踏み込んで遇った宝もの……………	西川 知世 24
◇歌 枕……………	大野ただし 26
◇渦巻都市 大江戸……………	池田 隆 28
◇日本とトルコの絆……………	野瀬 隆平 30
◇ふるさとを創る……………	西川 武彦 32
◇日本の宝とは……………	富岡喜久雄 34
◇「カルタゴ」の教訓……………	門屋 信行 36
◇「宝もの」は後世に伝えられるのか？……………	浜田 道雄 38
Ⅱ特集Ⅱ 我が人生に悔いあり……………	
◇後輩の急を助けられなかった悔み……………	大庭 定男 42
◇マイ・ウェイ……………	安藤 晃二 44

Ⅱ自由テーマⅡ

◇後悔なしに人生なし……………	大西 宏 46
◇悔いが残る……………	岩崎洋一郎 48
◇継続は力なり……………	野上 浩三 50
◇我が人生に悔いなしの極意……………	阿部 洋己 52
◇遅刻……………	大泉 潤 54
◇趣味……………	金京 法一 56
◇八十年の人生悔い多し……………	古川さちお 58
◇またカタカナ語を増やしてしまった……………	細谷 博 60
◇人生の点と線―川の流れのように……………	上原 利夫 62
Ⅱ自由テーマⅡ……………	
◇造船と森林破壊……………	阿部 典文 66
◇OTという名の少年のこと……………	鶴飼 直哉 68
◇食糧不足の心配……………	吉寄 清己 70
◇非関税障壁……………	玉山 和夫 72
◇あなた方は何型カップルですか？……………	市川 忠夫 74
◇英語ができる筈？……………	寺井 融 76
◇孫のアメリカ学校生活……………	松谷 隆 78
◇続・添乗中の大失敗……………	上山 裕次 80
◇エトパス ノイエス……………	新井 良侑 82
◇好々爺はいかが？……………	新山章一郎 84
◇虹の橋……………	新田由紀子 86
◇文明進歩の早すぎと人類破滅……………	杉浦 右蔵 88
◇原発 記録し、記憶し、考え続ける……………	大越 浩平 90
◇地震・津波・噴火―菅江真澄遊覧記から……………	大月 和彦 92
◇ダマスカスの記憶……………	中村 爽 94

◇氷山迫る『タイタニック号につぼん丸』

最後の手段「消費税率アップ」を急げ!.....鳥海 博 96

◇故郷訪ねて.....浜口須美子 98

◇原発とホーキング史観.....中村 将陸 100

◇不思議な縁.....猪股 重子 102

◇香港グルメ旅行.....中村 晃也 104

◇原発震災に思う.....大平 忠 106

◇中国の西安を訪ねる.....田原 敬 108

◇名刺と肩書き.....都甲 昌利 110

◇心静かな大晦日.....福本多佳子 111

◇姉からの贈物.....濱田 優 114

◇濁点ミステリー.....平尾 富男 116

◇「三途の川」を渡らずの記.....矢澤 正二 118

◇小次郎の思い出.....保坂 令子 120

◇新巻鮭.....廣澤 重穂 121

◇創作短編◇

◇悲恋哀歌.....馬場真寿美 126

◇テンゴ.....三 春 129

◇悠遊の記◇

◇七十の手習いーベン画.....松浦 武弘 134

◇頭と目の療養願.....中川路 明 135

◇インドでの困惑.....伊藤 文明 136

◇傘寿のこの頃ークオ・バデイスー.....児玉 忠雄 137

◇みみしい.....西田 昭良 138

◇「ただいま療養中」.....黒崎 昭二 139

◇書きたいもの.....高橋 孝蔵 140

◇英語を読もう会.....

◇愉快な仲間ー何でも書こう会.....

◇掌編小説勉強会.....

◇歩き出したペン・フォト句会.....

◇サロン21.....

◇ペン俳句のこの一年ー佳句鑑賞.....

◇二〇一一年「ペン川柳」勉強会の成果.....

◇「800字文学館賞」特別企画.....

◇追悼 石川正達さん.....

◇追悼 ペンクラブ育ての親.....

◇追悼 吉田邦彦さん エズ村の絵.....

◇企業OBペンクラブの本年のあゆみ.....

◇会員名簿.....

◇表紙のことば「雷雨の後」.....

◇編集後記.....

表紙制作 野瀬 隆平

表紙の絵 福本多佳子

カット 児玉 忠雄

山縣 正靖

福本多佳子

福本多佳子

福本多佳子

福本多佳子

福本多佳子

福本多佳子

福本多佳子

福本多佳子

福本多佳子

福本多佳子

会長 西川 武彦

今年、後期高齢者入りする。七十五年前、昭和十二年には日中戦争が始まった。太平洋戦争、敗戦、高度成長、バブル崩壊を経て現在に至る。江戸時代の終わりに生れていたと仮想すれば、維新から明治・大正を経て、昭和十二年頃まで生きてきたことになる。なんとなく面白い。

七十五年間を振り返るに、モットーとして常に「ねばならぬ」があったように感じる。親による躰けに始まり、疎開で転校が重なった小学校時代は環境に馴染まねばならず、何かと耐えて頑張らねばならぬ。新制中学を嫌って受験。高校・大学・就職と競争を勝ち抜かねばならぬ。入社後は出世競争に凌ぎを削らねばならぬ。夜の付き合ひ、残業、短中長期の事業計画・販売目標の達成……。『ねばならぬ』の連続だ。それが生き甲斐になっていたとも言えよう。年齢的に筆者と前後する仲間が八割方だから納得して頂けるだろう。

五木寛之さんが『林住期』で、古代インドの「四住期」に倣い、人生を四つの時期に分けて論じている。

「学生期」(二十五歳迄…心身を鍛え、勉強し、体験する)

「家住期」(五十歳迄…就職、結婚、子育て)

「林住期」(七十五歳迄…人生の黄金期)

「遊行期」(七十五歳以降…悟りを得て、旅をしながら人の道を教える)

筆者は最終段階に入る。前半はその通りだが、後半の二期はいささか心許ない。人より少し遅れて歩いてきた思いもある。追いつくまで頑張ら「ねばならぬ」のだろうか。

昨秋、カズオ・イシグロさんの『日の残り』を読んだ。英国貴族である政界の名士に仕えた有能な執事の人生を柱とする物語。第二次大戦前夜から戦後にかけて、英独外交の裏で動き重大な失敗を犯す主人、メイドとの淡い恋、最後は自分の私生活の失敗に気付き、海を見ながら涙を流す。見事な作品だ。ふと思いついたのでご紹介する次第です。

二年間、引き続きクラブの運営を委ねられました。「遊行期」に入りますが、なんとかお役目をこなさ「ねばならぬ」、と呟いています。

特集・日本の宝もの



緑なす島国

稲宮 健一

トロイアの遺跡発掘で有名な、H・シュリーマンが清国を経由して明治に変わる三年前の一八六五年、江戸、横浜に三カ月間滞在した。その旅行記によると、日本は町や住まいの総てが清潔であり、役人はチップや賄賂を受け取らない。男女とも、かな、漢字の読み書きができ、どの家々にも花木が植わっていて、誰でもが園芸を愛していて、幸せそうに生活しているとの感想を記している。当時の清国との対比に興味深いものがある。

現在の日本は色々と難題を抱えているが、敗戦の痛手を克服した活力を評し、世界の国々からは規範とされる点が多い。その原点は明治以前の古い時代に、島国で熟成された固有の文化に負うところが大きい。

国土は大陸から遠くも近くもない所にあり、狭い経路で取り入れた大陸の文化は、島国の風土のもと、住む人々によって、古来の文化とゆつくりとろ火で煮詰めるよう

に融合して和の文化を創っていった。

気候は四季の移ろいが明らかで、天変地異を除き、適度に雨も降り穏やかである。国土の七割弱が緑で覆われている。古い時代では、多くの人が森に囲まれた田畑を耕し生活していた。深い森には神祕が漂っていて、神話の時代には祖霊の住む神の世界であった。

この素朴な神と、仏教が結び付き、山伏の活躍する山岳信仰、比叡山や高野山を根拠地とする加持祈祷を行う密教を生んだ。鎌倉時代には、禅宗や浄土宗など広く民衆レベルの宗教が興った。神々ならず、仏も含んだ神仏習合という漠然とした神秘性に覆われた安堵感ともいえる楽観的な宗教感が人々の心情に深くしみ込んだ。明治以前には他民族との支配関係が無かったこともあり、他国に見られる白黒を明確にする対立を好まない国民性を生み、協調的に生きる素地が創られた。

十二世紀に武家による政治権力の支配が始まったが、神代から続く大和朝廷の祭司として権威は同時に尊重され、祭司と政治の権力の二重構造が共存してきた。明治以降、西欧の影響で強い皇室に変わったが、結局、太平

洋戦争は最後のところで、この神秘性を背景とするお言葉で穏やかに終った。

一般に国富は権力者が握る例が多い。しかし、武士階級であっても、富を独占的に収奪することはなかった。公家は貴族としての誇りと、武家より高い位であるとの意識を持っていたが、富の裏付けは貧弱だった。稲作経済の時代にあつて、限られた国土の中で富の配分を考えなければならず、権力者と農民が互いに生きられように富を分け合う社会であつた。この文化が、戦後の時代、管理者であっても、そこそこの俸給で働くことをいとわない厚い中間層を生み、会社文化の花を咲かせた。日本社会では必ずしも富即ち、高貴を表さない。

この時代の農民は人口の約八割で、農民の生活習慣が多くの国民の氣質を形作った。緑滴る森は、農地に豊かな恵みの水をもたらした。この水を稲作作業に活用するため、綿密な計画と管理が要求された。即ち、水源の確保、均等な水の配分、的確な配水時期に村社会の合議と協調を通じた決定が必要であり、その様に村は治められた。また、農作業にあつては田すき、田植え、草刈り、

刈り入れと、農民は常に田圃にへばり付いた稲の世話をよぎなくされた。これが残業をいとわず、根気よく仕事をする慣習を生んだ。

家を取り仕切る女性の役割は大きく、男社会であつたが、女性の役割も尊重された。この点は近隣の国々と異なる。

日本の四季は顕著で、花鳥風月が季節とともに、微妙に変化して行く様は人々に鋭い美意識を育んだ。

この感覚をもとに、日本庭園、襖絵の住空間を生み出し、その雰囲気の中で、茶道、花道など、独自の文化を創りだした。繊細な美の極限を追及する感覚は、現代の木目の細かい工業製品の創造の源になっている。

茶、花、絵画、武芸などの家元の創設はその時代の革新的な快挙であり、高い創造性の賜物であつた。しかし、その後の世代では家元の流儀の継承に腐心し、次世代の革新の芽だしを抑えて保守的になる。

我々の世代では、戦後の復興期にしゃにむに前進して、今日に至つたが、今はその殻を破り、色々な分野で再び革新的な家元が飛びだしてくることを願ってやまない。

三種の神器に秘めた願い

橋本 政彦

年の初めの楽しみはその年の干支の小さい人形を買って飾る事です。木彫り、陶磁、張り子、布材料と、材料は色々で、目立つものもあれば地味なものもあります。地方による違いも勿論です。安徳天皇を祀った赤間神社のものもあります。七つの竜、辰の人形がわが家にあります。今年は雨降りの文字通り寒い大寒の日、駒場の日本文藝館で「英国のスリップウェア展」を見て、その売店で張り子の辰人形を二千円で買いました。張り子の人形には柔らかみと温かみがあります。おかげで竜、辰の人形はこれで八つになり、居間のケースが賑やかです。辰年の辰は動物では竜。干支で唯一実在しないものとされます。でも吉野裕子「十二支」（人文書院）を読むと古代の中国人は竜を恐竜と理解して実在のものと思っていたようです。彼らは竜を爬虫類・魚類等、鱗を持つ生物の祖、あるいはあらゆる生物の祖と考えています。

実在の根拠の一つにカール・セイガン著「エデンの恐竜―知能の源流を尋ねて―」の一節を引用しています。人間の脳の一番奥の部分は、恐竜の脳と同じ働きで爬虫類複合体と呼ばれ、それを取り巻く大脳縁辺系は哺乳類の祖先と同じものです。その外側の新皮質が霊長類としての人間の理性を掌り、脳の八十%を占めています。人間が人間たり得ているのは脳のこの新皮質の働きです。脳はこの三位一体で構成され、三者のバランスの上に成り立っています。人間の脳には明らかに恐竜という古代生物の機能が生きており、その記憶は彼らの巨大さ、力強さに対する畏敬の念となつて残りました。それで竜を恐竜とし、辰の動物に竜を振りあてたのだとします。

その竜の役割として天と地を支配する宇宙の法則をも背負わせています。「辰」には北極星、中心の意味がありますから、辰は「すべての中心、太極」となり、その結果で辰即竜、竜即辰が成立します。海の中に竜門というところがあつてここを通り過ぎる魚はかならず竜になるという説話もこれに符合します。チンパンジーで古代人の脳の働きを調べている世界的研究者で比較認知科学

者でもある松沢鉄郎は、「四千年前の縄文人を現代につれて来て、パソコンは使えるし、携帯電話だって使いこなせるはず」と述べていますし、最近の考古学などはモノ資料の発掘や発見を通して縄文人の高度な思考、文化を実証しています。こうして見ると古代の中国人が竜を竜としたのもきっと実在の恐竜をイメージした故であろうと思われる。その恐竜は環境に適応できずに滅亡しました。一方人類はその後も生き延びて現在に至っています。その生死のドラマの分岐点は、情報処理能力の差や思想の有無だったように思われます。

情報技術の世界を牽引したアップルの創始者スティーブ・ジョブズが昨年十月に亡くなりました。彼の新商品は世界を大きな変革のうねりの中に投げ込み、それは多様な交錯する情報が不協和音を奏でながら協和音を求めるムーブメントとなっています。地球環境や社会の安定が脅かされて、旧来の社会システムの綻びが露わになっています。日本を含め世界は新しい社会システム、思想が必要な変化の過渡期にあります。目指すべき社会の指標としてブータン国のGNH（国民総幸福量）やOECD

D幸福度の指標が提案されています。これらは持続可能な新たな資本主義、民主主義、自由と公平を求める動きです。日本民藝館の柳宗悦も、美しいものについて、「われわれは日本に生きようではないか。他の国々と頂上で逢う為に」と記して、自国の文化を深く知ることこそが世界との共存を図る道であることを伝えていきます。

釈迦は百歳の寿命を二十年削り八十歳で入滅しました。我々は幾百、幾千万という英霊の尊い命の上に今があります。豊かな自然や神社、仏閣、そして幾多の建造物にその絶えざる営みを見るだけでなく、長年にわたって紡ぎだされた思想、文化の恩恵を知ることが出来ます。日本の三種神器にはそのエッセンスが詰まっています。宝物に託されている思いは、鏡に理想を求める謙虚な態度を、剣に武器が芸術品になる働きを、そして曲玉に技術開発への精進を、というものだったように思われます。日本は過去の成功体験に縛られ、情報社会の変化に立ち向かっていません。独立自尊の気概、世界に貢献する大欲不足は日本の恐竜化です。三種の神器の願いは変化を恐れず挑戦する行動です。新しい日本社会は可能です。

表記の多様性が語る日本人の感性

高口 恵子

二十一世紀を迎え、グローバル化がめざましく進むなか、我が国では外国語学習が盛んに行われています。

私の周りでも、英語やフランス語、中国語等のラジオ講座を聴いたり、カルチャーセンターに通ったりと、日々熱心に外国語をマスターしようとしている多くの人を見かけます。なかには、語源がラテン語の言葉を全て流暢に操り、綴りを見れば単語のおおよその意味が判るという達人もいます。

このように私達を虜にしている外国語ですが、例えば英語のようにアルファベットだけで表記する言語は、単語の意味と文法を習得すれば大方の意味は通じるようになります。

では、日本語はどうでしょうか。知り合いの米国人や韓国人、フランス人などは一様に、

「日本語は、ひらがな・漢字・カタカナの表記があつ

て、その使い分けが難しい」と言い、

「会話なら不自由しないが、文の表記になると、辞書だけでは判らない」と嘆きます。

おそらく彼らには、日本語特有の複数の表記方法と、その奥にある風情や味わいの関係性を理解しがたいのでしよう。

例えば、「怒った人が、戸をバタンと閉めた」と書く時、ひらがなで「ばたん」とは書きません。また、「はんなりとした姿」は、カタカナの「ハンナリ」ではありません。

私達は、学校教育で一通りの文法は習いますが、机上の知識だけで、その状態や感情を相手にしっかりと伝えることは、困難を伴います。

しかし、この難しさこそ、日本語の多様な表記における醍醐味ではないでしょうか。

それでは、この多様な日本語の表記は、いつ頃から始まったのでしょうか。歴史をひもとけば、古墳時代に日本に入ってきた漢字。それが、五百年程の時を経て、平安時代初期に仮名を生み出しました。その仮名には、平仮名と片仮名があり、平仮名は漢字を草書化したもの、

片仮名は漢字を省略化したものです。「以呂波」を草書化したものが「いろは」であり、「伊呂八」を省略化したものが「イロハ」です。

そして、今日に至るまで、私達は厳密にその使い方を守り通した訳ではなく、それぞれの時代や世代の感性を加味しながら、自然に物事を表現してきました。

さて、ここで日本文学の視点から日本語の表記を考察してみましよう。

先日、芥川賞と直木賞が発表されました。と同時に、選考委員の一人は、全体の質が落ちたという理由で委員を辞退しました。

その質とは一体何でしょうか。それを探るために、川端康成について触れたいと思います。

日本を代表する作家である川端は、我が国初のノーベル文学賞を受賞しました。彼の作品は、日本人の心の精髓を、優れた感受性をもって表現するその叙述の巧みさにある、と高く評価されています。

叙述の巧みさとは、外国語のように文法通りの表記ではなく、その文に川端の心情を織り交ぜて、作家自身の

研ぎ澄まされた感性で表現を選びぬき、文章を書いているということでしょう。

それに付随して、評論家小林秀雄も作家志願者への助言のなかで、日本語並びに日本文学を学ぶには、常に第一級の作品を読み、その作家の全集も読むようにと言っています。これは表記の的確さよりも、作家の感性を学び取ることに重きを置いている言葉だと思います。

外国語は、単語の表記によってそのニュアンスを変化させることはできません。それに比べ日本語は、多様な表記の方法を用いながら、言葉一つ一つに作者の思いを込めて表現することが可能です。その奥深さを丹念に追求し、優れた先人の文学から学ぶことは、無限大にあります。

今一度、多くの美しい文章に触れ、日本語の多様な表記に潜む感性を探り、その言葉に宿る柔軟な精神を共有すること。この日本文学での宝探しこそが、私達の豊かな情緒を養い、日本人としての誇りを持つことに繋がるのではないのでしょうか。

宝ものの持ち腐れ

山縣 正靖

日本の宝、それはなんといつても神様が授け給うた四季とりどりの花と紅葉と水に彩られた風土である。もう一つ、世界の男性の理想は、「日本の女性を妻とし、中国人をコックに雇い、アメリカの家に住む」ことだそうで、われわれは宝ものを抱えているのだ。「異議あり！嘘だ！」と叫ぶ輩は宝の持ち腐れの衆生である。

さて、次は日本人が創った宝ものである。ここへきて改めて身の回り、街の隅々を見て歩くようになって実感するのは、日本の衣食住の一つ一つを彩る職人技、匠の心意気である。秘するが花、という伝統から一見慎ましかだが、日本人が自分の仕事にこめる、技を極め粹を求めてやまない心意気はこれこそ日本の宝ものではないか。またそれを認め、励ます目利きがどこにもいるのが素晴らしい。

勿論、外国にも素晴らしい人々がいらっしやる。今風

に言えばクリエイターは多いのだが、普通の日本人が仕事にこめるこの思いはやはり特別のもの、宝ものだと思うのである。

この日本の宝ものが輝いたのは戦後の日本のもの作りの躍進である。私の少年時代はライカ、ツァイスに負けないカメラをキャノン、ニコンがつくる、旧海軍が始めた溶接造船が世界を制覇するなど、日本の現場の技術力が復興ののろしをあげた頃だった。目利きの存在も大きかった。油だらけの作業服の本田さん、町工場から立ち上がった松下さんが仕事魂に燃える社員を集め、「やってみなはれ。だめでもともと」と突進させたのである。官僚も良かった。外国の巨大メーカーの上陸を抑えて国産の育成を助け、それが育つや輸出できるよう関税交渉で粘り抜くというノートリアスな離れ業をやつてのけたものである。

その日本がこの二十年に失速した。国内産業は次々に工場を閉鎖して海外に移転し、就職氷河期到来で日本の宝ものは働く場が無い。磨けば宝ものに育つ若者が就職できない。まさに宝の持ち腐れである。どうしてこんな

ことになったのか。

国が八方塞がりになると出てくるのがいわゆる日本論である。駄目になったのは、日本人が良さを失ったからである。それも戦後の教育が悪い。徴兵して鍛えなおせ。韓国では軍事教練しているではないか。日本人が誇りを無くしたからである。日本の言うことを聞かない外国にはもつと毅然と対決せよ。中国も米国も信用できないなど、この語り口は情緒的で売れるものだから本屋に行くと日本論コーナーに本が積んである。

しかし、今のような苦境は日本だけではないのであって、米国、フランス、イギリスなど先進国といわれた国はどこも若者の失業、経済苦境に悩まされているのである。

あらためてこの原因を考えてみると、先進国に共通している原因が二つある。

どの国も今は景気循環の不況、景気の底にある。それがもう三年も続いたのだからそろそろ回復が近い筈なのだが、仕手ファンドにカラ売りを仕掛けられて各国が順に信用不安に襲われる。回復の糸口が掴めないのである。

もう一つは、先進国の国内産業が中国、東欧、インドなど賃金の安い国に生産を移し、またそれらの国が生産技術を高めて価格競争を挑んでくるから、先進国の国内産業は衰弱の一途をたどっていることである。

これに加えて、日本の場合はどうも目利きの立場にある人々に油断があると思う。

まず問題の価格競争に対抗する技術が遅れをとっている。次々に国内産業が価格競争に敗れていくのに、価格競争力を取り戻す技術開発には努力、予算を付けていない。

もうひとつ、商品開発が後追いになっている。折角わが日本が先行していたパネルや先端電子部品を世界の顧客が喜ぶ商品に仕立てる目利きがない。あるいは、「やってみなはれ」とやらせる目利きがない。

こんなことを言うと、怒って反論される方がおられるだろうが、おおいに討議して原因を詰めればよいのだ。原因が分かれば対策も皆の討議により立てられる。対策が立てられれば日本の宝もの、現場力を集中して成功するはずである。

富士は日本一の山

志村 良知

二十歳の時、母と兄と三人で富士山の頂上に登った。頂上でのご来光は始めから期待しない、のんびりとした登山であった。剣が峰にも登り、三七七六メートル標の前で記念写真を撮った。その時は、また登る機会もある、と思ったのであるが、結局今に至るまで富士登山はこの一回きりである。

生まれた家は、山梨県の北部で南側が開けている高台の村にあったので、縁側から富士山が良く見えた。子供の頃には、富士山は「富士さん」だと思っていた。

お客様が縁側から「見事な富士山ですね」と誉めると「いいえ、お粗末なものです」と謙遜してしまっていた母は、その後四十年、死ぬまで三人で行った富士登山の事を口にした。今思うと親孝行と呼べる事をしたのかもしれない。

縁側から見えるその富士山は、手前に御坂山塊がある

ので裾が隠れてしまう。しかし左右がきれいに対称で、山肌には破たんがなく、嬖も美しい甲斐の富士である。同じ姿の富士山は釜無川沿いに北上する甲州街道からずっと見え続け、北に行くにつれてどんどん立ち上がってくる。長野県境の国界橋付近から南の空を眺めると、富士山は思いもかけない程高い位置から長く美しい裾を引いている。

三十代の頃、静岡県の裾野市に住んだ。富士山の南東斜面は、同心円状の等高線がきれいに残っている。箱根スカイラインからは、海拔三百メートル付近から頂上に至る大斜面を俯瞰で眺める事が出来る。裾野市はその斜面の末端に乗っている町で、裾野というのは古来からの地名ではないが、大正四年に当時の東海道本線佐野駅を裾野駅と改称した事に始まる、というからおおよそ百年の歴史がある。

富士山は円錐形といわれるが、勿論数学的に正確な円錐というわけではない。極端に言うと、山中湖に向けて置いた三角おむすびの形をしている。裾野市からは、こ

のおむすびを真横から見ることになるので、富士山は細く見える。左側に見える西斜面の角度は富士山全周のなかでも最も急で三十度を越える。なだらかに見える東斜面は二十七度くらいであるが、視覚的にはその差は大きく、山全体が左に傾いて見える。さらに宝永火口が山腹をえぐっているので非常に特徴がある姿である。それまでは、富士山なんてどこから見ても同じ、と思っていただけにその姿は衝撃的であった。

富士山は、五千年前から千年前位まで続いた北西から南東に走る噴火口列からの「新富士噴火」と呼ばれる火山活動で形成された。日本列島の基本的な卓越風は西風である。特に冬の富士山付近では、西高東低の等高線に直角の非常に強い西風が続く。西風は火山噴出物を運び、東斜面に大量の落下物をもたらした。笹坂峠の昇り口付近からは、これらの落下物からなる富士山全周で最もボリュームある東斜面が、立ちはだかるように聳え、富士山ではない別の山のように見える。

冬の西風は現在の富士山の姿にも大きな変化を与えている。西風は西斜面に降り積もった雪を吹き上げて東斜面に運ぶので、麓の少ない東斜面は巨大な白い一枚岩となる。東海道新幹線の小田原付近からは、この東斜面を見る事になるので、冬は常に全身真っ白である。これが角度で四十五度南の三島まで来ると、宝永火口が見えてくるという以外にも、がらりと様相が変わる。特に強い冬型が数日続いた後などは雪が吹き飛ばされ、さながら夏姿になっっている事がある。東京で氷点下を記録するような強烈な寒波の中、雪がほとんどない黒い富士山を見るのは一寸異様である。

東海道新幹線からの富士山と言えば、万葉の時代から愛でられた富士川河口付近からの姿がある。愛鷹山と富士川の間で前に障害物がないのはほんの数秒間でしかないが、海拔ゼロメートルから三七七メートルまで一気にその姿は、新幹線車窓からという事も含めて、日本の宝の一つであろう。

がんばれ、先生

小寺 裕子

年とともに涙もろくなつたせいか、劇を観ながらボロボロと泣いてしまった。安政元年の地震の時に、台地の下にいる村人を津波から助けるために大切な稲を燃やして道案内するという「稲むらの火」という劇だ。

演じたのは、ろう学校の小学生たち三十三人。粗筋が分かるよう所々に台詞が入るが、聞き取りにくいので、スクリーンにも文字が出る。津波が襲ってくる様子は全員で幾重にも布を旗めかす。村人に津波襲来を告げる場面は、見事な組体操で表現されていた。三段の上に生徒が立って手を広げた時は、観ている方がドキドキした。どの子も一生懸命で輝いている。日本の自然災害の恐ろしさや、己を忘れて人に尽くす市井の偉人について、このような形で語り継がれていくことは素晴らしい。

都の特別支援学校が参加するこの演劇祭は今年で二十回目を迎える。我が家の次女も、支援学校に通っていた

頃は演劇部に所属し、演劇祭に出演した。

様々な知的障害を持った生徒を指導するのは並大抵なことではないだろう。演劇部員の顔ぶれは毎年少しずつ変わる。指導する先生たちは、部員一人一人に合った役を考える。ある年は、台詞を一回聞くと覚えてしまう自闭症の女の子が先生役、残りの部員が生徒役で、ラーメンズの「日本語学校」を演じ、会場は爆笑に包まれた。先生は音楽にも凝って、オリジナルの曲を友人に作ってもらっている。劇にぴったりの曲で、生徒と観客の気分も高揚する。

幕が降りる時に、床に寝ころがって最後まで手を振る子もいる。夏休みあけに、演目が決まり、平日の部活だけでなく、週末や冬休みの練習もある。大きな舞台で演じ終えた達成感は一生涯の宝になるだろう。

そして宝といえば、自分の休みを返上してまで生徒たちを指導する教師こそ日本の宝だ。資源に恵まれない我が国の唯一無二の資源が人材だということに関しては、国民の合意が形成されていると思う。その人材の一番大切な子供時代の教育を担っているのが先生だ。

我が身を振り返っても、小学校の先生にはお世話になった。夏休みの初日に母が突如入院した時は、担任の先生が私をしばらく自宅で預かってくれた。

公平で、学業だけでなく子供の能力を最大限引き出すという先生がたくさんいるのが日本だ。

日本の先生で、学校の備品を横流したり、金持ちの子だからといって良い成績をつけるような人はいない。フィリピン人から、小学校の担任のせいで学校、ひいては社会全体に不信感を抱くようになったという話を聞いたことがある。小学生が努力することを空しいと感じてしまう社会は悲しい。

ある時、私はアメリカの教室で、目を離れた隙に財布をなくした。担任には、目を離れた私が悪いと言われた。確かに自己責任が問われる社会では、そのような指導で十分かもしれない。しかし、日本だったら先生も何とかして、盗みを働いた生徒に間違いを気づかせたいと考え、指導するのではないだろうか。

オーストラリアの先生は、とても前向きで、学校の雰囲気も明るかった。しかし、授業の工夫という点では日

本の先生に軍配があがる。オーストラリアは、生徒の能力に合わせて無理をしない。日本は、学習指導要領もあり、何をどこまで教えるかがはっきりしている。先生は「いかに」教えるかに情熱と誇りを賭けている。

しかし、どの宝にも言えることだが、磨いてやらないと錆びたり輝きを失う。手荒な扱いをすれば傷つくこともある。

二〇〇六年に行われた勤務実態調査によれば、小中学校では平日の残業時間が、月に三十四時間であった。身体的負担のある職業にしては高すぎる数値だ。そして残業よりも大変なのが、モンスターペアレントだ。文科省の公立小中学校の調査によると「心の病」で休職している先生が十年間で三倍増で、五千人を超えている。

事件がおこると、マスコミは学校の管理体制を批判する。学校は説明責任のために、何もかも文書化し、先生の仕事が増える。まさに悪循環である。

子供と一番多くの時間を過ごす先生には、子供以上に元気で輝いてほしい。せめて六時には先生に帰ってもらうようにできないものだろうか。

日本に政治問題ってありますか

上田 信隆

最近やたらと夢を見る。それもだいたい昔の戦後の夢である。小さい頃の学校給食のことなどを夢に見ることが多い。私たちは確かに戦後ひもじい思いをしてきた。しかしながらひもじさ以外はあまり厳しいとは思えなかった。あの頃は「絆」などという言葉を口にした人はいなかった。家族にしても社会にしても「絆」をわざわざ意識はしなかった。ひたすら生きるときに、「絆」は自ずから芽生えて来るものに違いない。

戦後しばらく、日本人はつましい生活の中から貯蓄に励んでいたという。貯蓄は美德であり、生活の知恵でもあった。「消費は経済の潤滑油」とはアメリカの文化であると思う。日本が借金付けになってやっとな今、成り立ち辛さを覚えてきた。一億総サラ金地獄を反省して、もう少し地道な生活習慣を取り戻したい。私たちはいままでの無駄遣いのツケを返さなければならない。子孫に

負担を先送りしてはならない。自分達の負債は自分達で返していくのは当然の道理である。

世の中の不具合に対して、直接的にも間接的にも私達には責任がある。すぐに「政治が悪い、この世は実に理不尽」などというのは、いい大人の言うことではない。なんとなればこの結果については、おおかれ少なかれ私たちの責任は免れないからだ。考えてみれば私たちは◆官僚の天下りを容認してきたのではなかったか◆組合の横暴を認知してきたのではなかったか◆自衛隊を憲法違反と知りながら認めてきたのではなかったか◆沖縄を悲劇の主人公と思いつつ、本土並みの復活などないと思っ
てはいないか◆原爆を落とされてもアメリカを恨んだり
はしなかった◆原発の技術を信じていなかったか◆こんな大きな津波など来るはずはないと思っていなかったか。農耕民族であり仏教国のDNAを持つ日本人は、自分の境遇を潔く（あえて潔いというが）諦観をもって肯定してきたような気がする。改革というのは流行りの言葉だが、どうも日本は守旧がよく似合う国柄だと思う。奈良・平安の貴族が支配した時代、江戸幕府が安定した政権を

維持した時代は、一面では平和なよい国でもあった。無論こんにちグローバルといわれる世界では一国の勝手を許すわけにはいかないが、少なくとも自国内ではもう少し多数決を認めることが必要と思われる。消費税と社会保障の一体化などは、どうみても皆が知恵をだし合うべき問題であろう。閣献金はどうみても犯罪であり、当該の政治家は過去の人になるしかない。原発についても、原発に依存しない社会を目指さざるをえないと思う。

気がつけば、日本は世界二位にほど遠くなりつつある。こんにち優良な大企業でさえ円高や災害で大苦戦をしている。かつて日本を引っ張っていた企業は、内部のたがを締めなおそうと懸命である。若手の人材をどう発掘するかも課題といわれている。日本のビジネスモデルは崩壊しつつあるともいわれている。

私は今、日本には政治問題は存在していないと思っている。今までの（私も含め）日本人の金属疲労が露呈しただけだと思っている。安定した政治のバックボーンがあれば必ずや日本は修正しつつ復活すると思う。

戦国時代、私たちの祖先は、領主が替われば平気で新

しい領主を迎えてきた。余計な政治的エネルギーを使わない知恵と合理性があった。主張より融和、浪費より貯蓄、経済より教育、等々いくらでも美德と知恵はある。幸福度さえも世界の上位を占めない今、せめて清貧であっても誇り高い国でありたい。

苦難な時代こそ有能な人材が出てくるのは歴史の証明といわれている。まさか浪速の弁護士がそれにあたるとも思えない。東京都の老人が突然歩きたすとも思えない。名古屋の減税が時代をリードするとも思えない。郵政だけで解散した軽薄な総理からはじまり、腹案がありますといひながら最期に辞めていった政治家を排出する素地がこの国にあるのは間違いない。日露戦争から太平洋戦争まで暴走した歴史を私たちは持っている。二度とこの轍を踏まないために、私たちは冷静になって選挙に臨まなければいけない。右へいこうが左にいこうが、国民の冷静な判断こそが間違いを是正することだろう。勤勉な日本にはまだまだ、人材も企業も多くの宝物をかかえながら出番を待っている。まだまだ捨てたものではない。決して諦めないことだ。

村に不学の家なく

垂水 健一

「村に不学の家なく、家に不学の人なし」という言葉が忘れられない。

極東の小さな島国日本が、いまは先行きが怪しいが、戦後なぜ世界の経済に大きな影響を与えるような強国になったのだろうか。再び世界から注目を集めるような日があるのだろうかと考えるとき、よくこの言葉を思い出す。私は樂觀的である。世界の最先端を行く国にならないまでも、日本は底力のある国だと見ている。その底力を支えてきたのが、この言葉である。

明治政府は読み書きそろばんを徹底した。この教育政策を明確にしたのが明治五年の太政官布告で、「必ず村に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん事を期す」といつている。これが日本人の識字率を大いに高めた。識字率の高さは知識の普及にも役立ち、小国ながら優れた頭脳を持つ多くの人材を生み出した。また、モノづく

りは金儲けのためばかりでなく、モノづくりを通して社会に貢献するという考えも育ってきた。私はこの教育政策は「日本の宝もの」だと思っている。

隣国中国は破竹の勢いで経済成長を続けている。この成長に日本はいつか飲み込まれるのではないかと考える人は少なくない。中国が経済成長を重視する「改革・開放政策」に転じたのは一九八〇年ごろからである。私はそのころから都合三回、合わせて約十年、中国に滞在してきた。中国の経済発展に問題はないのかを考えるときにも「日本の宝もの」がひとつの尺度になっている。

そのころ中国では豊かになるためのさまざまな方法が認められた。所属する企業や団体をやめ、多くの起業家が生まれた。しかし、そこで繰り広げられる競争は社会に貢献するという考えから逸脱する人も少なくなかった。

街に商品が豊かになった。靴店の店先で薄い茶色で形のいい靴を見つけた。はっきりした記憶はないが、たしか日本の五分の一くらいの価格であったように思う。「中国にもこんな靴が作れるようになったのか」と感激し、早速買った。ところが履いて三日目、小雨の道を歩いて

いると靴の紐が解けたような感じを覚えたので、足元をみると、靴の前方の糸がほどこけ、いまにも分解しそうな様子である。靴の寿命は三日だった。何のためにモノをつくるのか疑わざるを得ない。

そのころ、瓶ビールも販売量を伸ばしていた。だが十分な品質管理ができていないのか、新聞にはビール瓶が爆発したという報道が絶えなかった。

さらに自転車は当時の主要な交通手段であった。形もさまざまな新しい自転車が道路を走り回っていた。その自転車の前輪のスポークが突然バラバラになり、自転車が道路に転倒、乗っていた人が投げ出されるのを、一再ならず見た。

こうした事態を目の前にして、日本のモノづくりと、中国のモノづくりに差を感じてきた。中国では社会に貢献するという精神が欠けているのではないかと思った。

それから三十年余、中国はこうした問題の解決に取り組み、各国の生産を引き受ける「世界の工場」になった。注文ながら優れた製品をつくり、技術もモノづくりの考え方も変わってきたと思う。

中でも注目されるのは、広い国土を鉄道でつなごうという新幹線（高速鉄道）構想である。日本、ドイツ、フランス、カナダの技術を導入、「自主技術」を誇る高速鉄道を広げていった。

ところが昨年七月、浙江省で死者四十人を出す追突事故を起こした。高速鉄道は中国の発展を目指しながら、陸続きの中央アジアや東南アジア、さらにはブラジルなどへの輸出を計画している。日本の新幹線はまず国民の安全を考えて建設した。開通から約五十年、大きな事故はない。

中国も鉄道の設計や建設に手抜きがあったとは思いたくない。しかし私が「宝もの」とする、日本のモノづくりの背景にある、モノをつくって社会に貢献するという考え方が欠けていたのではないかと思う。

中国と比べて日本の産業がいま落日のような印象を与えているが、「村に不学の家なく、家に不学の人なし」に始まる、日本のモノづくりの伝統がある限り、日本の産業が復活する日が来るのではないかと思う。

伊勢神宮の式年遷宮

清水 勝

東日本大震災の復興を祈念して、伊勢神宮にお参りをすることにした。折角だからと桑名から伊勢までの旧伊勢街道を二回に分けて、合わせて五泊六日で江戸庶民のごとく歩いて伊勢神宮へ向かった。

俗界と内宮をつなぐ宇治橋が新しい。遷宮の四年前、平成二十一年に新しくかけ替えられていた。式年遷宮は二十年に一度の神様の引越し行事である（第六十二回は平成二十五年十月に行われる）が、その準備には八年前の平成十七年に行われた山口祭、木本祭（このもとまつり）から始まる。そしてご用材を伐り出す御杣始祭（みそまはじめさい）では、木曽地域に伝わる伝統的な三つ紐伐りと呼ばれる伐採方法によって信州伊那の木曾谷で執り行われた。

戦国時代の中絶による延期はあったものの、千三百年にわたって正殿の建て替えだけでなく、神々の調度品や衣装など七一四種一五七六点を全て二十年毎に一新する。

ここに日本の宝物としての技術の伝承がある。すなわち二十年前の遷宮で師匠の下で学んだ弟子が、今度は師匠として次世代の若者に手本を示す。生涯で最低二度は遷宮に携わることができる。そんな繰り返し永々と千三百年も続いて来た。このようにして、宮大工をはじめ、刀工、金工、漆工、織工、染色家、錦織職人、組紐等々の日本民族の工芸技術が維持・伝承されているのだ。この後は伊勢神宮について少しばかり触れてみる。

伊勢神宮は内宮と外宮があり、内宮には天照大御神が祀られている。別の名を皇大神宮といい皇室の祖先であり、太陽神でもある。外宮には食料を司る豊受大御神が祀られていて、朝夕の二回、天照大御神が外宮の豊受大御神を訪れて食事を共にされる。これが「日別朝夕大御饌祭」（ひごとあさゆうおおみけさい）で、大御神の給仕役を務める神職による神饌を運ぶ行列が千数百年にわたり朝夕二回続いている。

さらにその神饌は全て伊勢神宮専用の所で作られている。塩は五十鈴川の河口付近にある御塩殿神社の御塩浜で取り「御塩汲入所」に運ばれ荒塩に焼かれる。おめで

たい贈り物とされるノシアワビは志摩半島国崎のアワビを、その地の「御料鰯調整所」でひも状にむいて干されている。その他にも伊勢海老、篠島で獲れた鯛、そして最も多く用いられる鰹節等々海の幸は神宮の祭事には欠かせないようだ。ご飯やお餅は神宮神田で五十鈴川の清水を用い、清浄栽培による米が使われる。果物や野菜は二見町の専用農園「御園」で作られている。では御料酒は何が用いられるかというと、灘の生一本「白鷹」が大正時代の初め頃に伊勢神宮から指名されている。なお、調理に使う火は摩擦熱でおこした清らかな火に限られる。さらに、神様にお供える神御衣は、「神服織機殿神社」と「神麻統機殿神社」で織り上げられる。

さて、遷宮の儀式はどんな風なのだろうか。夜の八時頃に明かりが全て消されて「浄闇」の中を旧正殿から、先頭に松明の火がゆらめく中を楽の音とともに多数の神職の杵の歩む行列が続く、厳かに御神体を覆い隠す白い幕がゆらりゆらりと進んでいく。闇の中であり何も見えない。やがて新正殿に御神体に移し参られて「遷御の儀」が終わる。こんな様子なのである。

さて、今回の遷宮では内宮の正殿が奥の敷地から手前の敷地に動くことになる。巷のヒソヒソ話では正殿が手前に来た二十年は良きことが起こるとされている。奥の二十年を振り返ると、確かに日本経済の成長が鈍くなり、その上、東日本大震災もあつたことから、新しい二十年に期待したい気持ちでお参りさせてもらった。

なお、遷宮が済むと旧正殿は取り壊されるが、その木材は腐食している訳ではないことから、全国の神社に提供される。例えば、宇治橋の前後にある大鳥居は伊勢街道入り口にある関の追分の鳥居と、桑名七里の渡し口にある鳥居として再利用されている。

もうひとつ、伊勢神宮には別宮・摂社・末社・所官社を加えると百二十五社もある。中でも格式が高いのは元伊勢と呼ばれる宮川の四十キロ遡った上流の静かな杜の中にある『滝原宮』である。伊勢神宮の遷宮が終わった翌年に滝原宮の遷宮が行われる。

伊勢神宮は不思議な神の世界であり、日本の原点でもあるように思う。

俳句の世界に踏み込んで遇った宝もの

西川 知世

ずっと以前、いつの頃か忘れてしまったが、雑誌で「あなたは孤島に住むとき、どんな本を持って行きますか？」というような特集を読んだことがあった。世界的には聖書と答える人が多いと、うろ覚えだが記憶している。私もクリスチャンなので聖書は離しがたい……が、日本人として、歳時記も捨てがたいなと思っている。

企業OBペンクラブが発足して軌道に乗ったころ、事務局を手伝い始めた。ペン俳句句会が始まったのは平成五年八月のことである。平間真木子氏を囲んで、浅野正春氏、石川正達氏、亀井弘次氏、北田純一氏、小林正憲氏、三枝亨氏、佐分利治氏、鳴沢秀英氏、森田茂氏、吉井米三郎氏と懐かしい人々が思い出される。私はみんなのお世話係というつもりでその句会に二回目から参加した。俳句など読んだことも作ったこともなかった。漢字も読めなかった。この句会参加がその後の私の生活を大

きく変えることになる。その句会をてがかりにして、俳句の道をすすむことになり、私の生活はより充実していた。その時の縁が続き今に至って、平間真木子先生の後を引き継いでペン俳句に参加させていただいている。あのころの自由闊達な句会が守られているかどうかはなはだ自信がないが、メンバーに恵まれ楽しい句会となっていると感謝している。

最初の句会の帰り道、小さな「季寄せ」を買った。懐かしい思い出と共にいまも本棚にある。その後、「歳時記」というものを知って買い求めた。小さな簡便な「季寄せ」では物足りなくなっていた。俳句は足で作るという先輩の教えどおり、俳句は目で見たものを五・七・五の世界最短の詩形に作り上げていくものではあるが、季語が適切か、類句、類想はないか確かめなければならぬ。歳時記は手放せない。今、机の上で一番開くのは、もう絶版になっているが古本屋で見つけた『カラー図説 日本大歳時記座右版』という、重たい大きなものである。日本画や写真を駆使した美しいページはいくら見ても見飽きることがない。

歳時記はもちろん俳句を作るための季語の手引きに他ならない。しかしそれを超えて、本の中に詰め込まれているものは、日本そのもの、日本人の世界観そのものといえる。季語は日本人の多彩な表現、微妙な四季の移ろい、地方に伝わる祭や行事、食べ物、衣服にまで及ぶ。

それらが、季節ごとに、時候・天文・地理・生活・行事・動物・植物と、整然と分類されて載っている。大きな歳時記になると事細かくその謂れからがつまびらかに書かれている。これほどの細やかさと観察眼をもって、自国の自然や文化を書き集めている書物が他にあるだろうか。

私はとりわけ、時候の季語が好きである。季節の肌感覚の微妙な違いを季語で表すことには目を見張るものがある。日本人特有の繊細な感覚で、これから先どこまで共有できるのかと不安もあるが、私の世代では深く納得できることに喜びがある。例えば「日永」と「遅日」は別の季語として立っている。同じことなのだが、日永は短かった冬の日がめっきり長く感じられること。遅日は日中の長さよりも、暮れ方がおそくなることに重点を置いている。「永き日に富士のふくれる思ひあり 正岡子

規」「この庭に遅日の石のいつまでも 高浜虚子」——季語に託す感覚は素敵だ。

世界最短の詩である俳句の鑑賞を可能にしているのは季語の存在である。俳句を詠む、あるいは読む人たちの約束事、共通認識、つまり歳時記に拠って初めて作者と読者の一致がみられる特異な詩である。過去の季語だけが載っている歳時記では現代の用をなさない。たとえば、二月、初午も季語ならバレンタインデーも季語、六月、紫陽花も季語ならゼラニウムも季語。けっして俳句は古臭いものではない。短冊に筆でさらさらなんて世界でもない。新しい祝日も増えれば、新しい言葉も生まれる。夏の木々の茂りの「万緑」は今では立派な言葉だが、中村草田男の作例によって一般化した言葉である。

歳時記は鷹揚に柔軟に新しいものを取り入れながら進化してきた。これからもそうであろう。日本人の生きる姿勢と似ている。日本の宝が今回の悠遊のテーマだと聞いて、歳時記も日本の宝であろうと考えている。

歌枕

大野 ただし

今年は「日本の宝」という課題が出されました。このところ暗い話ばかりのこの国が誇れるものは何なのか、じっくりと考えてみたいと思います。

我が国についてまず思い浮かぶのは歴史の古さでしょう。勿論、古さだけでは四大文明には敵いません。しかし、その内容を見ると『源氏物語』のような長編小説を十世紀終りから十一世紀初めにかけて作り出した国は他にはありません。

この物語の中には八百首を越える和歌が載せられています。この少し前には、歌物語ともいえる『伊勢物語』という作品もありました。主人公は六歌仙の一人在原業平です。この物語の中には主人公の「吾妻くだり」の話があつて各地の景勝地を訪れます。もう一人の六歌仙、能因法師には『能因歌枕』という著書があり、この時代から自然の美しさを和歌にする風習がわが国には根付い

ていました。

能因には「都をば 霞と共に 立ちしかど 秋風ぞ吹く 白河の関」という歌を、京の屋敷の中に籠つて旅に出ずに作つたという話も伝えられています。

『伊勢物語』の「吾妻くだり」の中にも、八橋（今の知立市）でいとおもしろく咲いたかきつばたの花を見て、「からころも着つつなれにしつましあれば はるばる来る旅をしぞ思ふ」と『かきつばた』という五文字を句の上にすえて「詠んでいます。さらに旅を重ね、武蔵の国を流れる隅田河では、渡守が水鳥の名を都鳥というのを聞いて「名にし負はばいざこと問はむ都鳥 わが思ふ人はありやなしやと」

白河の関、八橋、隅田河、これらは歌枕の地です。

今NHKで放映されている「平清盛」の時代には、西行法師が各地の歌枕の地を旅し、特に東北地方については江戸時代に松尾芭蕉が『奥の細道』を旅して、西行の跡をたどつたため一層庶民にも親しいものとなりました。

西行は自分の歌を千載集に入れて貰いたくて『御裳濯河歌合』七十二首を藤原俊成のところに持ち込みます

が、俊成の虫の居所が悪かったのか、この中の秀歌は全て千載集から外されています。

そのお蔭でこれらの秀歌の全てが『新古今集』に採用され、九十四首と歌人中で最高の数字となりました。

さて西行の東北の旅は二回あります。最初は一一四三年、二十七歳のときです。

この時の旅で二人の足跡が共に残されたのは「遊行柳」です。西行の「道のべに清水流るる柳かげ　しばしとてこそ立ちどまりつれ」に対して、芭蕉は「田一枚　植て立去る　柳かな」の句を残しています。

また平泉では「とりわきて心も凍みて冴えず渡る　衣河見に來たる今日かも」と前九年の役の安倍貞任を偲び、一方芭蕉は藤原三代の栄華を「夏草や　兵どもが　夢の跡」と記します。この様に歌枕は我々日本人の心の中に根を下ろしています。

ここで少し別の角度から今の日本の自然について考えてみましょう。

敗戦のときには「国敗れて山河あり……」と杜甫の詩を思い出すことができました。

今度の原発事故ではどうでしょうか。とてもそんな心境にはなれません。戦後日本は変わってしまいました。どのように。

私は、日本を駄目にしたのは田中角栄の『日本列島改造論』だ、と信じています。

あの本が出た頃、ドイツにいた私はこんな体験をしました。

秋田県のミッションが、県に製紙工場を誘致するかどうか検討する目的で、スエーデンの製紙工場の見学に來られました。私のいた会社の思惑は、高崎製紙という子会社を、秋田県に新工場を建てることによって大きくしたいということでした。

しかも角栄からの直接の要請によるミッションでした。スエーデンの製紙工場は、綺麗な湖に製紙排水を垂れ流しにしていました。当時の秋田県の人たちの気持としては、「表日本に追いつけ」の一念で公害に目を瞑ろうとしていました。「秋田の美しい自然を観光に」という私の提案は見向きもされませんでした。今その工場は止められています。「兵どもが夢の跡」

渦型都市 大江戸

池田 隆

江戸の古地図を見ていて気が付いた。都市の形が実に特異である。大都市の多くは放射環状型、もしくは格子型の道路網である。対して江戸は大小の「の」の字を重ねた渦型の堀割（水路網）を基本としている。

内側より掘割を辿ると、江戸城本丸の在った御城（現東御苑）と西御丸（現宮殿、吹上御所）の境より右回りに、平川門、大手門、馬場先門、桜田門、半蔵門、田安門と続き、竹橋へ至る。この小さな「の」の字が内堀である。

つぎに九段近くで外へシフトし、雉子橋、一ツ橋、常盤橋、鍛冶橋、数寄屋橋、土橋、虎ノ門、溜池、赤坂、四谷、牛込、お茶の水と辿り、柳橋で隅田川に出る。この大きな「の」の字が外堀である。外堀の先は隅田川を下り、永代橋の下流で江戸湾に出る。

このルートに沿った全長二十一キロを三回に分けて散策した。内堀の周囲は時代を越えて日本の景観美を今に

伝えている。雉子橋から常盤橋にかけての外堀は堀の上に首都高速道路を通し、暗く無残な姿である。常盤橋から赤坂までの外堀は明治政府が資金調達のために埋立て分譲し、今では東京の中心街になっている。「外堀通り」の名前以外に昔の面影は見当たらない。赤坂より牛込にかけての外堀は水を湛え、御門の石垣や土塁が残り、都民の憩いの場となっている。

徳川幕府による江戸の都市形成に興味を覚えた。

家康が秀吉から関東への転封を命じられた時、何故この江戸の地を選んだのか。未だ戦乱が残る時期である。

常識的な選択ならば、北条氏の小田原を引き継ぐか、旧首都の鎌倉や律令時代の国府跡を選ぶだろう。

家康の入封時、今の汐留から日比谷にかけては浅瀬の海が入り込み、日本橋から銀座に向って微高地が伸びていた。彼が征夷大將軍になると、先ず全国の大名を動員してこの日比谷入江を埋め立てた。

家康の死後、この天下普請はますます本格化する。江戸湾に直接注ぐ平川を隅田川へ放水させようと、九段付近でせき止め、本郷台地の御茶ノ水に掘割を開削する。

名も神田川と改めた。さらに牛込・赤坂間に堀を掘削し、神田川と溜池を結び、掘割の基本形を完成させた。また神田川の上流部は上水路として活用した。

渦は万物の誕生や成長と深くかわる。

渦潮や巻貝をはじめ、大は台風や星雲、小は種子や胎児まで、全ての渦には共通点がある。周囲に広く分布する物質やエネルギーを渦中心に凝集させる現象である。縄文土器の渦模様や勾玉は生命誕生の神秘を敬う心の表れである。卍印は世界中で幸運を意味する。

江戸散策中にふと考えた。家康は万物の誕生成長にヒントを得て、この独創的な渦型都市を思いつき、それに適した地勢・地点を選んだのではないか。秀忠と家光は彼の意図を汲んで、忠実に計画を実行したのでらう。

巻貝の殻は頑丈で外敵に強く、開口部は小さい。そこを閉ざせば中は至って安全である。堀も殻と同じく防御に強い。唯一の開口部である汐留付近に戦力を集中すれば、誕生まもない江戸の城域も安泰である。

渦型都市は成長性にも優れている。家光以降に世が安

定すると、江戸は市街地を広げ続け、人口を増やし、世界一の百万都市へと発展する。渦型水路による必要物資の円滑な搬入搬出がその拡大を容易にしていた。

江戸初期のかかる都市計画の思想は明治以降に忘れ去られ、放射環状型の都市になった。そのために今は山手線沿いの副都心駅で乗換え客が混雑を極め、環状道路と放射道路の交差点が交通渋滞の起点となっている。

昨今、二つの郊外電車を都心の地下鉄線で結ぶ串刺し型の相互乗り入れが多くなった。しかし各地下鉄線の駅の数に限られ、別の地下鉄に乗り換える客が多い。渦型思想による卍型の鉄道網にして、乗換え不要の通勤通学客の比率を増やしたいものである。

例えば環状の外堀通りに沿って深さ方向に何層もの地下鉄を通し、各層の地下鉄がそれぞれ違う郊外電車と乗り入れる案は如何だろう。田園都市線ならば、永田町、大手町、新橋と回り、永田町に戻る。東武東上線は大手町、新橋、永田町を経て、大手町に戻る。

江戸散策からの帰宅がラッシュ時間となり、電車内で、家康の意図を汲んだ東京の都市改造を考えていた。

日本とトルコの絆

野瀬 隆平

昨夜アンカラを出た寝台列車は、地中海に面したイズミールに近づいていた。スモッグに覆われ、じつとりと冷たいトルコの首都とは違い、明るい日差しが注ぐ海辺の町にもうすぐ到着する。今日は十二月三十一日だ。

イズミールで迎えた大晦日の夜、宿泊しているホテルで年越しのパーティーが開かれるという。部屋にこもっていても仕方が無いので、パーティー会場に行ってみた。一人でワインを飲んでみると、さびしそうに見えたのだろう、隣のテーブルに座っている上品な中年の夫婦が「日本の方ですか」と声をかけてきた。雑談をしている内に、明日は是非家に遊びに来いと親切にも招待される。元日に訪ねてみると立派なお宅で、大いに歓待された。

トルコ政府からの要請で、イスタンブールの近郊に造船所を設立する計画があり、トルコに長期間滞在してい

たが、なかなか見通しがたたず一人で年を越すことになったのである。

もう四十年前も前の事だが、年末になるといつもこの思い出がよみがえり、トルコという国に思いを馳せる。特に今年は、東日本大震災の際にトルコから受けた支援の記憶が重なり、格別の感慨を持って両国の絆について考えていた。

三月の大震災のとき、トルコはいち早く三十名以上からなる救援隊を日本に派遣し、長い間日本にとどまって支援してくれた。そして十月に、今度はトルコの東部で大地震が起き、日本から救援のための物資や人が送り込まれた。トルコから受けた支援に対するお返しの意味も込めて。

ところが、救援のためにトルコに滞在していた日本人が、大きな余震のために宿泊中のホテルが崩れて、亡くなったのである。

トルコの人たちは、自分たちの国のために命を落とした勇氣ある日本人、宮崎淳さんを讃えるべく、イスタンブールにある公園に宮崎さんの名前を付けた。

痛ましい災害を通してではあるが、トルコと日本との絆がさらに強まった。「さらに」というのは、両国の深い結びつきには歴史的な背景があり、何も今回に始まったことではないからである。

トルコ人は親日的で日本びいきであるといわれている。その理由の一つは、日露戦争に由来する。オスマン帝国時代からの宿敵であるロシアを、極東の小さな国、日本が負かしたことに由来するというもの。その証に、今でもイスタンブールにはトーゴー（東郷）やノギ（乃木）の名前の付いた通りや地名があると聞く。

もう一つは、それより十年以上も前のことであるが、一八九〇年にトルコ皇帝から明治天皇表敬のために派遣されたオスマントルコ海軍の軍艦「エルトゥール号」が、帰りに和歌山県の串本沖で台風により座礁して、乗組員六〇九人のうちの多くが遭難死するという痛ましい事故があった。この時、地元の漁民が総出で献身的な救助活動を行ったのである。自分たち自身、台風により出漁できず、食料の蓄えがわずかだったにもかかわらず、助け出した乗組員に、浴衣などの衣類はもちろんのこと、卵

やサツマイモ、それに非常用のニワトリまでも与えた。そのお蔭で数十人の乗組員が助かり、翌年、日本海軍の練習艦でトルコに送り届けられた。串本には今でも亡くなった乗組員の慰霊碑がある。日本人のこの温かい厚意は、トルコの人たちの間で今も語り継がれている。

それから九十五年が経った一九八五年にある出来事がおきた。イラン・イラク戦争で、テヘランに在住の日本人がおよそ三百人取り残された。緊急に救出する必要があるが、日本側は自衛隊機も日航機も飛ばせずに苦慮していた。それを救ったのがトルコだ。トルコ航空が危険を冒してまで飛行機を出し、日本人を無事救出してくれたのである。トルコはそれについては如何なる見返りも要求せず、日本人は大いに感動した。かように、お互いの命を助け合ったという歴史を持つ両国が、トルコと日本である。

美談の応酬が百年以上の時を経て、いまだに続いているのだ。日本ではこのような過去の出来事を覚えている人はあまりいないかも知れないが、トルコの人たちは忘れないでいる。

ふるさとを創る

西川 武彦

現役を退いてから十年間、ご縁があつてJICAのセミナーで講師などを務めた。発展途上国の準高官を招いて、日本の高度成長の背景、それを支えた仕組みなどを講じ、自動車など製造業の現場を視察する。三週間の最後に、研修で学んだことをベースに、自国の国づくりの中で、夫々の持ち場で実現すべき中期的施策を卒論で纏める。毎回十五名ほどだから、都合五十カ国一五〇名と付き合つたことになる。それらの国々から311の救援に駆けつけたボランティアが多数いたのはODAの賜物かもしれない。

セミナーではカントリーレポートというセッションがあり、国情に加え、風土もビジュアルに紹介する。日本のように四季温暖で緑溢れる国はない。卒業証書を渡した後のお別れパーティーでお国からの贈り物が渡される。アフリカのコンゴの男性は、「私のところには何もあり

ません。私が描いた故郷です」と、A4の紙に描いたペン画を贈ってくれた。心温まるギフトだが、土漠と思われる平地に、茅葺屋根と思しき民家が数軒並び、木が一本づつ添えられている。細い川に小船が舳っている。緑は匂つてこない。

GNH（国民総幸福）を目指すブータンからの研修生も印象的だった。謙虚さの中に幸せが覗かれた。案内パンフには、祭りを観に行く少年僧や、稲刈り風景が載っていた。撮影した関口照生氏は、「ブータンの地を初めて訪れた時の印象は懐かしさと安堵感であつた。山間に建つこの国の佇まいは日本の原風景を思い起こさせた」と述べている。

現役時代、数多くの海外出張を経験した。欧州からの帰路、ジェット機が不毛のシベリアを越えて日本海に入り、やがて緑の山野が雲の切れ目から姿を現すとき、思わずほっとしたものだ。小ぶりだが緑溢れる山河、起伏のある田畑が広がる。アメリカから太平洋を越えて戻る時もあり。アジアから九州、四国の上空に帰る時もあり。ヨーロッパにも緑は沢山ある。アジアやアメリカ

にも。が、『故郷』を口ずさみたくなるような里山はない。季節の移ろいを常を感じる四季温暖な国。こんな素晴らしい国は世界広しといえどもないのだ。

前掲のセミナーで、筆者は、国を二五〇年も閉じた中で学問、文化、モラルが熟成された稀有な江戸時代、脱亜入欧で富国強兵を目指して走った明治・大正から敗戦まで、高度成長とバブル崩壊、それ以降と区切り、夫々の時代の国の仕組みを人材育成と絡ませて講じた。今振り返るに、バブル以降については、筆者自身、国のかたちが見えず、グローバル化、IT化、多極化といった言葉を散りばめて適当に逃げていた。総じて研修生たちの大きな関心は経済振興施策、失業対策等だが、国策が右往左往する現状だからやむをえまいと自己弁護している。

『日本の宝』で、まっさきに浮かんできたのが里山である。筆者は二十年前、八ヶ岳山麓に小屋を作り、都会と棲み分けている。退職後は田舎の比重が高まり、仲間と休耕田の活性化、景観保全のため稲作で汗を流している。里山というより高原であるが、東京との往復で里山風景を楽しんでいる。お気に入り、韭崎から小淵沢に通

じる農業道沿いの里山風景。四季折々飽きることがない。小淵沢が最寄りのICだが、韭崎で下りてこの道を使う。

仲間には高原に移り住んだ人達も増えた。森林の間伐を請け負い、伐った材木で家を建て薪を調達する、身障者施設を手伝う等々、持ち味を活かして自分なりに地元溶け込んでいる。今や、ネット・携帯・TVなど都会と変らない。ちよつと足を伸ばせばコンビニやスーパー、図書館、音楽ホールも。土地が安いから、各種大型店も。若者が少ないのはこの地方も例外ではない。リタイア組は高齢者だから、田舎の再生に役立つとは必ずしもいえない。そんなことを考えていたら、各県の「移住NPO」「移住者政策」「移住塾」などを新聞で報じていた。町やNPOが仲介して空き家や土地の取得を紹介、資金的に援助し、仕事口を斡旋する仕組みだ。若者や中間層向けもある。故郷を捨て都会のサラリーマンで定年までの時代は去り、昔風高度成長の再現はありえない。非正規雇用、失業率等、先が見えない中、就活の幅、生き方の枠を拡げて、地方の特色を活かす里帰り、新しい故郷創りを支援援助する施策を進めたい。

日本の宝とは

富岡 喜久雄

今年の特集テーマは「日本の宝もの」と「わが人生に悔いあり」とのこと。人生に悔いは大ありだが、ゴルフではないが、タラ・レバは仮想でしかないから、人生は必然の天命と考えるしかなかろう。宝さがしは、沖縄出身の歌手も「これがシマンチュウの宝」と郷土の誇りを歌っているし、何が宝か探してみようと考えた。そこであれこれ思いを馳せると、最近とみに日本及び日本人の美点を喧伝するような動きが目立つような気がしてきた。

昨年の大津波、大震災による復興を精神的に鼓舞するためだろうが、公共放送も明治時代の心意気を思い出せと言わんばかりのドラマを放映するし、その他「頑張ろう」の掛け声のようなものばかり多いと感じてしまう。

待てよ、半世紀ちょっと前、日本は不敗の神国で「一億火の玉だ」と言っていたのに、一九四五年八月十五日からは「一億総懺悔」と言いなおし、残してもよさそうな

日本の文物制度の美点を捨て去り、十二歳国民と言われながらも生活の豊かさを求め、アメリカナイズを受け入れて、ガンバリズムから合理主義に転向した筈である。

あの頃は政府も国民もマスコミも、まことに変わり身が早かったと思う。国民学校の教室で幼い学童にビンタをくれていた教師は、臆面もなく忽ちホーム・ルームや学級委員選挙を取り入れた。この変わり身の早さを思考の柔軟性とも言いかけて釈明することもできようが、それより節操のなさでしかないと思えて、未だに筆者のトラウマになっている。

嘗て日本人論が流行った頃にイザヤ・ベンダサンなるペンネームで出された「日本人とユダヤ人」や中根千枝教授の「タテ社会の人間関係」を思い出す。これらはどちらかと言うと、美点を挙げるといふより、日本人に反省を促すものだったように思う。なのに、また勇気だの気概だのと精神主義が流行りだしたかと思うと気が気でない。マスコミは、外国人が震災時の映像をみて、東北の人々が冷静に秩序ある行動をとったことを日本人の美点だと言ったと報道するし、言論界も古い文献を探し出

しては、外国人から見た日本人の美点を謳いあげる。「菊と刀」に始まり、アラン・ダイアーの「大日本」(Britain in Asia)にまで遡る始末である。これらも冷静に読めば、後発の近隣アジア諸国と比べての日本及び日本人のちょっとした比較優位性と特異性を指摘しているに過ぎないと読める。決して著者の国を凌駕するとまで褒め上げているわけではない。

幸か不幸か、筆者は仕事上、所謂、先進国でない発展途上国を回る機会が多かったのだが、いずれの地でも後進性と言えるような環境、文物に出会ったとき、当初の不慣れから来る驚きはあっても、その国や人々を優劣比較の目で見たことはなかった。何処でもいつか其処が好きになるという、まことに軽薄な輩であつたと思う。

どの国もその国民も、その風土環境から生まれる文化、性行を持つのは当然で、特有の国民性とは思えないからである。そこで「日本及び日本人の宝」は何かと考えてみるのだが、これといつて思いつかない。桜や四季や伝統芸能や、気質としての清潔感や纏まりのよさ、潔さといったものも、「江戸の敵は長崎で」の喩えのとおり、

島国という地勢的環境の産物でしかなからう。

我々日本人は他人との協調を優先し、個としての判断より、集団で決め、集団で行動しがちである。このことは、湾岸戦争時の虜囚経験から、他国人のそれと比較できたことによつて生体験として実感したものである。

情緒的で村社会の精神構造が生きているのか、「死なば諸共」・「みんなで渡れば怖くない」となる。そこでムードに流されがちな我々は、自虐的に自らの欠点を探し出し、それを意識するように心がけるほうが有益だと思える。いまや企業も人もグローバル。これからは地球人として、個の判断を信じ、時の風潮に流されない思考と行動をしたいものだ。

結果として筆者は、日本の宝を挙げ得なかった。それでも自身の行動の節目に顔をだすモットーは、学んだ中学校の壁面に書かれた「義を見てせざるは勇なきなり、これぞ日本人という」レリーフの文句である。

これは自己矛盾ではないかと悩まざるをえない。

「カルタゴ」の教訓

門屋 信行

「賢者は歴史に学び、愚者は経験からしか学ばない」とは、ドイツ帝国初代宰相ビスマルクが残した言葉である。世界経済の行き詰まり、「アラブの春」に見られる中東の民主化と混乱、EUの経済危機問題、日本の震災、原発、放射能汚染など、向き合わなければならない課題は山積みである。いま、日本のリーダーは国家の行く末の拠り所を何に求めているのか。過去の成功体験の「経験」か、古の数多の人々の「歴史」の知恵か？定かではない。

しからば、此処に一冊の書籍がある。評論家であり政治家者でもある森本哲郎氏が記した「カルタゴの遺書―ある通商国家の興亡」(註)である。これは一九八九年、いまから二十三年前に上梓したものであるが、現在にも生きる示唆に富む内容である。此処に氏の言葉を引用しながら現代を考えてみたい。

「これは、ある『経済大国』のたどった歴史、ひとつの『通商国家』の暗示に富む物語である」と書き始め、さらに「その国は今から二千年以上も前に地中海世界で繁栄を誇った大変活気ある商業国家だった。だが、ひたすら富の追求に励んだその努力が仇となって、わずか数百年にして世界から姿を消してしまうことになる。富の蓄積が周辺諸国の羨望を生み、羨望は嫉妬に、嫉妬は恐怖に、恐怖は憎悪へと高まり、やがて勃興してきた『軍事大国』によって、徹底的に破壊され、滅亡してしまうのである。悲惨な最期をとげるその経済大国は『カルタゴ』と呼ばれた」と続く。二千年以上も昔の話と言うなかれ。さらにたたみ掛けて「人間社会の基本的な姿は、それほど、いや、ほとんど変わっていないのである。人間の歴史は、まさしく連綿と続いている。権力をめぐる争い、利潤のあくなき追求、このふたつの欲望を中心に、人間世界は少しも変わることもなく現代に至っているのだ。それを考えれば二千年まえの時代も、つい昨日のこと、といつてよい。(略)だからこそ、私たちは歴史に学ぶ必要があるのだ。前車の轍を踏まないように。歴史の教訓

をしつかりと生かすように」と述べ、興亡に至る歴史を辿る物語である。余談であるがカルタゴは現在のチュニジアに位置する。そして、二〇一〇年から翌年にかけてチュニジアで起こった「ジャスミン革命」により二十三年間続いた独裁体制が崩壊し、その飛び火が周辺のエジプト、リビアに波及し、所謂「アラブの春」と呼ばれる革命が引き起こされている。カルタゴ滅亡後、同地のチュニジアから世界の変革が始まり、かつての敵対国―ギリシャ、イタリヤ（ローマ）―が崩壊の危機に見舞われているのは、これまた歴史の不思議さである。

さて再び目を転じて日本の行く末に戻ろう。徳川幕府の金属疲労に乗じて開国を迫ったのがペリー提督率いる米国であった。ここから日本と米国との腐れ縁がはじまった。以来我が国は富国強兵に努め、日清、日露戦争を掻い潜り、世界の帝国の仲間入りを果たしつつあった。その驕りと外国からの圧力に引き込まれるように第二次大戦に突入していった。そして米国による徹底的な破壊に見舞われた。原子爆弾という実験兵器の試験場にも使われながら。日本が味わった第一次敗戦であった。しか

し日本はしぶとい。戦後さらに再建に努め、世界第二位と言われるまでに経済発展を遂げた。しかしそこに米国からの圧力が続く。第二次敗戦は貿易摩擦（繊維、自動車）による日本弱体化政策である。日本はさらにしぶとい。貿易摩擦は技術力で補い、圧力を克服していった。米国は執拗である。次は金融戦争を仕掛けてきた。それがプラザ合意という名の日本通貨の弱体化である。その結果、米国の圧力による内需拡大・過剰流動性（インフレ）によって引き起こされたバブル経済、そして経済破綻。これが第三次敗戦であり、今もってその敗戦処理に引きずられている。カルタゴはローマとの三次に渡るポエニ戦争で壊滅に至った。

さて日本の歩むべき道筋はいかに？ カルタゴは得意技「商業国家」に固執して滅びて行つた。我が国は千数百年後の「カルタゴ」にならないために、経済偏重から脱却し、日本の持っている独自の文化―日本の宝―を見直し、新たな「得意技」を見つけないければならない。註：「ある通商国家の興亡」森本哲郎著（一九九三年・P H

「宝もの」は後世に伝えられるのか？

浜田 道雄

日本中世史家の網野善彦教授が二十年ほど前に書かれた「日本の歴史をよみなおす」でいつておられることだが、神奈川大学のゼミで宮本常一さんの「忘れられた日本人」（岩波文庫）を使われたところ、学生と自分との間の生活感覚がひどく違っていることに気づかれたという。例えば、この宮本さんの著書にしばしば出てくる「苗代」がどんなものか、学生たちは全く知らない。見たこともない。牛馬が田畑で働いている姿を見たことも全くない。牛ならばせいぜい牧場で乳を搾られている姿、馬ならば競馬場で競争している様子しか思い浮かばない。これは知識のあるなしの問題ではなく、教授の世代と学生世代の間の生活自体が違っていることからくる違いと、そこからくる考え方の基本が違ってしまっているためだろうと、教授はいわれる。

そういうえば、私も最近似たような経験をした。先日、

小学生の孫娘と電話で話している際、何かの絡みで「お父さんの尻を叩いて、『頑張れッ！』っていつてあげなきゃね」というと、孫は「エッ？ 何のこと」と戸惑っている。そうか、この子は「尻を叩いて励ます」ということを知らないんだと気付いた。実際、孫娘は尻を叩かれ、折檻されたこともないし、牛や馬がムチで尻を叩かれながら車を引き、田畑を耕す姿も見たことはない。とはいえ、彼女は「牛馬の如くこき使われる」という言葉も、その意味も知っている。しかし、これは書物の上で得た知識であって、自分の生活体験に根ざした言葉として理解しているわけではない。

このような世代間ギャップは、江戸時代から明治、大正を経て第二次大戦後のある時期まで、私達がごく普通の「常識」として継承してきたものが、今日ではほとんど通用しなくなっているということを意味している。民話や昔話に出てくる「きつねやタヌキに化かされる話」、われわれの子供のころ、夜一人でトイレに行くときの「トイレの暗闇への恐怖」などは、今日の若い人達には、ま

「へブライ語で語られる話」であろう。

こうした一般市民の生活に顕著な変化が見られるようになったのは、高度成長期にはいつてからのように思う。この時期の急速な技術革新の中で、農村では牛馬を引いて水田の中を這いずりまわる作業がトラクターの運転に変わり、町工場では熟練工が旋盤を回し、カンに頼って精密部品を作った作業が、NC旋盤やロボットが自動的に作り出すオートメーションに置き換えられた。そして、この変化の中で、人が働くことの意味や内容が変わり、人々と自然や身の回りとともに暮らした家畜との関わり、ひいては社会生活の有り様が変わっていったのだ。そこでふと思いついて、春の一番初めの農作業である「田打ち」という言葉を、ウィキペディアで引いてみた。と、「春や秋にトラクターを使って、田んぼを掘る作業」とある。やっぱり、そうだ。もはや現代では、我々の知っている農作業、人や家畜が汗を流し、腰を痛めて働いた労働は、人々の意識からは消えて、それは「機械」がソソクサと行ってしまう作業なのだ。

「悠遊十九号」ではエッセイの特集テーマに「日本の宝もの」を選んだ。企業OBペンクラブの会員諸氏の多くは、高度成長期を支え続けた企業戦士でもあるから、江戸、明治以来私たちの先祖が蓄積してきた日本の宝ものを思い浮かべ、高度成長期に日本の繁栄のためにいかに多くの努力をしたかを思いながら、日本の誇るべきものを考え、閉塞感の強い今日の日本社会に活を入れたいと、作品を練りあげておられることだろう。

だが、二十年前に網野教授に生活感覚や考え方が自分とは違っていると悟らせた学生たちは、今日では四十年代。現代社会の基幹世代となっている。機械化、情報化のなかで、生活も労働も違った感覚で捉える様になったこれらの人々に、私達が「日本の宝」だと信じている、江戸時代以来何百年にもわたって蓄積し、伝えてきた文化や技術、高度成長期に私達が築きあげてきた成果をうまく理解させ、継承させることができるのだろうか。私は、これはかなり難しい仕事だと思っている。

英語を読もう会

昨年の会では政治、経済に加え、オペラ、プロ野球、原発事故、万葉集、医学、福島原発事故後の公共事業改革など、実に多岐にわたるテキストが取り上げられ、原文を読みながら見聞を広めることが出来ました。悩みは相変わらずの担当講師不足です。会員の中で英語を愛される方の挙手を希望しています。

六月	平尾 富男	"Mirror for Americans - Japan," Part II "Punish and Restrain," American Diplomacy: The Sources of Soviet Conduct by George F. Kennan
七月	大泉 潤	夏休み
八月	松谷 隆	CT Scans for Lung Cancer trigger Debate, Washington Post
九月	野瀬 隆平	The Ten Thousand Leaves by Ian Hideo Levy
十月	中村 將陸	Commencement Address delivered by Steve Jobs from Stanford Report
十一月	平尾 富男	Utility Reform Eluding Japan After Nuclear Plant Disaster
十二月	大泉、中村 (將)	
一月	平尾 富男	
二月	大泉 潤	
三月	松谷 隆	
四月	野瀬 隆平	
五月	中村 將陸	

the Budget

特集・我が人生に悔いあり



後輩の急を助けられなかった悔み

大庭 定男

一九四五年八月二十日頃、西部ジャワ・バンドン市の旅団司令部は、十五日の敗戦、十七日のインドネシア独立宣言などで騒然とし、誰しもが経験したことの無かった事態が急速に進展していた。私は二十三歳、この司令部付きの主計中尉であった。

司令部管下にはジャワ防衛義勇軍（インドネシア人だけで編成された部隊、PETA）を指導監督する義勇軍指導部があり、Y主計少尉がいた。長身、白面で物腰の柔らかな彼のあだ名は「坊や」であった。この「坊や」が遠隔地の義勇軍部隊解散業務のため、大金を持ち、治安ようやく乱れんとしている地方に出張を命ぜられたのである。まさに狼群の中に怖々と入っていった子羊であった。

そのY少尉より私に電話があり、「自分の持っている金（軍票）を渡せとPETAから強く要求され、困って

いるが、どうすべきか」という。電話を通じ、インドネシア語で怒鳴りあっている緊迫した空気が伝わって来る。「君の上司の指示を仰げ」と返事した数分後、また同じような電話があり、同じように返事した。このような電話が数回続き、「このままでは危ないです」という。私は軍の建制（命令系統）を乱すことを避けるとともに、敗戦で今後どうなるかわからない時に管轄外のこととひっかかりたくない、という自己防衛心理が強く働いていたことは否めない。

一方、Y少尉は、

①直属の上司に指示を仰いだが、良い返事を得られなかったか、

②この為、「上司頼むに足らず、大庭中尉なら何とかしてくるであろう」と思い、何回も哀願するような電話をかけてきたに違いない。

この状況下で、私に勇気があり、真にこの後輩を助けてやろうという俠気があれば、「よし、判った。君の上司には後から謝るから、身の安全を優先して、金はインドネシア側に渡して帰ってこい」と答えることが出来た

であろう。彼もまた、これを期待したので必死になって何回も電話してきたのである。私のつれない返事に、「頼りになると思った大庭中尉も案外駄目だな」と失望したに違いない。

不安な一夜は明けて、彼は無事に司令部に帰ってきた。彼がいかにして危機を乗り切ったか、私は彼に聞く勇氣を持たなかった。

このように、日本軍の武器、弾薬、資材、食糧などを「渡せ、渡さぬ」で衝突となり、日本軍にも多くの犠牲者が出た。

復員後、偶然、彼と仕事を通じて関係が出来、たびたび会ったが、バンドンでの出来事について話すことはなかった。

また、私の滞英中に彼の令弟がケンブリッジに留学していたので、出来る限りの援助をした。令弟の日本文学についての著書出版につき、会社の地域貢献プロジェクトに組み入れ、資金援助したこともある。私の心の奥底には、バンドンで彼に充分な対応が出来なかったという

負い目もあったことは否めない。

令弟の奥さんから、

「なぜ、こんなに良くしてくれるのですか」と質問されたこともあったが、私は終始笑って答えなかった。



マイ・ウェイ

安藤 晃二

欠席常習犯を続けていた高校の同窓会に久しぶりに顔を出した。東京に住む同窓の集まりで、十年程前に東京〇高会が発足した。地方の高校ならではだ。場所は霞ヶ関村から至近のプレスセンターホール。元来の発想は「霞ヶ関〇高会」、人脈造りの交流を目指したとか。始まって見ると多士済々、職業的交流の目的はどこへやら、皆、心の故郷と伝統への愛着に満ちて、適度な興奮の時間を共有した後、元応援団長のリードの下、校歌斉唱とシユプレヒコールで散会する。毎年、判でついた様なパターンを楽しんでいる。ビジネスの人脈造りの方はその意図に反して余り進むふしが無いのも可笑しさを誘う。

今年は同窓生講演で、終戦の頃に最後の〇中時代を経験した常連で八十四歳の大先輩が、戦中戦後の学校生活について語った。長年オーナービジネスをされた方であ

る。頭脳明晰、理路整然とした歯切れの良い語り口であった。しかし、本題はその長広舌の後に控えていた。「綺麗どころ」と呼ぶには憚られる、上品な雰囲気を漂わせた二人の和服姿の年配の女性が三味線を抱えて待機していた。当のご本人が着物姿で出演した理由、それは「小唄」の披露であった。着用している着物の由来を聞けば、その着物は京都へ特注し、細かく母校名を模様として染め込んだ唯一無二の代物である。「男と別れた芸者がその想いを胸に、雪の晩、番傘をさして新橋方面に帰って行く」、そんな艶やかなくだりが熱演された。「小唄は、本当に健康に良いんですよ。皆さん是非おやんなさい」が結びのメッセージであった。成るほど、洋楽的に印象を述べると、はりの効いた発声はもとより、ピッチが高い。テノールで行くと、上のAを超える音域にまで達すると思われるほど高い。そこで小唄は巧みにウラ声に切り替わる。またストーリーを訴えるのが、正にオペラの Aria に似ている。ペラフォンテのダニーボーイだって、クライマックスはウラ声だ、僕にも唄えるかな、などと思いを巡らせる。この先輩の講演はより強いメッセージ

を伝えていた。その唄う姿は至福の頂にあるように見えた。この明らかに人生の中で解放された領域から語りかけるパフォーマンスに接して、僕にとってひとつの重要な課題「歳を重ねること」の意味合いがやんわりと説明されはじめたような感慨を持ったのである。

辰年を迎え、年男の僕は今、五十年間の企業生活に区切りをつけつつある。所詮サラリーマン、その響きは、気楽な稼業と皮肉った傑作、植木均のあの歌を思い出させる。本当はきつと誰もが、涙が出る程仕事に投入の連続であつたに違いない。前へ前へとダツシユし続けた日々、一方、振り返れば、悔いの連続、「大過なく」等とは程遠い企業人生ではあつた。商事会社で企業戦士が戦つたなどと言つて見ても、ニューヨークからトロント、ロンドン、シンガポール、テキサス州からメキシコまで、世界中を旅する中で、僕の人生の選択に振り回され、少なからず影響を受けた家族がいる。とても自らの職業生活のみ懐かしんで許される訳がない。その後も僕はずっと働き続けた。この五年間はドイツ企業に勤め、本社の

あるバイエルンとの間を往復したり、新たな友人を得て生き生きと過ごした。七十歳になったら同期のゴルフ会も解散してお別れ会をやるう、と語つた友人の言葉。あれから随分時間が経つたように思う。そのゴルフ会は未だ健在である。

人は誰もその本質的な部分から脱することは難しいようである。性格、行動様式然りである。長年の環境下で摺りこまれた思考形態で、僕は、これからの人生どう生きるべきかなどと考えてしまふ。時代の落とし子なのだろうか。何かを一生懸命やるうとしている自分にハッとする。くびきをゆつくりと逃れて、人生を哲学しながら、歳を重ねてなお矍鑠として拘らない、あの小唄の先輩の境地を目指そう。「あなた、もう十分やつたんですから」と妻が言う。英語で聴くたびに涙と共感がこみ上げて来るあの歌い手、フランク君までが、きつと「Easy young man, easy.」と言つてくれるのでは、と思つて見る。辛かったことはもう語るまい。そして、いつの日か、僕の「マイ・ウェイ」を語ろうではないか。

後悔なしに人生なし

大西 宏

高校のころ、サッカーのし過ぎで理科系に進むことができず、なりたかった建築家の道は閉ざされた。弁護士になりたいと思った時には学部違いでダメに。就活も連敗後やむなく家電に。会計学ゼミで目指した経理部だったが、組合活動が過ぎて、一度目の左遷によって都落ちして九州でセールスマンに。営業マネジャーとなつて、ありつたけの情熱を傾けて取り組んだ商品開発——そこへ突然、福岡への逆戻り。路線の対立によるものだった。赴任の機中で『左遷の哲学』という本を読みふけた。それまでの人生は「出世欲」が火種だった。どのような上司に取り入るのか、ライバルの足を引っ張るのか、忠実な部下を囲うのかが行動原理だった。

努力もした。家庭を犠牲にし、健康をも省みなかった。胃潰瘍の傷・脂肪肝・結核の癒着・糖尿病境界値・高コレステロール値……。宴会の美食をたらふく食べ続け、注

がれるだけ酒を飲み、運動は付き合いゴルフだけという生活の当然の成り行きだった。

左遷によって「これまでの人生は何であつたのか？」という後悔に襲われた。その悔恨の中で、私は二度目の人生を生き始めた。人生観の転換によって。

仕事オンリーの三十年の過剰な反動だったが、次々に通い始めたのは、バッティングセンター（高校時代よりも上達）。スイミングスクール（五十歳で初めて金槌でなくなる）。芸者の自宅でかっぱれ・奴さん・泥鰌すくいを習う（宴席の花形に）。カラオケ教室（こぶし回し、シンコーベーション、バイブレーション、エイトビートを練達し迷人に）。手品教室（「南京玉すだれ」のプロ級に）。テニス教室（テニスエルボーとなつて鍼灸院へ）。

「ものごとは歳ではないのだ、やらないだけだ」という教訓を得たのはせてもの収穫だった。

そして、小説創作教室（高田宏、林富士雄、海渡英祐、田久保英夫氏のそれぞれの教室、同時に二つ三つ股にかけて）。そこで、これまでムダと思つた人生やロスや悪とも感じられたビジネスの暗黒が、筆が向かうと急に意

味と光を帯び始めたのだ。

最前線から研修所へ三たび左遷されたが後悔はなかった。サッカー部GMの話が出て、上司の反対を無視して居座り、高校時代に見た夢が甦ることとなったのは、この時期の最大級のハッピーなイベントだった。

この十年間、かなり、自分の心に従って生きたと言えるが、あの強烈なノルマや、ディーラーとの真剣勝負の付き合い、労働組合との対決といったプレッシャーがない分、日々ものたりない思いはあった。しかし、この二回目の人生で「小説を書く、ビジネスの経験と悔悟を書く、話す」という新たな夢が生まれたのは大きい。

そして、定年——。研修の仕事が大学教員へつながって第三の人生が始まった。過去の後悔や体験が生きた。若さも吸収できたと思う。しかし、そこでの研究といっても、話すための準備であって、十年もたつと過放電となつて空っぽといつてよい状態となった。

そして、「ものを書く」という夢は、全く手つかずに終わったのである。もう七十歳——これには深い後悔と焦慮があった。しかし、それがバネになり、さらには、

遠い昔の悔しさや嫉妬心のトグロもエネルギーとなつて、その夢にたち向かつたのである。

やつと書いたり話したりする夢を追うことのできる第四の人生——本を出せた。とつくに諦めていた小説を短編三つだけだが書くこともできた。

夢が挫折し、後悔をし続けた人生だったが、それらがバネとなつて、実際、これほど自由で豊穡な人生があるとは思つてもみなかった。ところが、実は今、この第四の人生の満足感の裏に、後悔がこびりついていた。

その一、自分たちが生み落とした日本の政治・経済の惨状に対する無力（隠者になろうとしている。義がない）。その二、全てが「話すため・書くため」という目的を生きて、「今」と「自分」を生きてはいない、従つて空虚なままの内実（愚直でない）。

その三、自己実現に終始して、他者に対する関心や働きが鈍い（愛がない）。

その四、必要に追われて、人生を楽しんでいない（遊びがない）。

そして思う。だから第五の人生が開かれる。

悔いが残る

岩崎 洋一郎

良かれととった行動が思わぬ悪い結果を生み、しかもそれが不可逆の重大な結果をもたらす。こんなにも馬鹿なことが、いや、腹立たしいことがあるのか。

私は七十歳になった時点で妻と共にケア付きマンションに入居した。二人とも健常であつたが、子供は男子一人で、先を考えると息子の嫁に世話をかけるのを避けたかつた。もう一つの理由は、サラリーマンを定年退職した私は、家で三食を食べることになる。現役時代は、昼食はもちろんのこと夕食も家で食べることは、週に二、三回位しかなかった。しかも度重なる海外出張。それが、定年になると一転して毎日三食を家で食べることになる。そうすると妻は、毎日三回おさんどんする羽目になる。亭主がいなければ、昼などは余りもので簡単に済ますことが出来たであろう妻は、外出もままならなくなつてしまう。こんな重荷をかけるのは私として心外であ

る。ケア付きマンションには食堂があり、味はともかく、栄養バランスの良い食事を勞せずして摂取できる。

さらに、ケア・マンションの台所は狭く、調理台の熱源は電気である。これは高齢者によるガスの不始末での出火を防止するための配慮である。が、調理する方にとつてみると、不便極まりない。魚の塩焼きも、ペランダに野外用コンロを持出して焼く始末である。何時の間にか、朝はともかく、昼夕の食事はマンションの食堂に頼りきるようになっていた。

気がついてみると、いつの間にか妻は認知症になっていた。これは大ショックで、私より四歳も下のしつかりものの彼女がそんな症状を見せ始めたときに、何が原因かと途方に暮れたものである。今にして思うと、その要因の一つとして、彼女から主婦の仕事の中核の役割を奪つていたことではないかと思うようになった。すなわち、食事の世話は、頭の回転も手の方も、大変なロードがかかることに改めて気がついた。まず献立を考える。毎日同じものを食べる訳にもいかないので、バラエティや栄養素のバランスを考案する。その食材をスーパーで買う。

特売等があれば、臨機応変に対処する。予算を考える。下拵えを要するものは、前もって準備する。料理の手順を考える。食材を斬ったり刻んだり、手をこまめに動かす。お米を研いで電気釜に準備する。

もつと細かく書けるが、要は責任をもって、頭も手も細かく動かして、しかもタイミングや手順も塩梅良くプランニングしなければならない。実際にやってみるとなかなか大変で、不慣れな者にとっては、右往左往しかない。仮に、一回二回なら男性でも実施できるが、これが数カ月ぶつ通しで担当するとなると大事である。頭はパンク状態になりかねないし、手は疲れて麻痺状態になりかねない。

そんな綿密なそして継続的作業を奪ったらどうなるか。一時的には、主婦は楽になったと喜ぶであろう。しかし、それが永続的な生活の中身になったら、自分の存在価値が無くなったと、空疎な気持ちになっても不思議ではない。そうすると、心に隙間ができて、空虚な気分になり、自分の存在価値を見失うことになったとしても、頷ける。

今更、思い悩んでいても仕方がないが。後悔が胸をかきむしる。知らなかったとはいえ、一人の、いや、最愛の人を奈落の底に突き落としたりとは！
後悔しても、しきれない。



継続は力なり

野上 浩三

「わが人生に悔いあり」に該当する事は沢山ある。しかし、これからの「継続は力なり」の実践で、これらの悔いを乗り越えたい。

還暦を迎えた時、「人生七十五年」とし、「継続は力なり」の精神で三つの目標を達成することを決めた。

第一の目標…わが国の代表取締役社長制度の廃止と時価発行制度および通貨制度の改善を訴える本を書く。

各々の制度の問題点は次の通り。

代表取締役社長制度…取締役会を形骸化させ、企業統治機能を喪失させている。社長が実力本位に選任されず、一旦社長になると独裁化することが多い。代表取締役社長はわが国だけに存在する矛盾した機関である。

時価発行制度…導入時に十分な立法措置が取られなかったために、基本逸脱が横行して甚大な弊害を流した。

通貨制度…通貨問題が財務省の聖域となっており、過

度の円高に苦しむわが国の声が世界に届かない。

第二の目標…実践的な英語力を容易に習得する方法の考案。

英語の習得には語彙を増やすことが先決である。若い時から、原書を多く読み、多くの語彙に出会うのが望ましい。若い脳は面白いように新しい語彙を受け入れる。

一九七八年、アガサ・クリステイーの逝去を機会に、彼女の作品を英語で読み始めた。面白くて止められず、八十ほどの作品をあつという間に読み終えた。彼女の作品には単語やイディオムが非常に多く使われている。自分の子供に英語で読ませるために作り始めていた「作品一冊毎の単語帳」を発展させることにした。

第三の目標…山岡荘八著「徳川家康」の英訳。

この本は日本版「戦争と平和」である。文庫本で二十六冊の大著であるが、クリステイーの作品と同様、読み始めたら止められない。日本の国家統一の物語と平和を愛する国民性を世界に知らしめるのに格好の本である。

現時点での達成状況は次の通りである。

第一の目標…二〇〇三年に「日本経済再生のために打破すべき三つの壁」という本を自費出版した。自費出版であったために世の注目を引くには至らなかった。この本では次のような提言を行なった。

代表取締役社長制度…代表取締役制度は廃止する。その前提として、次のような世界標準（アメリカの制度）に倣って会社法を改正する。

1. 取締役会と執行役員陣の二階層制。取締役会は株主の代弁者の取締役によって構成され、重要な事項を決定し、最高経営責任者（CEO, Chief Executive Officer）を選任する。CEOは執行役員陣を組成して取締役会の監督の下に業務を執行する。

2. 取締役はすべて平等で、わが国のような別格の代表取締役はいない（取締役会が形骸化しない）。

3. 取締役会は独立性と能力を備えた社外取締役が多数を占め、委員会を通して非常に重要な役割を果たしている。

時価発行制度…法制度の整備を行ない、基本逸脱が遵守されるようにする。

通貨制度…所管を官邸に移して国の総意が反映される形にし、早急に国際会議で適正化を図る。

二〇一一年一月に起きたオリンパス事件は、これらの法制度の欠陥が無ければ発生しなかったと断言できる。オリンパス事件を奇貨として、わが国の法制度の欠陥について再度挑戦する予定である。

第二の目標…クリスティーの作品の単語帳を十二冊作った。これをコンパニオンブックと名付け、クリスティーファンクラブのHPに掲載して貰った。ダウン・ロードして誰でも自由に利用できる。

二〇一〇年にコンパニオンブックを利用した「クリスティーを英語で読む会」を発足させた。現在十人ほどのメンバーでクリスティーの作品を楽しんでいる。将来、英語の単語や文章をクリックすれば意味が出て来るような電子本にコンパニオンブックが利用されることを夢見ている。

第三の目標…三冊目まで英訳したところでお蔵入りになっているが、ゴールを「人生八十年」に切り替え、写経として続けて行く予定である。

我が人生に悔いなしの極意

阿部 洋己

悔いなど数え上げたらキリがない。「悔いあり」と書けるくらいの悔いが若干面白くもあり丁度良いのかも知れない。しかし、人生終わってみないと分からないというのが実感だ。振り返ってみて、その当時は痛恨の悔いだと思われたことが、逆にそれ故にまた異なった有意義な人生の軌跡をたどることなど、誰しも思い当たる節があるのではないか。

与えられたタイトルにヒントを得て、それよりもどうすれば悔いのない楽しい人生を送れるかを考え直してみた。自分流に導き出した結論は「全て何事も好きになる」ということだ。

昨年、サラリーマン人生の集大成として「KIRINで学んだマーケティング志向と経営」を上梓した。今まで誘いはあったが断っていた。日経の「私の履歴書」に登場するサラリーマン社長の記事は何とも面白くない。固

有名詞を出せば角が立つ、本当のことを言えば差し障りが出る、まして失敗談は面白いが成功物語を長々と読まされては鼻につくだけである。心变わりの元は、隣に住んで無邪気に相手になっている孫たちに「お爺ちゃんの存在」を明らかにしておこうと思ったからである。

その第一章は「あなたは会社が好きですか」だ。書き出しは「改めて振り返ってみると、サラリーマン人生を全うするには、自分が入った会社をどれだけ好きになれるかが分かれ道になると思います。既にキリン社との直接的なかかわりがなくなって十年になりますが、未だに当時と変わらぬ愛情と愛着を持っています。学生時代の友人からも、会社を卒業してまでもキリン、キリンと騒がなくてもとあきれ顔でからかわれます」。しかし、長年のうちに身体に沁みついた生き方の一部、言い換えれば「DNA」になっているから如何ともしがたいのだ。

「会社を好きになる」には、次の三つを好きになることだ。

一つ目は、「仕事」を好きになる、である。主宰している経営塾では若い塾生に、今の仕事が自分に向いてい

るかどうかを悩む前に「今の仕事を好きになる」と考え、全精力を「今」の仕事に傾けることだと説いている。誰しもだが、入社前にはどこの部署に配属されるか分からないまま、自分にこの仕事に向いているかどうかなど考える暇もない形で仕事に就く。しかし、こんなはずではなかったとなることが大半だ。その時に「今の仕事を好きになる」を実行できれば人生に悔いが残らない、と体験から断言できる。

二つ目は、会社の「仲間」である。どうしても好きになれない輩がいることも事実だ。しかし、どんな人にも良いところ、悪いところがあり、その良いところだけを見るように、ある時点から考え方を変えた。実には楽になった。それからはどんな上司とも上手に付き合えた。会社をCompanyとはよく言ったものだ。語源はラテン語で「Com（カム）は共にする」と「Pany（パニー）はパン」とのことだそう。パンを共にする仲間が好きになってこそ仕事も楽しい。

三つ目は、「その土地」が好きになることである。サラリーマンにとって転勤はつきもの。その地で成果を上

げる秘訣は、その土地を好きになるかどうかだ。言い換えれば骨を埋める覚悟を持つことだ。地元の人をよく見ていて決してだませない。支社長で赴任した時のエピソードを紹介して悔いのない生き様の証しとしたい。その地では転勤族を「旅の人」と呼ぶのである。

「支社長さん、ご家族は」

「一人です。単身赴任です」

「旅の人ですな」

第二の関門、

「あなたは、家はどないしはりました？」

「賃貸マンションですよ」

「ああ、そうですか。やはり家の一軒も持たないとね」

第三関門、これこそ究極の選択、分かりますか？

答えは「墓」です。先祖からの墓を持つて来いとはずいぶん乱暴な話だが、その覚悟があつてこそ、よそのもの、お客さんではなく、本物の土地の人という訳である。彼らはこうした会話の中から、本気になってこの土地が好きかどうかをみているのだ。旅の人から脱却するためにたどり着いた答えが、地元工場の建設であった。

遅刻

大泉 潤

半世紀前、大阪営業所勤務となった。しかし、ラグビーをやりたい。先輩の紹介でグループ企業のラグビーチームに参加をお願いした。その時の責任者が企業OBベシククラブの前会長北田さんである。シーズンには関西地区チームや選抜チームの合宿、東西対抗などで週末を過ごした。当時の日本選手権優勝チームの京都工場で合宿し、トッププレーヤーと合同練習した。

わが社のチームは四日市の工場にあり、兄弟会社の九州工場チームと毎年ホームアンドアウェイで試合を行っていた。その年は、名古屋の瑞穂ラグビー場で試合を行うこととなり、某月某日一時十分キックオフとの連絡がきた。親戚が瑞穂の近くで本屋を営んでいるので、前日から出かけて、一泊のお世話になった。ちょうど入社の前年に伊勢湾台風があり、この地区は大きな被害を受けた。両親の気遣いで慰問品をリュックに詰め、水浸しの

店を訪ね、後片付けや本の配達などを手伝った。

地理に明るくなったので、試合当日も余裕をもって、ラグビー場へ向かった。これから試合ができる、と高揚した気分、今日もトライを一つ二つ上げたいとひそかに期していた。だから坂を下るとラグビー場が見える。十一時ごろなので十分余裕がある。まあ早めに行つてのんびりしようと考えた。近づく歓声が聞こえる、もうどこかのチームが試合を行っているようだ、では見学しようと、観客席へ上った。ところが次の瞬間、わが人生でこんなに驚いたことはない。既にわがチームが試合をしているではないか。筆舌に表しがたい気持ちになった。観戦中の同僚が、どうしたと聞くが、聞きたいのはこっちだ。そして、残念ながら敗戦で、痛いような視線に一日中さらされた。

当時、社内の本社・支店・工場間の通信は、遠隔地間の場合は電文を兄弟会社経由テレックスで交換し、市内の場合は電話で読み上げて交信していた。現在のように通信手段が発達して、個人のメールでも携帯電話でも、確実な情報が瞬時に繋がる状況ではとても想像できな

い。半世紀前には、電文を書く、オペレーターが一字一句を機械に打ち込む、遠隔地で受信したオペレーターが兄弟会社のオペレーターに一字ずつ伝える。「いろはのイ」「葉書のハ」のように。狭い事務所では時としてこの声が甲高くこだましていた。

悲劇はそこから始まった。受け取った電文は試合開始一一〇となっていた。てつきり午後一時十分と読んだのが失敗のもとだった。確かめようにも、なにせ通信費節約の時代だから電話をかけるのは遠慮が働く、後からチームと一緒に前夜宿泊すればよかったといわれてもまさに後の祭りだった。

その後ことあるごとに、心ない上役からミスター遅刻と呼ばれ、しばらくは受難の時が続いた。心中で、今後は絶対に遅刻しない、早めに行動すると決め、すべからず早く早めに行動することにした。お陰でその後は「ミスターパンクチュアル」となり、すっかり名誉挽回した。ラグビーの発祥は、一八二三年イギリスのパブリック・スクール・ラグビー校でサッカーに夢中だったエリス少年が興奮のあまり、ボールを持って走り始めたのが嚆矢

である。今でもその史実がプレートとして刻まれている。因みに、一九九九年ウェールズでラグビーワールドカップが開催されたときに、日本の国会議員団のラグビーチームが出かけて、英国議員チームとこのグラウンドで試合を行った。日本の議員先生方もこのような歴史的な場所でプレーをすることがお好きなようである。

ラグビーは全天候型スポーツで、雨が降っても雪が降っても時間通り挙行される。自然を克服し、時間に忠実に行動するのが特徴である。従って、遅刻などは風上にもおけない所業である。

また、人のミスを絶対に口外しない、墓場まで持つて行く不文律がある。世界大戦の激戦場で負傷した元ラグビー選手が、いまわの際に、「あれはトライだった、その得点でわがチームは勝っていた。レフリーのジャッジで自分のグラウンディングが認められなかった。敵のインゴールへ間違いないボールを持ちこみ、腕で押さえたが、レフリーの判断は神聖だ」と言つて息を引き取った。墓へ行く前に伝えたいこともある。

趣味

金京 法一

家内は相当なブリッジ・プレーヤーである。ブリッジとはカードを使って四人でやるゲームで、世界的な広がりを持っている。マスターポイントを三千以上持っているのであるからセミプロに近いといえよう。家内がブリッジを本格的に始めたのは二十年前ぐらいであるから、その間相当根をつめてやったに違いない。今でも週二、三回はブリッジクラブに出かけている。飽きる様子はなく、ブリッジをやりながら死ねば本望などと言っている。

筆者も独身の頃ブリッジをやったことがある。ただ遊び半分で、それほど熱心にやったわけではなく、結婚して子供が生まれ、仕事も忙しくなっているのか疎遠になってしまった。そんなことは知っているはずだが、家内はブリッジを再開しなさいとは言わない。勝負事が性格的に向かないと思っているのか、自分の聖域に余計

な口出しをされたくないと思っているのかどちらかであろう。

筆者も色々なことに首を突っ込んだが、家内のブリッジのような趣味はない。就職してからゴルフを始め、ずいぶん長い間やっていたが、全く上達しない。だんだん嫌気がさし、六十歳代初めに腰痛になったのを機会に止めてしまった。腰痛はその後治ったが、再発するかも知れないとの口実でやっていない。ゴルフ談議に夢中になっている人を見ると羨ましさ半分であるが、今さらやりたいとは思わない。

退職した後、一時期西洋哲学に夢中になったことがある。朝日カルチャーセンターに通い、高価な本を買い込んで根をつめて哲学書を読もうとした。原典はそのままでは全く歯が立たない。解説書の類を読みあさる。しかし解説書の類そのものが相当難解なのである。悪戦苦闘の末、ようやく哲学に取り組むにはもはや高齢すぎると悟った。記憶力が低下しているため読んだものが頭に残

らない。視力が低下して普通サイズの字でも読みづらい。書棚に並んだ本を恨めしく眺めるばかりである。

クラシック音楽は子供のころから好きで、一番の趣味であろう。現役時代は仕事に拘束されて演奏会にはあまり行けなかったのも、もっぱらレコード収集をやっていた。時間のあるときに集中して聴きこむのは無上の楽しみであった。レコードやCDを買いに行くのも楽しみの一つであった。五百枚ぐらいのCDを持つている。ただ最近はこちらのCDをほとんど聴かない。退職後は時間の余裕があり、生の演奏を聴くことが多い。生の演奏に勝るものはない。現役で忙しかった時期に、時間を見つけては缶詰音楽を夢中になって聴いていたのに、時間が有り余ると聴こうともしない。おまけに生の演奏会も嘗てのような期待に胸ふくらませて出かけることもない。暇つぶしに聴いているようなもので、音楽に対するあの熱い思いのようなものが感じられない。

「好きこそものの上手なれ」という諺があるが、好き

だけでは好い趣味にはならないようである。人間は気まぐれで、好きなものにもやがて飽きることがある。良い趣味を持ち、それを生活の一部にするには、好きだけではなく、それを自分のものにする努力や修練が必要なのうである。この点に関する限り、絶えずブリッジのハンドを勉強している家内には頭が上がらない。いい趣味とは結局自分の体や頭を使う創造的なものではなからうか。音楽が好きだけでなく、自分で下手なピアノを弾いたりしなければ音楽が趣味とはいえないのではない。俳句を作ったり、川柳を詠んだり、エッセーを書いたりすることが大切で、唯良いものを鑑賞しているだけでは不十分なのである。今更それに気がついても遅すぎる。

老人を締め付けるのは孤独と無聊である。それをねのけるのがおそらく良い趣味の類であろう。良い趣味を持ち損ねた老人はこの孤独と無聊に耐えるしかない。良い趣味を作る努力を怠ったことこそ「わが人生に悔いあり」である。

八十年の人生悔い多し

古川 さちお

新年一月十日で満八十歳になった。誰でも持つ、ありきたりの感懷ながら、「よく生きてこられたものだ」というのが正直な実感である。過去を思うと、数多くの後悔に苛まれる。大きな後悔を二つ考えてみよう。

(一) 工業学校に入っただのは大失敗

太平洋戦争末期だったので、小学校を終えて中等学校に進む際、普通の中学校に入れば、「軍隊にとられて戦死の可能性が高い」、「工業学校ならば技術者となり戦地に行くことがない」と父に説得された。担任教師は軍人志望の私に、「技術系は軍にとられても技術将校となり戦地に行かれない」と囁いた。

強硬な説得に負けて工業学校機械科に入ったけれども、生まれつき手先が不器用なので、失敗だった。敗戦後、望みの文科系一流大学に挑戦するには、工業高校生

は専門科目に追われて一般教養科目に弱い。入試は独学で挑戦するに等しい。秘かに夢見ていた外交官になるための法科系入試に失敗。文学系の学生となる。これも大きな失敗だった。

フランス語を専攻したので、就職には苦勞せず商社マンとなったものの、パリ店長時代に会社が挫折崩壊する。フランス製品をソ連に売り込み大成功していたが、本社崩壊で途方にくれた。フランスのメーカー社長は、「日本商社仲介でないとソ連向け輸出は不可能」と知り、「経費は全て負担するから、貴殿がパリで独立して、対ソ輸出をやって欲しい」と言う。熟慮したが、自己資金のない身では無理と判断、提案を辞退した。この優良商権は他の日本商社が欣然引き継ぎ、現在も続く。

帰国後、転職を繰り返し、退職金も少ない停年で現在の貧乏暮らし。パリでの独立を辞退したことが後悔される。この提案辞退を悔いることの根本には、七十年前の工業校入学の悔いがあるのだ。けだし、これは誰の責任でもない、自分自身の責任だと思うと悔しい限り。

(二) 恋多き男、恋に成功せず

幼少の頃から、異性に強く興味をもち、毎日の瞑想・思考の中では、どちらかといえば勉強のことよりも異性のことを思う方が強かった。身の回りに現われる同級生、親戚の少女などの中から数名を心にとめて、ひそかに交際相手と決める。それは心の中だけの片想いながら初恋に近い感情となる。

中学二年、十三歳の夏、米空軍の猛爆撃に遇い九死に一生を得た後の、日本敗戦の年だった。女学生の従妹三名がわが家にやってきて二、三泊する。うち一名、母の姪にあたるY子だけが残り、玉音放送の翌日まで留まる。私はそのときY子に惹かれて強く恋するようになった。しかし、恋焦がれる無口の少年ゆえに、常に胸は動悸を打ち話しかけることもできない。悲しい片想いだった。

Y子は幼くして両親を失い、養女として大叔父に預けられて育った。大叔父亡き後は義理の兄夫婦に支えられて女学校に通学した。食糧難時代には兄嫁に氣を使い、夏休みなど休暇には農業を営む伯母（私の母）の家を訪ねていたのである。

敗戦の翌日、「うちはお米に不自由はしないのだから、夏休み中ここに居てもよいのだよ」という父の言葉にもかかわらず、彼女が、「帰ります」と寂しそうに言って養家に帰って行ったのを思い出す。

それからの四年間、私とY子は休暇のたびに同じ屋根の下にいながら一度も会話を交わさなかった。話しかけようとしても胸が高鳴って会話にならない。彼女の方もそうだったようだ。お転婆で誰とでも口をきくY子が、私には話しかけなかった。受験勉強中の私に話しかけては悪いと遠慮したのか。否、お互いに同じ心理状態、秘めてはいても、相思相愛だったのではなからうか。

Y子は女学校卒業とともに結婚したので、その後は会う機会もない。母の葬儀には遠方から出向してくれたが、私は会えなかった。駐在地パリから駆けつけたときは葬儀が終わった後だったのだ。

現在のY子は孫もある未亡人。私はY子以外に真の恋をしたことがないけれども、今や孫が四名、妻も健在である。今更どうということはない。それでも成就しなかった初恋の相手Y子の当時の気持だけは知りたいものだ。

またカタカナ語を増やしてしまった

細谷 博

「ねえ！ これを特急で水曜日迄に翻訳してくれませんか？」天女みたいな可愛い後輩からのご要求なので、断ることは有り得ない。これまでも世間では一寸名の売れた学者や翻訳者の下訳を随分やって来たし、旧ソ連との漁業交渉資料のフランス語翻訳で、苦学生のアルバイトとしてはかなり稼いだ実績もあり、自信を付けて来た矢先だったので、「得たりやおう！」とばかり二つ返事で引き受けてしまった。しかし、現物を受け取ってみると、フランスを代表する夕刊紙「パリソワール」の一面全部で、しかもパリの服飾界の最新情報なので、素人に和訳可能かどうか？ 今（と言っても半世紀前のことだが）服飾デザイナーとして売り出し中の彼女の叔母様からの依頼だという。私の翻訳をベースに高級服飾界（オートクチュールという）最新の革命的傾向をさる一流紙の日曜版に紹介するために急いでいるとのこと。

それまでの服飾業界は、先にも述べたオートクチュールと伝統的に呼ばれる、有名なデザイナーが上流社会や映画スターなどに個別にデザインする高級注文服と、コンフェクションと呼ばれる既製服の二つに分かれていた。オートクチュールには一着何十万円から何百万円まであり、世界に一つしか存在しない服だから貴重な事この上もなく、これを着ることが世界の超エリート、セレブの条件であった。ところが、あろうことかあるまいことか、モスクワ映画祭でジーナ・ロブリジータとエリザベス・テラーがすれ違ったところ、クリスチャン・ディオールから提供された白いワンピースが全く同じデザインであるのに二人とも気が付き、赤っ恥をかいた世界の美女二人が、その場であわや掴み合いの大喧嘩。しかし憎つくきはあの不実なディオールだということになり、世界中のオートクチュール業界を震撼させる大事件となった、あの頃である。

そんなことは気にもしない私は「ししし」と翻訳に勤しんで、全体訳は期日に間にあって完成したが、どうしても上手い日本語にならない一語が残ってしまった。

それは pret-a-porter（英語で ready-to-wear）、即ち「直ぐ着られます」と言う意味の語である。それまでのオートクチュールともコンフェクションとも違う、全く新しい概念で、ハイファッションのデザイナーが市場リサーチから発想を得て、中流の御婦人がたにも手の届く御値段の範囲で、デザイナーのサイン入りの数量限定の服を制作し、そのデザイナーのお店で売り出すというやり方のことである。

全体を訳し終わって、その叔母様が新聞の寄稿記事で紹介したいのは、その pret-a-porter のことであると気が付いた。彼女自身がバリコレに乗り込んでみただけ、無名に近い段階では欧米の貴族、金持ち、スターたちを常連客に持つて十分な収入を上げるのは至難の業であり、その解決策は最初から pret-a-porter を市場参入の突破口とし、業界制覇の主要な武器とすることである、という天才的な着想が生まれたからに違いない。

と、思いが至ってからは、もう大変！ この叔母様（これがまた可愛い！）を応援することが大和おのこの務めだとの使命感に燃えて、何とかこのフランス語に歴史的

な名訳を作ろうと、あれこれ声にも出して苦吟したが、

この一語ができないまま約束の期日が来てしまった。思いあまった私は天女と相談して叔母様に電話で苦衷を訴えた。すると叔母様は「あのフランス語は何と発音するのか？」「プレタポルテです」「プレタポルテ？」「ええ、プレタポルテです」ややあって「いい音だね。それで行こう」「えっ？」「つまり無理に日本語に訳さずにそのままで行くの。だって全く日本にないことをやるのだから、この方が斬新でいいんじゃない？」その週末の記事の小タイトルに「プレタポルテ」の文字が躍り、その日から彼女の名声も確立の道をたどった。

元フランス語学者、比較言語学者のはしくれを気取っていた私は、何処の大陸からも弧絶したこの島国に、素性も定かでない外国語まがいのカタカナが氾濫するのを苦々しく思っ居り、幕末から明治維新のころの知的先達たちが、中国人も利用せざるを得なかった哲学、科学、社会学などの漢字訳を生みだしてきたのを誇りとしていたのに、何とその私がかたかな語を増やしてしまった。今ではどの辞書にも載っている。慙愧に堪えない。

人生の点と線——川の流れのように

上原 利夫

昨年喜寿を迎えたとき、人生は、なんと思いい通りにいいかないのだろうと思った。美空ひばりが『川の流れのように』で歌っているように、歩んできた道は、でこぼこ道や、曲がりくねった道である。

六十年前、星雲の志を抱いて、東京で大学生活を始めた。実は、兄が先鞭をつけてくれた道を歩んだに過ぎず、あまり苦労はしていない。父の勧めにより兄と同じ理系を目指したが、理系は余程好きでなければ苦労する、と兄の助言があり、文系に変えた。兄とは二年間、同じ下宿で暮らしたので分かるが、私にはきつい。大学のボート部は楽しいと兄が言うので、一年生のクラス対抗ボートレースで、コックス（舵手）をやらせてもらい、優勝した。艇庫がある向島へ通い、隅田川で練習したのは楽しい思い出である。

しかし体育会の運動部は、高校から引き続き山岳部に

した。雪山で合宿中のこと、奥穂高から穂高小屋へ下る凍りついた雪面で、息を殺して一歩一歩アイゼンを効かす。我が身は緊張し、死の恐怖を感じた。これが人生のターニング・ポイントであり、それ以後、死にたいと思うことはなかった。この人生の『点』は貴重な体験だった。山行の装備や旅費を賄うため、育英会奨学金の「学」を「岳」に読み替えた。山行は年間百日が目標だった。この「奨岳金」は、卒業後十八年で完済した。

大学は経済学部だった。数学を使う近代経済学を志したが、思想的なマルクス経済学に興味を持った。卒業後五十年も経って、我が卒論を大学図書館で閲覧したら、よく分からない。「奨岳金」でよかったのだ。

人生の三大イベントは入学、就職、結婚という。就職は、試験日の早い大手商社に決まった。鶏口となるも牛後とならない家業を継ぐ道もあったが、中小企業は衰退の道を辿っており不安だった。安心して大きな仕事をしたいので、大会社を選んだのだが、結婚後しばらくして、父から家業への誘いがあった。真剣に考えたが分からないので、占いで運を天に任せた。結果は今のまま。本気

でサラリーマンをやつていく腹がきまつた。会社は社会のためによく頑張つた。しかし、他人のやつた失敗の尻拭いは難しい。運が悪かつたと思う。

ここで次の『点』に移る。海外勤務だつた。よかつたことを書けば、国土は狭いが、視野は広いオランダに五年間住み、三人の子供は上から順番に、アメリカンスクールを経て日本語のボーディングスクール（立教英国学院）へ。その間に四人目が生まれた。家族そろつてヨーロッパ各地の旅行ができたし、日本の大学を出た子供たちの二人は海外へ移住し、他の二人は国内で日本の国際化に努力している。帰国してから建てた家は、ヨーロッパの感じがあり、家内は満足している。

次の『点』は金融市場の荒波だ。帰国後の日本は、財テクの風が吹いていた。証券市場を使って自己資本を調達し、業界一位を達成した。ところが、資金使途がなくなつてた。銀行は借入金の返済をさせてくれないから、特金やファントラで資金を運用した時代である。証券市場で損失を被つた会社は多いが、時代の波を上手に泳いだ。いま話題のオリンパスも同じような状態だつたと思

うが、ちょっとした判断ミスで災いを招いた。ミスをなぐすのは、心の鍛錬である。

このころ、私は常勤監査役になり、金融業務から抜け出せた。そして次の『点』に移つた。監査役制度の実効に疑問を感じたので、五年間、大学院に通い改革案を論文にした。おかげで法学博士号（会社法）をもらい、他の大学院で二年間講義をしたが、七十歳が定年だつた。私の考えている監査役制度は、形式ばつた固い頭の立法者には受け入れられにくい。のんびり時を待っている。その実現は、二十年くらい先だろうと考えていたが、大きな変化が現れた。東京電力、大王製紙、オリンパスで露呈した不祥事である。これらの原因は、立法者らが見過ごしていた点にあり、これから手当するだろう。

古希になつて、独唱を始めた。喜寿の記念にベートーヴェンの第九を合唱した。米寿になるまで楽しもう。楽器は喉である。声帯に空気を送るのは腹筋である。

心と腹筋を鍛えれば、人生の『点』は『線』で繋がり、「川の流れるように」とめどなく、ゆるやかに続く。わが人生に悔いあり、と言わなくて済ませたい。

愉快な仲間——何でも書こう会

何でも書こう会は八百字にまとめた作品を持ち寄って朗読し、一つの作品に十〜十五分ぐらいかけて批評し合う集まりです。

毎月二回、代々木のオリンピックセンターで開かれ、四時間たっぷり意見交換をします。

昨年は二十三回開かれ、発表された作品は三百三十四篇でした。温泉地で合宿の勉強会もありました。

発表された作品はホームページ「八〇〇字文学館」に掲載されています。

自分の思うことを人に話したい気持ちは誰でも持っています。これまで生きてきた道、映画・音楽・スポーツ・歴史・文学に関する思いや考察、政治・経済・社会への怒りや提言など何でもテーマになります。

現役を退いて時間に余裕ができた現在、このような思いを文章に表現するクラブ活動です。

昨年は、東日本大震災関係が多く取り上げられました。未曾有の災害と日本列島の危機に黙ってられない、モノを言わせてもらおうという姿勢が鮮明でした。

特に福島原発事故については、憂いと怒りを含む多くの意見、感想、批判の作品が発表されました。原発関係の仕事に携わった会員による原子力の恐ろしさを説いた文章など、技術論、科学論からの批判・反批判などがあり、広く世間に知ってほしい文章です。

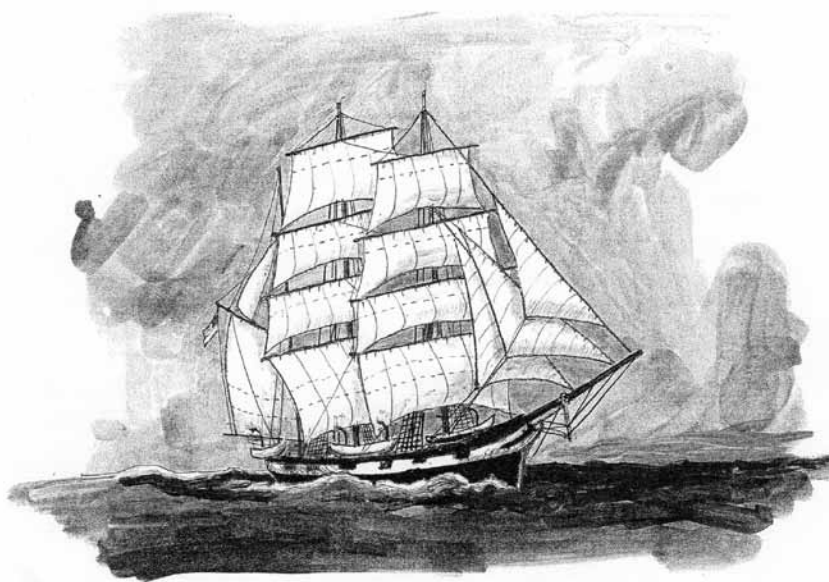
テーマを考え、メモや記憶をたどり、辞書・文献やネットで調べ、足を運び、想像をめぐらし、文章を仕上げる。合評会で質問に答え、遠慮会釈のない意見や批評に耐える―緊張感が伴う作業です。

これらの過程は、ほどよく刺激的で頭の運動になります。

書きあげた時の充実感や愉快な仲間との交流も得難いものがあり、クラブ生活を楽しんでいます。

（プロマネ 大月、大越、志村）

自由テーマ



造船と森林破壊

阿部 典文

森林破壊は、農耕社会の発展や古代文明を支えてきた冶金・陶業、近代では産業革命の進行で登場した鉄道や様々な製造業が加担している。

加えて歴史上の覇権国家、例えばローマや英国などはその海上交易路維持の為に大量の船舶を投入し、造船業が森林破壊の一翼を担ったことが知られている。

因みにローマとカルタゴの、数世紀にわたる覇権争いでは「船舶―交易―戦争―船舶」というサイクルが生まれ、地中海は「戦争の海」になっていた。

このためレバノン杉の美林が艦船建造のために大量に伐採されたので、ローマ時代の詩人オウィディウスは、伐採される森林の痛みを嘆き、森を切る行為を「文明の罪悪」と喝破して、平和な時代の到来を待ち望んでいた。

しかし海上覇権維持のための大国間の争いは以後も度々繰り返され、木造船の建造のために樹木の生育を

凌駕する消費が行われ、森林破壊が継続され続けた。

例えば英国では、十六世紀初頭にイングランドの国土面積の半分を占めていた森林が、十八世紀末には僅か10%まで激減し、艦船建造に使用する原木の一部を、バルト海周辺諸国からの輸入に頼るようになっていた。

そこで大量の木材使用の事例として、大型戦艦（通称、戦列艦）を取り上げてみよう。例えば一七五六年に起工した長さ五十米・排水量千六百トン・大砲七十四門搭載の戦列艦の場合、建造には樹齢百二十年を越えるオーク（西洋ナラ）が三千四百本も使用されている。

森林の生育の遅い英国では、この軍艦一隻分の木材を供給するために約三十鈴程度の森林が必要とされ、当時の軍艦の寿命が平均二十年程度であったことを考えると、一隻の戦列艦を継続して維持するためには、単純に計算してもなんと二百^鈴程度の森林が必要となっている。

当時の英国は海軍艦船八百隻（内、戦列艦百八十隻）以上を保有し、一方商船も一万五千隻に達する世界一の海運国であった。勿論商船一隻の木材使用量は艦船に比べ少なかったが、商船建造は国内産木材の深刻な不足に

直面し、原木を身近に入手できる北米やインドに造船立地を求める有様であった。

一方日本では、江戸時代国内経済の発展で北前船などの商船の需要は盛んであったが、鎖国政策で大型船の建造は禁止され、加えて海軍を持たず、外国との覇権争いもなく顕著な森林破壊は生じていない。

ここで留意すべきは、「棚板構造（モノコック）」の和船と、「肋骨や肘材を持つ重構造」の西洋型船舶の木材消費量の顕著な差異である。重構造船の場合、構造部材が必要とする複雑な形状に木材を自由に曲げて加工できないため、樹木の枝分かれや根が持つ自然の曲がりを利用した事が大量消費につながっている。

因みに森の中に佇む一本の老樹を眼にした英国の詩人ウィリアム・クーパーは、

「お前の幹にはぎつしり内容が詰り、艦隊の旗艦の外板を支える肋骨ともなり、梁となったかもしれぬ。また船大工が珍重する曲がりくねったお前の大枝は、四方八方から吹く風に逞しい太い腕をさしのばし、みずから屈曲して多量の肘材を提供し得たはず。しかしお前は鉄斧

の運命を免れた」と、生き残った幸運を讃えている。

このような自然の形状の利用では木材の有効利用（歩留り）が悪く、原木の伐採量が増え、森林破壊を加速させてきた。

私は偶々、平成五年に仙台で復元された支倉遣欧使節団（二六一三年）が乗船した西洋型帆船（垂線間長約三十米）の木材使用実績を入手したので、上表に取り纏めてみた。

西洋型帆船（長さ30m）の木材使用量（出所：山西造船）

使用場所	材積量(A)	仕上量(B)	歩留(B/A)
外販・甲板	1,100m ³	352m ³	32%
肋骨・梁等	800m ³	184m ³	23%
竜骨他	339m ³	125m ³	36%
合計	2,239m ³	661m ³	29.5%

この実績から知れるように、西洋型帆船の場合、総合歩留りは僅か三十％に過ぎず、同じ大きさの和船の木材使用量を一とすると、西洋型帆船は約二倍。そして砲撃に耐えるよう外板などを二重貼りした軍艦（戦列艦）の使用木材は三倍を越えると推定され、西洋に於ける造船の森林破壊が如何に強烈であったかを改めて認識させられている。

OT^{オーティ}という名の少年のこと

鵜飼 直哉

世田谷区立奥沢小学校四年一組に一人の仲間が加わった。終戦後三年目の一九四八年二月のことである。名前はOT^{オーティ}という。疎開先の四国から引き揚げてきたわりにはきちんとした東京弁を話していた彼に、最初は子供心にライバル意識を持ったがすぐに仲良くなった。鉾石ラジオ作りに夢中で好きな事はやるが嫌いな事には目もくれない僕とは違い、OTは万能選手だった。駆けっことは早いし、僕の苦手な国語や社会もよく出来たが、大嫌いな作文の時間には断然クラスの注目的になっていた。

五年生の頃、担任のOM先生の「このクラスに新聞小説を読んでいるものはあるか？」との質問にただ一人手を挙げたOTが「はい、朝日新聞の□□と日本経済新聞の△△を読んでいます」と答えたのには、火星人に出会ったときほど驚いた。まさに文学少年ここにあり、という印象だった。大学生のお兄さん二人の影響だという。

卒業間近になった頃、OM先生が「大きくなったら何になりたいか？」と生徒に問いかけた。僕は「発明家になって、映画を明るいところでも見られる装置を発明したいです」と答え、席が近かったOTに「エジソンが白熱電球を発明したが、僕のは黒熱電球だ」と話した。するとOTが「それには光を吸収させればよい」と言い出したのには驚き以上のものがあつた。黒熱電球と言ってはみたが何か考えていたわけでもなく、ちよつと恰好付けてみたのだった。暗くなるのを待つて校庭で見せてもらえる映画のことを思い出していただけだ。僕には全く新鮮な「光を吸収する」という考えを一体全体どうしてこの文学少年が持ったのだろう？ 完全に一本取られてしまった。

六年生になってOTの書いた作文「吾輩は犬である」はもはや作文の域を超えていた。少学校を卒業後、進路は別になった。中学一年のときのこと、「吾輩は犬である」の面白さだけを頼りに、自由課題の作文の宿題に苦し紛れにその盗作を試みた。原稿用紙の無駄使いに終わったのは当然だった。

そういえばこんなこともあった。算数のテストの中に

「直径五十センチの車輪が十回まわったら車はどれだけ進むか？」という問題があった。πのことはまだ教わっていなかった。他の問題は易しくて時間が充分残っていたので、僕はコンパスで書いた直径十センチの円を切り抜いて机の上で転がしてみたら、見回りに来られたOM先生に見つかつて「何を遊んでいる！」と叱られた。

テストが終わって先生の「円周の直径に対する比を円周率という。知っている者は？」との声に最初に手を挙げたのがOTだった。「僕は兄貴に約3倍と教わりました」と言ったのに続き、学年で一番出来ると評判のHSという女子生徒が大人びた口調で「私は3・14ということとを家の者から教えて貰いました」と答えた。「ほかに？」との声に促されて僕は「自分で計ってみたら3・2倍でした」と答えたが、先生に「そんなのは駄目」と一蹴されてしまった(四年生から三年間教えて頂いた恩師の故OM先生だが、このことだけは先生に物申したいといまだに思っている)。年の離れたお兄さんのいる彼が羨ましかった。OTに「技あり」を取られた一件だ。

あれから六十四年、このOT君(当会会員の一人)は今も私の大切な友人である。

昨年(二〇一一年)の十月、「米欧亜回覧の会」(岩倉使節団の記録文書「米欧回覧実記」を研究する会)の歴史部会で、彼の講演「大久保利通に学ぶ」を聞きに行った。第一人称での語りは見事だった。そのうえ、準備された論文(注)の中身の濃さとその量に驚いた。何しろ歴史には全く疎い私には、すべて知らないことばかりである。Wordで仕上げたプリントを横に啞然とした。

「鵜飼、本を読め、小説から学べ」と幾度も言われたが私の関心は子供の頃から物造りだった。あとで気付いたことだが、私は「小説はしよせん人工的なもの、相対的な人間関係だけを描くような本を読むのは貴重な時間の無駄使いだ。絶対的な事実を追求する科学の方がはるかに面白い」と思っていたようだ。

「人を信じる文系」の典型の彼をこれからも「物を信じる理工系」出身の私は見習わねばと思っているが、七十四歳の今から忠告通りに本を読む自信はない。

食料不足の心配

吉 寄 清 己

日本のスーパーに食べものが溢れている。お金を払えば、好きなものがいつでも買える。飽食はいつまで続くのだろうか。わが国の食料自給率四十パーセントは少な過ぎる。工場は海外に出ていく。輸出国ニッポンの貿易収支は赤字となった。しかし、利子・配当の黒字は月一兆円。お金はあるが、世界の人口は増加していて、食料は手に入るのか、心配である。

私は大戦末期の昭和十九年秋上京、就職した。米は配給制で、独身寮の食事は一日につき二合少々のみである。朝食は茶碗一杯のご飯とみそ汁、社員食堂の昼食は米五勺の雑炊、そして夕食も朝と似たようなものである。私は学生るとき、三杯のご飯を食べていた、東京に来て急に一杯のご飯になる。腹がへって我慢ができない。寮の食事に不満な若者たちは、おかずの種類が多い都民食堂

に移った。食べ盛りの彼らは、配給される食券を月の半ばに使い果たし、月末はお金があっても食べるものが買えないのである。会社は千葉の農家からサツマイモを闇で買い付け、各自に分配してくれた。米軍の空襲は毎夜続き、いつやられるか心配していた四月、私は金沢の工兵隊に入隊した。軍の食事はアルミ井に大豆入り麦飯と豚汁、まあまあ量の量であった。

終戦。復員。ふるさとの三重県伊賀市の店先に積み上げて売られ、当時は安価であったマツタケをリュック一杯に詰め、東京工場に復帰した。十月の半ばというのに、人々は寒い寒いと焚火をしている。技術課長と二人の若者が結核で亡くなり、多くの人は皮膚炎になった。栄養失調である。マツタケは皆に喜ばれたが、食物セインは栄養回復に役立たなかった。終戦前後、焼野原の東京で味わった空腹は二度と起きてほしくない。

戦後生まれの中年女性たちは、ツアーの食事を半分は食べ残す。戦前の私はいつももったいないと全部食べる。昨年三月の東日本大震災のとき、町に住む人々は食料を買占め、スーパーの食料品売り場は空っぽになってし

まった。私が中国で仕事をしていた十年程前、八億人の農民たちは穀物と野菜だけの食事をしていた。ところが近時生活が豊かになって、欧米並に肉を食べるという。家畜のエサが不足してきた中国政府は、穀物の買い付けに走る。トウモロコシ・大豆・小麦など穀物争奪戦が激化して、市場を動かす中国に日本の商社は買い負けすることもある。

ドバイ原油は一バレル百米ドル以上に高騰している。高価になったガソリンの消費量を減らすため、バイオエタノールを燃料に混合するようになった。世界最大の砂糖生産地ブラジルは、工場で搾ったサトウキビの汁を二つに分け、一方は砂糖に、一方はバイオエタノールに加工している。既にサトウキビの半分はバイオエタノールに向けられ、将来は七十パーセントに拡大するという。世界最大のバイオエタノール生産国はアメリカで、その原料はトウモロコシである。今年、バイオエタノール向けが初めて飼料用を上廻る見通しという。世界の食料事情を考慮するとき、食品から燃料を製造するのは困る。

しかし、非食品植物由来のバイオエタノールはガソリンより高価で、燃料には使えない。地産地消の消費用である。樹脂原料のバイオコハク酸はトウモロコシやサトウキビを発酵してつくる。樹脂は自動車用シートのクッション材、紙おむつ、食品トレーの用途があり、石油由来コハク酸に比べて低コストで生産できる。しかし、これも原料が食品であるから困る。

アジア、アフリカに住む十億の人たちは、なんらかの栄養障害に苦しむという。これらの人はカロリーが足りないのと、タンパク質が欠乏している。この人たちを救うため、一九七〇年代に欧州で、当時まだ安価であった石油を培地に、酵母タンパクを大量に安く生産する研究がおこなわれ成功した。しかし、後に発がん性が発見され実用化に至っていない。

地球の耕地面積はもう大きく増やせない。穀物生産量は限られている。一方、世界の人口は七十億を越え、増加の一途である。将来、世界の食料は確実に不足していく。さて、日本の皆様はどうすればよいのだろうか。

非関税障壁

玉山 和夫

ひと昔前のことですが、外国が本社の、ある医薬品会社の日本法人が癌に効く注射薬を発売することを企画しました。この薬は限られた種類の癌に良く効くのですが、使われる量が多くないので採算に合わないことは分かっていました。しかし、癌患者のために、医薬品会社の社会的責務として売り出すことにしたのでした。

ところが外国から新しい薬を輸入する許可をとるためには、時間と手間と費用のかかるさまざまな試験や、実際に患者に使ってみる治験をやらなければならぬのでした。そのなかで一番不合理だと思ったのは、薬が保存している間に効力が無くならないか調べる安定性試験と薬の毒性を調べる動物実験を、日本国内の社内施設でやらなければならないことでした。安定性試験は薬を恒温槽に保存して行い、動物実験も恒温恒湿の隔離された飼育室でやるのですから、日本でも外国でも差はないはず

です。しかもこれらの実験は本国で売り出す前にやっていることです。日本法人としては全く意味のない重複を、手間をかけてやらなければならないのでした。

このほかにも全く不合理無駄なデータを我慢してつくり、厚生省に輸入許可申請をします。担当の役人はこの申請書をゆっくり審査し、時間稼ぎのために追加の実験データを出すように要求しました。ちょっとした実験でも、ちゃんとしたデータを出すのに半年はかかります。

このようにして長く未決の箱に放置されていた申請書はやつと新薬を調べる審議会に回されます。審議会は医科大学の先生方などがメンバーになっていますが、忙しい方に頼んでいるので会合は三か月に一回、それも二時間しか開かれませんか。

書類は審議会に回されましたが、申請が沢山あり順番待ちで、やつと一年後に上程されたものの、時間切れで次の会に回されました。次の会で、あるメンバーが、この点について説明してほしいと発言しました。これは薬の許可とはほとんど関係のないことでしたが、その先生がやっている研究の補助データとしてほしいので、この

厄介な実験を申請者の会社にやらせようという魂胆でした。会社ではこの手のかかる実験を努力して一年で作あげ提出したところ、やっと審議会は申請をみとめ書類は役所に戻されました。

役所はその書類を稟議に回し、しばらくたつてから新薬の輸入許可書を発行してくれました。これでこの薬が売れると思ったらまだまだ障壁がありました。

この薬を売るには各ロットごとに国の検定を受けなければなりません。そのためには国が検定基準を作り公布する必要があります。早速検定方法を提出したのですが、担当の係官はすぐにはやってくれません。公布もほかの薬と一緒にするので待たされました。

薬は検定に出して数カ月後に合格しましたので、売ることは出来ます。でも、健康保険で使えるようにする必要がありますがありました。その申請をしたのですが、価格設定の根拠などが不明だとして次の薬価収載にはいれてもらえず、一年後になりました。

やっと健康保険で使えるようになったときには、日本の大手の会社が外国から特許を買って作った準国産の類

似の薬と同時でした。大手がその薬を申請したのは日本人の三年後でしたから、早く許可がとれたのでした。

しかもその大手の薬の薬価は政治力で国産奨励として日本人より一桁高く認められました。そのため日本人の薬は大手に押されてほとんど売れませんでした。

というのは、病院は薬価より安く仕入れ、使った分は健康保険から薬価で支払われますから、その差額が病院の収入になります。大手の薬は一本使うと数千円の差益がありました。良心的な価格にした日本人のほうは差益が数十円しかなかったのです、赤字になやむ病院が大手の薬を使うのは当然のことでした。

患者のためによい薬を提供したいとの理想は全く失敗に終わりました。

現在、医薬医療業界と関係官庁がTPPに反対しているのは、少しは改善されたものの、まだ残っている多くの非関税障壁に護られて便益を受けているからです。

患者のためを考えて、この業界も国際競争に負けないように努力すべきです。

あなた方は何型カップルですか？

市川 忠夫

大震災を契機に、多くの人々が「人と人のつながり」をこれまで以上に大切に思うようになった。人は社会性の極めて強い生き物だから、これは、自然なことである。「人と人のつながり」といっても、いろいろな形がある。最も基本的な形は、二つから成る一組、カップルである。カップルの中でも、男女のカップルが基本中の基本である。随分と前のことだが、友人の結婚式に出席した時に、ある故老の漢学者が、カップルにとって最も大切なのは「仁」である、と話された。「仁」とは、相手の立場や気持を理解しようとする心、思いやりである。「仁」の字は、「人べん」と「二」から出来ている。このことは、人々が古くからそう思っていたことを示している。今は「仁」にかわって「愛」がよく使われるが、「仁」により深いものを感じる。

この話を聞いてから、周囲のカップルを、これまでよ

りも注意深く見るようになった。身近に接するカップルの大部分は夫婦だが、夫婦の会話や所作をいくから見聞きしていても、どこに「仁」があるのかよく分からない。ある時、古くからの友人の奥さまが、別の夫婦を評して、こう言った。

「あの二人はお互いにマイペースなのに、幸せそう！」この言葉を聞いて、そうだ「ペース」だ、「ペース」が大事なのだ、とピンと来た。「ペース」の根底には時間があり、コトの進むさまを表している。「仁」や「愛」は絵画的だが、「ペース」は音楽的である。二人の「ペース」が調和すると、名曲が醸し出す、えも言われぬ心地よさと同じようなものが生じてくる。「ペースの調和」したカップルが充実感や幸福感をより強く感じるのはこのためだ、と思いついた。

「ペースの調和」を念頭に置いて、さらにカップル観察を続けると、血液型と同じように、「ペースの調和」にも四つの型があることに気づいた。どのカップルも、必ずどれかの型になっているはずである。夫婦のカップルを例にして、血液型に習って、型名を付けてみた。

第一の型（M型）

ご主人のペースに、奥さまが合わせる型

第二の型（F型）

奥さまのペースに、ご主人が合わせる型

第三の型（O型）

ご主人と奥さまが、ペースを（Our paceを）創る型

第四の型（MF型）

ご主人と奥さまのペースが、異なる型。

どの型が多いかは、時代とともに変わってきているようだ。天照大神、卑弥呼、紫式部、清少納言等々、女性が大活躍した平安時代頃までは、F型が多かったが、武家主導の鎌倉時代以降は、M型が主流になってきたのはなかるうか。また、O型やMF型は戦後増えてきた型であろうと推測している。

同じカップルであっても、型が変わることがあるようだ。「あなた方お二人にとって、最も大事なものは何ですか？」とカップルに尋ねると、若いカップルは「きずな」、熟年カップルは「忍耐」と答えることが多いと聞く。

これは、世代の違いによる差異というよりも、若いうちにはO型やMF型であっても、歳とともにM型やF型に変わっていく傾向がある、ということではないか。

いずれにせよ、自分達カップルが何型であるかを知れば、「ペースの調和」をより得やすくなる。「ペース」は長い時間かけて熟成されるものだから、信条や価値観とも似ている。「ペース」を、頭だけではなく、心と体で捉えることができれば、それを「調和」させるための勘所も掴める。

ここで述べた型の考え方は、広く適用できる。自分と母親、自分と子供、自分と友人、自分と上司、さらに相手に集団を取れば、自分と職場、自分とコミュニティー、等々のつながりもカップルと見なすことができる。

自分達カップルの型を知り、身近に接するカップルの型を探究し、さらに、その範囲を拡げることによって、「人と人のつながり」をより強くより持続的なものにしていくことができる。

ところで、あなた方は何型カップルですか？

英語ができる筈？

寺井 融

『世界と日本』紙のコラムに、次のような駄文を寄せた。国際会議のテレビニュースで、日本代表だけが各国首脳から離れている映像を、見せられることがある。会話力のせいか、こちら側の出席者がころころ代わるためか▼筆者も英会話能力が弱く、国際会議が苦手だ。

ミャンマー母子福祉協会でのこと、先方の女性会長は、流暢な英語で挨拶された。当方は通訳付きの日本語である。最後に「実はミャンマー語を、三語だけ知っています」と述べたら、会場は「それ、ナニ？」とばかりに、雰囲気が変わった▼「それは、ミンガラバ（こんにちは）、チズデマレー（ありがとう）、ラーレ（かわいい）です。本日はラーレな方々ばかりで幸せな気分です」と続けると、会場は笑いの渦▼愚妻は夫の語学力にあきれはてて、六十の手習いを始めた。モノにするには時間がかかりそう。小学生の孫たちの成長にでも期待しようか▼西独

のゲンシャー外務大臣は、ドイツ語しかできなかったけれど外交能力が抜群で、各国首脳の信頼を集め、十八年間も外相を務めたと聞く。何か秘訣でもあったのか。

「おかげさまで好評だった。でも、恥をさらし、複雑な気持である。

ベトナム・サイゴン（現ホーチミン）市で、友人の近藤絃一宅を写真に撮ったために、軍人に両脇を固められて詰所まで連行された話や、イラン・テヘランの歩道橋をこれまた写真に撮って、革命防衛隊の民兵に誰何された話などは、既に発表しているので再述しない。いずれの場面でも、英語力が要求される。しかし、なんとかカタコトで切り抜けてきた。

そもそも、英語がなぜできないか。

中学一年生から英語の授業があった。担当は、津田塾出身のS先生。髪をボニーテールにしたらしい面白いような、清楚な感じの先生だった。指されるとなんだかドキドキする。ぽーっとして一回目の授業が終わった。「明日、レッスンワンの試験をしますからね」と最後に言われ、「レッ

スンワン」という単語だけを覚えた。試験は「デイス
イズ ア ペン」をはじめ、十問が出題された。当方は
一点。みんなは九点から十点。参りましたね。

そんなこともあったためであろうか、英語が苦手と
なっていた。それに気づいた父は、単身赴任先から帰
宅すると単語の書き取り試験を課した。それができない。

「この辞書を使え。いい辞書だぞ」

それは研究社の『英和中辞典』だった。親父の使つて
いたやつである。分厚く、一語引くと何語も意味が出て
いる。どれが正しいかまったく分からない。クラスの仲
間は薄い簡便な辞書を使っていた。意味も一、二語しか
出ておらず、使い勝手がよさそうで羨ましかった。

志望高校は落ちた。大学受験でも次々と討ち死。浪人
生活も経験した。英語がさっぱりできなかったからだ。

編集者となって、産経新聞の近藤紘一さんと親しく
なった。あるとき「翻訳をやりませんか」と薦められた。
早稲田の仏文出身だと聞いていたから、「フランス語な
んてとても無理ですよ」と断った。

「いや、英語です」

「それも駄目なんで……」

「辞書を引きながらゆつくりやればいいんです。日本
語ができて、文章がうまいから、大丈夫ですよ」

そう言われた。「文章がうまい」という世辞の一言よ
りも、「日本語ができて」のほうに引かかった。本来、
日本語ができたら外国語もできる、筈なのである。

英語は嫌い。でも、文法は勉強した。赤尾の『豆単』
も愛用した。語学教材は売りたくなるほど買った。もち
ろん、ただ聴くだけで喋れるようになるというテープも
求めた。一通り試みたものの、長続きがしない。古文な
どは、あらためて古語を覚えたことも、文法も勉強した
こともない。けれども、試験の成績は総じて良かった。

友人の山根隆治参議院議員に会った。「明日、外務副
大臣に任命される。だけど英語が駄目だからなあ」と嘆
く。「そりゃ、英語はできたほうがいい。だけど、でき
なければ外務省のいい通訳を使いこなせばいいんだ。ゲ
ンシャーの例もあるしね、問題は中身だよ」と励ました。

孫のアメリカ学校生活

松谷 隆

私には四人の孫がいる。上の二人はさいたま市、下の二人はアメリカ・バージニア州のリッチモンド郊外で住んでいる。

三人目の孫は父親の転勤に帯同のため、二〇〇八年三月二歳半で渡米、アメリカ生活も満四年になる。三年間ナーサリーとプレスクールで過ごした後、昨年九月からは小学校に通っている。彼が経験したことをふりかえると、大冒険と言っても過言ではない。

なんといっても渡米三カ月後に、なにもわからないまま、ナーサリー・スクールの夏季学校の半日コースに入ったことが一番の驚きだったに違いない。二歳半から三歳の幼児が入る、日本でいえば、保育園だ。

この選択条件のひとつは、日本人の生徒がいないことであつた。ややもすると日本人だけでたむろし、アメリカ児童との交流を避けるからである。といつても、彼

は言葉が通じないので、不安だつたろう。幸いなことに同校の卒業生がボランティアとして、新入生の世話をしている。当時の写真をみると、片手はお姉さんの手をにぎり、もう一方の手の指は自分の口にあるのがほとんどである。幼児が不安なときにするしぐさだ。しかし、このお姉さんがうまくリードしてくれたおかげで、登校拒否にはならなかった。半年もすると、指を咥えなくなつた。うまく順応できたのにはびっくりである。

午前八時半からの三時間、面倒をみてくれる。スクールのバスの対象外に住んでいるので、送迎は両親の仕事となり、朝は父親が通勤時に寄り道して、送り届ける。車中で彼らは会話を楽しんでいた。昼は母親が迎えに行く。時として、間に合わないことがある。教室では全日コースの生徒たちの昼食が始まる。そんな時、先生が自分の分を分けてくれたので淋しい思いをせずにすんだ。

カリキュラムは、教育用のおもちゃと機材を使つての身の回りのことや、交通ルールの勉強、さらに遊びなどである。

二年目から全日コースのプレスクールになった。半日

コースとの違いは、昼食後に昼寝があることだった。弁当が三日、給食が二日、昼寝用のタオルケットを月曜日に持っていく、金曜日に持ち帰る。昼寝のあとは屋外での活動や図画・音楽などの情緒教育もある。

彼は父親のすすめもあり、週一回のレッスンのピアノコースを取った。非常に熱心な先生で、毎月進度を報告してくれる。小学校になった現在もその先生に習っている。

このころにはアメリカ人の友だちもでき、家に帰ってからも、彼らの名前を言いながら、その日のできごとを話すようになった。そのうち、双子の兄弟から誕生日に招待された。よほどうれしかったらしく、ことあるごとにそのとき楽しく遊んだことを話している。

そのころ、日本の子供が二人入園している。あるとき、彼がそのうちの一人と教室で「日本語でさかいだ」との注意をうけた。やはり当初心配したことが起きた。が、二度目はなかったのだ、おおごとにならなかった。

二年目が終わるころには、英語も聞けるようになり、「ジジ・ババの英語はなんかおかしい」という始末。これには参った。だが、身内の欲目でいうと「よくぞ三年

間頑張り、大きく成長してくれた」ものである。

昨年九月にあこがれのスクールバスで通学する小学校に入学した。バスは遠いところの生徒から乗り降りする。毎朝八時三十五分、家から徒歩五分のところまで乗車、帰りは午後三時半に下車。家が学校に一番近いので、彼が最後に乗り降りする生徒である。

校則は厳しく、また成績の変動の原因追及も厳しそうだ。宿題は毎日あり、提出したものは必ずコメント付きで返される。

英語はまだ第二言語のクラスなので、その宿題が、「まず、なにかの絵を描いて、それを話すときのスペルを書け。保護者は正しいスペルを書き、生徒のスペルと違うものに下線を引くこと」というのは初めて見た。これで発音とスペリングを覚えさせるといふ。なかなか面白い。

土曜日には日本語補習校に行くので、それまで入っていたサッカー教室には行けなくなった。残念がついているのを見て、「水泳を続ければいいよ」となだめている。さて、これからどんな学校生活をするか楽しみだ。

続・添乗中の大失敗

上山 裕次

昨年の特集テーマで添乗中の失敗を紹介させていただきましたが、まだ印象に残っていることがありましたので、第二弾として今年もこのテーマで書きたいと思います。

一．イタリアでの話

北回りの直行便が取れず、南回りのバンコック、カラチ、テヘラン、そして早朝カイロに入り、その日の深夜ローマに向かうというルートでした。ほぼ一日時間がありましたので、一旦エジプトに入国し、ピラミッドや博物館などを観光しました。翌日は、ローマ市内、さらに次の日はナポリ、ポンペイと非常にきついスケジュールで、三日目、疲労困憊の中、暑さも加わり何気なく出された水を大半の人がガブガブと飲んでしまいました。するとその日の夜から、私を含め参加者の半分以上の人が下痢になりました。症状は皆同じなので、私が代表して

医者に行き処方箋をもらいましたが、約二十人分の薬が必要とは医者も驚いたと思います。幸い添乗員がもう一名いたので、なんとか無事にツアーは進みました。観光地に着くとトイレ探しが私の仕事でした。日本では白湯とかおかげで体調を整えられますが、スープとパンでなんとかしのがなければなりません。それでも薬が効き、数日後にはお腹の調子も何とか元に戻りました。ただ強い薬だったらしく、今度は便秘になり、完全に体調が戻ったのはツアーも終盤に差し掛かったバリーに到着したころでした。この時から、私はどこの国でも水には気を付け、「ワカ末」、「正露丸」が必携になりました。

二．修学旅行の話

JRが国鉄と言われていたころ、今は違うかもしれませんが、先ずはその国鉄を使った当時の団体旅行の出発までを説明いたします。

一年から八カ月前に団体の輸送会議というものがあり、その後、出発の一カ月前に、「席番交付書」という座席指定の申請を行います。申請書には、人数はもち

ろん、列車名、区間名を書きます。そして下りてきた席番表を確認し、団体乗車券（通称「団券」）を発行します。添乗員はその団券を改札口で駅員に見せ、駅名を捺印してもらい、下車駅でも同じことをします。

これから紹介する学校は、百数十名と比較的小規模で、旅行の行程は東京を出発後、秋芳洞・萩・津和野を見て錦帯橋、宮島、広島、そして岡山から寝台列車で帰る三泊五日というものでした。このコースは過去に何回も添乗していたので、そこに油断がありました。

最後の見学地の原爆資料館に着いた時、団券をすぐに取り出せる準備をしました。そこで大変なことに気が付きました。学校に提出した日程表では、貸切バスは広島駅で終わり、広島から岡山までは普通列車で移動し、岡山から寝台特急「瀬戸」に乗るものでした。ところが、団券には、広島から岡山の部分が記されていません。つまり、広島から岡山までの移動手段がなかったのです。今から列車の申込みをしても間に合いませんし、バスで岡山まで移動しても瀬戸には乗り継げません。そこで、私は広島駅で駅員に「捺印はこちらでしておきます」

と言って、先生や生徒達をホームまで誘導し、普通列車の到着を待ちました。入線してきた普通列車は、比較的混んでいましたが乗車後の混乱はありませんでした。問題は検札をどう切り抜けるかでした。そこで、三名の添乗員は腕章を外し一般客に紛れ込みました。幸い普通列車ということもあり、車掌は検札に来ませんでした。また、岡山駅でもそのまま瀬戸に乗り込むことが出来ました。

しかし、これはいわゆる、「無賃乗車」です。旅行終了後、新しい団券を持って責任者と一緒に国鉄にお詫びに行きました。えらく絞られたのはいうまでもありません。私が申請書に普通列車を記入していなかったのが原因でした。今なら懲戒ものですが、これで済んだのが不思議なくらいでした。



エトバス ノイエス ―恩師の思い出―

新井 良佑

最近、疎遠になっていた同窓生との交流が少しずつ増え、若い時の良き師・良き友との出会いの有り難さを再認識させられている。多くの恩師に恵まれたが、私が最も影響を受けたのは大学の卒業研究の指導教授である。

留年という最大の危機をかうじて切り抜け、なんとか四年生に進級したが、自堕落な生活が続いていた。いつも、昼休み時の学生の群れに紛れて登校していた。実験室に入り、「ああ、今日もうまくいったな!」と、安堵の胸をなで下ろしながら、流し台の昨日使った実験器具を洗い出したときだった。突然、後ろから大きな声が出た。振り向くと、真後ろに、先生の怒った顔があった。

「新井君、君はいつもこんな時間に来ているが、午前中は何をしてるんだね!」。どうも、今日という今日は待ち伏せしていたようだ。「すみません。つい夜更かしをしてしまいました」。本当は徹夜の麻雀で、朝ひと眠

りしてから登校していた。

「いつもじゃないか!」「今後、気をつけます!」

親しい麻雀仲間の誘いをむげに断ることもできず、眠気をこらえながら、前よりは早く登校するようにした。

しかし、先生の監視は厳しく、朝に夕に実験室を見回りに来る。必ず、私の実験台で立ち止まり、「エトバスノイエス(何か新しいことは?)」と話しかけてくる。

「特にありません」「そうだよ、君。研究とはそんなものだよ」と言い、あれこれ実験内容を聞いたりして、なかなか立ち去ってくれない。

何はともあれ、このような日々が一月ほど過ぎたころ、たまたま同じ研究室に配属されたM嬢に用事があり、彼女の実験台の所に行くと、「先生がひどく心配して言っていたよ」と言われた。「何かな」と聞くと、「新井君は、あれでも社会に出たら、ちゃんとやれるんだろうな、って」と、彼女。

先生の厳しい面しか知らなかった私は、先生の慈父のような心遣いが胸に沁み、その日を限りに、徹夜の麻雀は、どんなに誘われても断った。朝早くから研究室に行

き、先生が来る前に、実験を始めてるように心掛けた。

先生から「エトバス ノイエス」と聞かれるのが楽しい日々になったが、なかなか結果がでてこない。楽しみがだんだんと苦痛に変わってきた。先生から言われるままに実験をしても、結果が出そうもない。いつの間にか自分なりに文献を調べ、自分の考えで実験をするようになっていた。

そんなある日、「君、自分の考えで実験をするのは構わないが、私の言ったこともやってくれよ」。いつもの温厚な先生とは別人のような顔つきで、語気強く言われた。

先生は戦前の南満州鉄道株式会社勤務時代からライフワークとして何十年も研究しておられるのだ。その先生の指示をないがしろにし、できの悪い学生が勝手なことをやっていることに堪忍袋の緒が切れたようだった。学生最後の夏休みを返上し、二通りの実験をやり遂げた。私の考えた手法で、精製方法がなかった頁岩油(頁岩油)から初めて含硫黄化合物を分離精製できた。しかし、構造を解析する決め手の手段がなかったので、先生は私の得た結果

に半信半疑で、なかなか納得しなかった。

幸いなことに、最新鋭の分析機器(NMR)が大学に導入され、試験運転を開始したところであった。分析機器が普及しだした頃で、先生はまだ伝統的な化学分析を正当な手段としていた。しかし、他に手段がなかったので、この新しい分析法を試みた。得られた分析チャートは、想定した化合物であることを証明していた。教授室に飛んで行き、先生にそのチャートを手渡した。どれどれと手に取り、しばらく眺めていてから、おもむろに言った。

「君、これからは機器分析の時代だね。これからは自分で思ったように、実験をやって良いよ」

「事実の前には、どんな人も謙虚になれるものだ」ということを初めて教えられた。卒業し、社会人になり、決して平坦でなかった道を、今日まで歩き続けてこれたのは、この貴重な体験のお蔭である。

「あなたがたは真理を知る。そして真理はあなたがたを自由にする」(ヨハネによる福音書八章三十二節)

好々爺はいかが？

新山 章一郎

定年後二十年もすれば対外的に交流する人が減って、話す機会もぐっと少なくなる。家でも家人たちとは話が合わず、相手にもされない。尤も嘆くことはない、これが当たり前なのだ。思えば僕も両親に同じことをやってきた。因果応報だ。それが人生なら、文句を言っても仕方がない。といって、年寄りとは寂しいものだ、なんて悟りきって、閉じこもりになろうなんて気は毛頭ない。しかし、この状態は自然には解消しない。誰もかまってくれないのならこっちから他をかまてやろう。

年をとってのメリツトの一つに、誰にでも（若い女の子にでも！）気兼ねなく（臆面もなく）話しかけられるということがあるようだ。

僕はこの利点をフルに活かして、不特定多数の皆にこっちから話しかけることにした。話しかけなければ、誰も話しかけてはくれない。話すといっても誰と、どの

ように？ 僕は、いつも行く銀行や郵便局の警備員などから始めた。彼らは炎天下、また寒風の中ただ突っ立っているのだ。さぞ退屈だろうと思うと、つい「ご苦労さん」と声をかけたくなる。殊に定年後のアルバイトらしい人にはつい親近感を覚え、行きがけに一声掛ける。「暑（寒）いね」、「一日立っていて大変だね」、「腰が痛くない？」。何でもいい、こっちが感じたことをそのまま口にすれば良い。どんな仏頂面のおじさんでも途端に、にっこり。彼らだつて手持ち無沙汰なのだ。翌日からは「おすっ」と手を上げ合う仲になる。

彼らから実のある話を期待するわけではない。ただこちらから声をかければ、自分が能動的、主導的に人生を生きているという気になって気持ちが良い。現役のところ職場に「おはよう」と声をかけながら入っていったことを思うと、声をかけ合える相手がいることだけで嬉しい。

道路工事の交通整理のおじさん、おばさんたちにも声をかける。通りすがりに「ご苦労さん」の一言でよい。ついこの間は二、三度見かけた工事現場の若い女の子に通りがけに「がんばってるね」と声をかけた。腰の曲がっ

たおばあさんを一生懸命誘導している姿に感じたからだ。彼女、始めは「えへっ」と笑っただけだった。工事期間は長いらしく、そこを通るたびに彼女を見かけた。

四、五日たったある日、子供たちを通すために赤い警防ランプをさっと横にかざして、進入してきた小山のようなタンブを止めた彼女に「格好いい!」と通り過ぎながら声をかけた。「やだあつ、おじさん」彼女、派手な声をあげてニツコリと華やかな笑顔を見せてくれた。ダンブの通った後、ちよつと振り返ったら、壁を塗るような格好で大きく両手を振ってくれた。皆、人生の働き甲斐生きがいをかけて毎日を精一杯生きているのだ。

これが続けていたら、公衆の面前で誰にでも気軽に声をかけられるようになった。この間、ラッシュ時の東京駅で、足早に行き交う通勤者にぶつかりながら歩いている目の不自由な人を見た。その瞬間、僕は何のためらいもなくその人に声をかけ、誘導してあげることが出来た。以前は、「危ない、案内してあげなければ」と思いながらも、つい声をかけるタイミングを失して自責の念に落ち込む時が多かったのに。自らを特別に駆り立てなくても

そんなことが自然に出来るようになったのが嬉しかった。店屋で何か買っても、「どうも」と一言、レジ嬢がにっこり微笑んでくれた。バスの運ちゃんにも降りぎわに「どうも」。自転車で道を譲ってくれた人にも「ありがとう」。これをやらないと何だか気持ち悪い。相手に感謝するということもあるが、それよりは自分が気持ちいいから、自分のためにするのが大部分だ。

変なお爺さんと思われるかも知れないが、僕の行動は人畜無害。それでこつちがよい気持ちになるのならよしとしている。そのうちに、ちよつとでも自分に何かをしてくれた人には「ありがとう」と反射的に出るようになった。なんだか鷹揚な気持ちになって、世の中が明るく住み心地が良くなった。街中に友達が大量で来た。

『明るい笑顔を』などとTVで言っているが、短い余生が楽しくなった。圧巻はつい先日、近くの踏切で警報機が点滅し、チンカン言い出したばかりの線路に車で突っ込んで警察に捕まり、交通違反切符を切られたときだ。黙って違反切符を差し出したお巡りに、車の扉を閉めながら僕は思わず言ってしまった。「ありがとう!」

虹の橋

新田 由紀子

「ただいま、ラツツ」近づいて声をかけると、カタカタと骨を鳴らして応える。銀綾錦に包まれた小さな壺の中で、そしてそれは私の心の中で。

猫が急逝して二カ月。家の中をしなやかに動く者の姿がないことに、私はまだ慣れない。玄関のドアを開ければマットの上に、台所に立てば足を8の字に、階段を上があれば先回りして二階にいる。ソファに座れば広げた新聞を押しつけて膝にのる。鳥の鳴く日、雪の降る日、風が庭木を揺らす日、前足を立てて行儀よく座り、いつまでも外を眺めている。猫はまるで動く家具のように、さまざまな季節のさまざまな日、家のいたるところで優美なポーズを決めて時をすごしていた。

共に暮らして十六年。どれだけの愉快で楽しい思い出をもたらしたことだろう。やんちゃ盛りの日々。縁の下のヒキガエルにへっぴり腰でパンチの空振り。カラスの

『ガッカボン』に追いまくられては血相変えて逃げ込んでくる。スズメやトカゲを咥えて凱旋した時の誇らしげな顔。

時は移ろい、生来の気品に風格が備わると、猫はあたかも家族の中のカリスマのようになった。いつ言葉話し出してもおかしくない表情豊かな面差し。しっかりと結んだ端正な口元。頬から胸にマフラーのようにまとった白く柔らかない被毛。謎めいた金緑色の大きな丸い眼。その張りのある瞳の中に老いの翳りを見たのは、つい最近のことだと思う。ああ、ラツツも晩年になったのだ。生き物の限りある命がいとおしく、私は猫といっそうの対話を交わす。

そして、Xデーは突然やってきた。体の不調を獣医に見せて四日目の晩、辛さを全身で訴えてじつとうずくまる様子に、私は猫の死がすぐそこにきているのを知って慌てた。水を好きなだけ飲ませてから抱いて二階に上がり、枕元に横たえて床につく。未明に咳き込むような息の音で目覚めると、猫は眼も開かず、首をゆっくり私の方に回して「モウ、イクヨ」と言っている。私は思わず

猫の鼻先に自分の鼻をつける。その瞬間、磁石のような強い想念の波を受けた。臨終の猫は私にメッセージを送り届け、私は思わず微笑んでいた。微笑みの理由はわからない。首を横たえると、猫は最後の息を終えて、しずかにゆっくりと後ろ足を伸ばして天に翔け昇っていった。

作者不詳の「Rainbow Bridge」という英文詩がある。

天国の手前に 虹の橋とよばれる橋がある
愛された動物たちが この世を去ると
やってくるころ

そのかたわらの 日に輝く丘の上で
動物たちは楽しげに 走り戯れる
草や水や食べ物の不自由はなく
病も老いも もはやなく
なえた足は具わり 光り失せた目は癒えて
もっとも愛らしかった姿のまま

でも 動物たちは 気づいている
あとに残してきた懐かしい人たちが
ここにいないことを

ある日 遊びの輪の中で 一匹が立ち止まる
瞳を見開いて 遠く一点を見つめると
飛び上って まっしぐらに走り出す
速く 速く もっと 速く
喜びに体をふるわせて

また会えた
ずっと忘れることのなかった 愛らしい友だち
私は 猫を胸に抱きしめて
温かく 柔らかな 毛をなでて
いちずな金緑色の瞳を覗き込む
「ただいま ラッツ」

そうして 一緒に虹の橋を渡って行く

(意識／一部改変)

文明進歩の早すぎと人類破滅

杉浦 右藏

今回の地震津波原発の被害者に哀悼の意を表します。

最近は何でも有りの時代になった。幾つかをツブヤク。

情報通信の進歩は早過ぎないか。ケータイ電話機が小型化して普及し始めて、1Gから、2G、3G、3.5G、3.9G、近々には4Gへと世代は急発展した。未だ二十年しか経っていない。つい此の間まで欲しかった固定電話が待たずに直ぐ架設出来るようになって四十年、七千万加入者を境として、もう日本は固定電話のマイグレーションを発表し、十年後には全てを新世代網に移行させようとする始末だ。私共はその時この世にいない。

TVも然りだ。昨年七月のデジタル化切り替えによって映っている品物を全て捨てなければならぬ羽目になった。私の推計では、ブラウン管TVは一億台、付属使用のVTR・DVDは二億台、TVも受信できるラジオ二億台、くらいが藻屑と消えた。下降気味の日本景気

に大いに貢献した。しかしデジタル切り替え以降、日本の各製造会社はコスト高から製造撤退を余儀なくされ、後発国である台湾・韓国・中国などから輸入する有様になった。デジタル化は世界二百ヶ国余りが十年くらいかけて移行するだろうから、利活用は未だされている。しかし時代変革の刹那といえモットイナイ話である。

TV技術も、アナログTVは三つの方式があった。ドイツのPAL、米国のNTSC、フランスのSECAMである。NTSC採用は米・日・フィリピンだけ、SECAMは仏圏内のみ、他の国々は圧倒的にPALを採用し、世界のテレビ台数では八割を越えていた。デジタルTVではどうか。世界の趨勢は、米国ATSC方式、欧州DVB-T1方式、英国DVB-T2方式、日本ISDB-T/SBTVD-T方式、この三方式に絞られるだろう。米国方式は米国・韓国のみ、日本方式は日本とブラジルと南米に売込み中。他の百五十数カ国は数年前のITU総会（世界電気通信連合）にて、欧州方式採用に賛同している。日米の孤立は避けられなかった。研究開発でもITU研究会へのコントリビューション数は、

日本はバブルまでは調子が良かったが、現在は客観的に見て欧米・中国・韓国より低い。世界標準を検討する段階では日本は良いところまで行くのだが、絞り込みのところで大分負けている。今世界の標準で日本が威張れるのはファクシミリ・G3方式しかない。結論は力だと思う。

日本の教育制度も良くない。明治の偉人が作った、六・五・二・四のほうがいいと思う。此の制度を崩して学力の劣等化を改革したのは米国である。小学校五・六年生に青雲の志を持たせるカリキュラムに戻すべきである。例えば、主として企業経験者による理科支援制度は、三年実行しただけで「仕分け」で途中廃止された。私は千葉県教育庁の理科支援特別講師として登録されて十一校を体験した。その後の教科書改訂もぱっとしない。

一月、地域自治会の研修旅行で横浜へ行った。三溪園の展望台から前と後を見ると、明治の成金の憩いの場所と今の横浜との百年の落差に驚きを感じた。

世界の力のバランスからみると、超大国であった米国は中東紛争の主役を演じてアメリカの国力はガタオチになった。中東にチョッカイを出して成功した試しは無い。

特に石油資源に対する米国・欧州の利権思惑は人類世界を崩壊させるものだ。原子力発電の持続・廃止・代替などが話題になっている。良い案が無い。太陽光・風力・地熱などは、コスト面から比較すると原子力の比ではない。特に太陽光発電は利用範囲が限られている。諸工業や家庭消費の量を賄うのは無理である。これに助成金を国が負担することは国家財政の破壊である。風力は、地球高緯度に位置する欧州に適している。日本の平均風速は七メートルの計測統計である。欧州緯度は、日本のように台風も無く、安定して平均十五メートルだそうだ。この風力発電を代替の一部にするには、欧州から技術を買わず、日本の平均風力に合わせた新技術の風力発電システムの開発が急務である。原子力発電も欧米では第四世代のトリウムなどを利用した安全な原子炉が開発研究されている。旧型の原子炉の廃棄方法と新型への原子炉に置換する研究が急がれる。代替え資源の開発も急務だ。

放射能汚染除染物の濃圧縮方法を早急に開発し、最後は第二次大戦の英霊に黙祷して、無人島の東京都小笠原村硫黄島に再び百年御世話になるしか無い。

原発 記録し、記憶し、考え続ける

大越 浩平

その1 原発作業員の事

* 3月24日、原発現場作業員3名が、タービン建屋の地下にたまった放射能を含む汚染水に浸かりながら4、50分作業し、高レベルを浴びる被曝事故発生。東電は毎時500^ミシーベルトの放射線量を確認していたが、作業員にその情報を伝えていない。しかも水たまりを確認しておらず、長靴を履いていたのは1人。後日東電の記者会見で、高濃度汚染水に浸かった原発作業員の健康状態を質問すると、東電担当者は、作業員の連絡先は聞いていないのでわかりません、と答える。

* 3月31日、放射線量を管理する携帯線量計が足りず、180人が線量計を持たずに作業。

* 4月27日、東電の女性社員が基準値の3倍を超える17・55^ミシーベルトを被曝したと発表。

* 9月15日、東電は原発事故の復旧作業員65名と連絡

がついていないと発表。東電は下請け企業に対し、作業員を内部被曝測定に來させるよう求めた。しかし半数の業者は『該当する従業員は在籍しない』と回答、残り20日まで回答が無かったという。

* 1月13日、関電原発工事作業員に、暴力団関与者あり、容疑者3名逮捕。

その2 交付金や寄付金など

* 青森県東通村は村内で、原発立地・建設中の東電と東北電力から157億円受け取っていた。電力会社は資金提供を村の要請にて行い、電力会社が受益者となる『負担金』と地域振興向けの「寄付金」として支払う。村はそれらの金額を予算上「寄付金」と分類せず「雑入」とする。従って「寄付金」の存在すらわからない。村はその使途について個別の事業費などを公表していない。

* 原発15基を抱える福井県と県内4市町に、匿名を希望する大口寄付が少なくとも502億円あった。県と電力会社はそれを認めているが、詳細は公表しない、答えられないとしている。

* 原発事故当時、原子力安全委員会の安全委員と

非常勤の審査委員89人のうち、斑目委員長を含む24人が2010年までの5年間に、原子力業界から約8500万円の寄付を受け取っていた。

その3 保安院が「やらせ」の要請など

*経済産業省原子力安全・保安院から、原子力関連シンポジウムなどでの「やらせ」の指示を受けた事を中部電力と四国電力が「暴露」した。国の指示による「やらせ」が7件見つかった。

*九州電力は玄海原発再開に向けたテレビ番組で、社員らに賛成意見を投稿させた。佐賀県は再開に向けた懸念材料として、「危惧される国サイドのリスクは『菅総理』の言動だ」と指摘した。浜岡原発を止められた「中部電力の幹部は菅（缶）蹴りたいよ」と漏らす。

*北電の「やらせ」の背景には、泊3号機プルサーマル計画の同意に期間を設けた事実がある。期間内に受け入れた場合に「交付金60億円」を支払う制度を創設。11カ月という短期間での地元の合意形成が図られた。

その4 核燃料直接処分コストの隠蔽

*2004年4月、原子力政策課長が、使用済み核燃

料をそのまま捨てる「直接処分」のコスト試算の隠蔽を部下に指示していた。関係者のメモには「昨日、○○（実名）が課長に（試算の存在を）伝えたところ『世の中の目に触れさせないように』との厳命が下った」と記載されている。2カ月後、再処理工場稼働で生じる費用約19兆円を国民が負担する制度が取りまとめられた。直接処分のコストは約4兆から6兆円と算定されており、再処理の4分の1から3分の1で済むことを意味する。直接処分が再処理より安価であれば、政策変更につながる。

その5 事故対応の政府会議で議事録未作成

*事故対応に関する15の政府会議のうち、10の会議議事録が作成されていなかった。政府の政策対応の検証ができず、今後の対策にも禍根を残す。

その6 再稼働へ続く情報操作

*政府は昨年7月、今夏の電力供給について9・2%不足すると発表、一方で6%弱余裕の別の未発表試算あり。1月26日枝野経産相は、今夏原発ゼロを想定。

その7 東電、夏に作業員指摘、凍結対策放置

*1月31日までの凍結による配管水漏れ23件。

地震津波・噴火―菅江真澄遊覧記から

大月 和彦

江戸時代の旅行家菅江真澄（一七五四―一八二九）は、三十一歳の時に郷里三河を出てから七十五歳で死ぬまで旅で過ごした。その足跡は信濃、出羽、津軽、南部、蝦夷に及び、土地の様子や庶民の暮らしぶりの詳細な記録を残している。この中に災害史（理科年表による）に残る地震・津波・噴火を直接見聞した記述がある。

浅間山大噴火

天明三（一七八三）年信濃に入った真澄は伊那、諏訪、松本を経て七月には中山道の洗馬宿（塩尻市）にいた。滞在先の庵で本を読んでいると、大きな音がしたので雷かと思って外に出てみるが変わった様子はない。村人は、今の音は先日から盛んに火を噴いている浅間山の噴火の音だという。数日後の夜半また例の音がした。山の向うに噴煙が見える。浅間山の近くでは小石や灰が降り注ぎ、

家は壊れ、埋まり、命を失った人は数知れないと聞く。昼ごろには勢いを増し、地震の揺さぶりのように山や谷に響き渡る。棚の徳利や小鉢などが落ち、壁は崩れ、戸障子ははずれ、傾いた家が多いという。役所の早馬が頻繁に走っていた。

浅間山の西南約六十kmの場所で体験した天明の朝焼け―浅間山大噴火の記録である。

渡島大島の噴火と津波 寛保元（一七四一）年

天明八（一七八八）年に蝦夷松前に渡った真澄は渡島半島の西海岸を歩いていた。江差近くの村で、石碑をさすりながら泣いている老女を見る。聞くと、五十年ほど前のことを話してくれる。盆踊りに興じていると突然空が暗くなって灰が降り、海の方から大きな音とともに高波が押し寄せてきた。村人は泣き叫びながら山に駆け上がった。後日砂浜に埋まっている父親が見つかったという。最近建てられた供養塔の下で泣き悲しんでいるのだった。この津波の犠牲者は一四六七人。松前町郊外に慰霊碑が建っている。

下北半島地震 寛政四（一七九二）年

十二月、真澄は年越し市で賑わう田名部（むつ市）にいた。二日、「朝地震あり、雪が降り、冴えていた」と記す。二十八日午ごろ家が倒れるほどの強い地震が来た。人々は杓も履かず雪の上に逃げ、声をかぎりに万歳楽、万歳楽と唱えていた。舟が波に揉まれるように軒が傾き、ひしひしと鳴り響く。雪も下から持ち上げられ、揺れていた、と描いている。陸中陸前磐城地震（M八・〇）のことと思われる。

男鹿地震 文化七（一八一〇）年

蝦夷、津軽から再び秋田に入った真澄は男鹿半島を歩いていた。八月になると毎日小さな地震が続く。半島南部の脇本（男鹿市）近くに来た時に空模様が変わり、海が濁り、寒風山にうす霧が立ち込めた。津波が来るかもしれないとの噂を聞く。知人宅にいと大きな地震があった。脇本と船越など半島南部の被害が大きかった。二日後また大きな揺れ。軒や庇が傾き、人々は戸外に逃げまどう。泣き叫びながら病人や老人の手を取り、市籠

（乳児を入れる藁製の籠）を逆さに抱えて走り回る。壊れた家では醸してあった酒がこぼれ、小鉢が転がり落ちる。立っているとふり倒される。梁は音を立てて倒れ、軒近くの山が崩れ落ちる。命の危険を感じて樹にすがり竹林に逃れる。揺れが収まった頃、肥やし（堆肥）塚の上に戸板を敷いて仮小屋を作った。「眼前にこの悲惨な有様や人の嘆きを見て世の中が疎ましく思われた」と記す。男鹿半島を襲った羽後地震（M六・〇）のことである。

これより六年前の文化元（一八〇四）年に、松島と並ぶ名勝・象潟が隆起して陸続きになった象潟地震（M六・〇）があった。当時真澄は出羽にいたが、この時の記録はない。

後に「鳥海山の大噴火で、有名な象潟の浦が埋もれ、潮越の家が倒れ、多くの死者が出た」という話に魂も身もそわない思いをした」と記している。

ダマスカスの記憶

中村 爽

中東のシリア国内では昨年来、アサド大統領政権と反体制市民デモとの激しい争いが続いている。最近の報道では第三の都市ホムス、西部のザバダニを始め、各地で衝突が起き、政権の武力弾圧でこれまでに五千人以上の市民が殺害されたという。背後には宿命的な宗教、宗派、民族の対立もあるとしても、「アラブの春」は来ず、残酷な民衆弾圧は絶えない。

シリアでは一九七〇年にバッシャール・アサド現大統領の父、ハーフエズ・アサド將軍が流血クーデターによって政権を獲得し、翌年に大統領に就任、厳格な独裁体制をとった。二〇〇〇年に彼が死亡した後、次男のバッシャールが選挙で次期大統領に選出され、任期七年を終えた二〇〇七年に再選された。民衆の間には、四十年にも及ぶ長期世襲政権に対する拒否感があるのは否定できないだろう。現状が続けばアサド政権は着実に崩壊に向

うと見なす識者もいる一方で、政権が倒れることはありえないという意見もあり、行く先は見当がつかない。情勢打開を目指すアラブ連盟の調停は成功せず、遂にアサド大統領の即時退陣を要求する事態となった。

首都ダマスカスでは大規模デモは抑えられてはいるが、全国的な騒乱で国家経済や市民生活は多大な影響を受けている。内外からの観光客の姿が街から消え、物価は軒並みに上昇。エネルギー不足で一日数時間の停電が行われ、スタンドには灯油やプロパンガスを求める市民の列ができているという。それを聞いて四十年近く前のダマスカスの光景が頭に浮かんできた。

一九七三年九月から年末にかけて私は社用でダマスカスに出張していた。間が悪いことに十月六日に第四次中東戦争が勃発し、九日の白昼、イスラエル軍の空爆に遭遇した。その体験は「悠遊」第六号にも書いたが、今のダマスカスではあの終戦直後の状況が再現されているようだ。当時の日誌を見ると、薄れ掛けていた記憶の断片がまとまってよみがえってくる。あのころ、私は後輩の同僚と二人で住宅街にマンションを借りて住み、戦後の

混乱で仕事が一向に進まぬ苛立ちと、日々の寒さに耐えていた。以下は日誌の抜粋だが、今思うと、記されているのは、たまたま現地に居合わせたよそ者の身勝手なたわごと、と取られるかも知れない。

「急に寒さがやってきて、夜には今季最初の冷たい雨が降りしきり、晩秋の感深し。ダマスの秋は短く、このまま冬に入るといふ。今は停電中。ロウソクの光でこれを書く。大理石の床は冷たく、足の先からしんと寒さが上ってくる。製油所、発電所など破壊され、日常生活への影響は甚大。電気や水道が止まり、停戦後の今も街は機能を失っている。商店、レストランなどはよろい戸を下ろしたまま。夜の街は真っ暗で人通りが途絶え、たまに通るだけの車のヘッドライトの光が闇を切り裂いて行く。(一九七三・十一・一)

「今夜もまた停電。街ではガソリン、プロパンガス、灯油が不足。宿舎のガスも無く、茶も飲めず、冷や飯ばかり。気が減入っていけない。」(十一・八)

「家の前の街路樹が半分以上黄色く変わる。十一月も終りに近い。政府機関は開店休業で、事は一向に進まず、

宿舎にこもって苛立つばかり。セントラル・ヒーティングは依然動かず、ますます寒い。借りてきた東欧製の古物のケロシンストーブは、点けると頭痛がするばかりで、この天井のばかに高い家ではまったく効果なし。決心してボタンガス・ストーブを購入。ガスボンベのスペアは一本しか無かったが止むを得ず。ストーブの放熱板の赤さを見つめていると心がなごむ。赤い火の光と暖かさがこれほど安らぎとなるとは思わなかった」(十一・二十七)

今のダマスカスでも冬の寒さの中で、多くの市民が辛い生活を強いられているのだろう。さらに、非人道的な武力弾圧を受け、日々犠牲者が増えている地域の現状は想像を絶する厳しいものに違いない。一日も早く騒乱が収まり、平穏な日が迎えられることを願うばかりだ。

だが、現状はますます厳しい。アサド政権はアラブ連盟の大統領退陣要求を内政干渉として拒否し、事態の推移によっては、反体制派武力勢力と内戦になる可能性もあるという。あのころ、我々を親切に迎え入れてくれたシリアの人たちの不幸を思い、胸が痛んでならない。

氷山迫る『タイタニック号日本丸』 最後の手段「消費税率アップ」を急げ！

鳥海 博

今の日本の財政の状態は、最悪になっています。

①国に1千兆円もの債務残高があるのに、毎年これが増えて行かざるを得ない状況にあることと、②歳出額が100兆円近くもあるのに、税収がこの所40兆円少々しか無く、足りない分(50兆円程)の殆どが国債発行に依存していることの二つです。税収を上回る国債発行がここ3年続いています(来年度もそうですから、4年連続です)借金が定常収入を上回るなんて、どう考えても異常です。しかも歳出は拡大傾向にあります。一方、税収は増える目処がありません。デフレ状態が続いていて、いわば経済が縮小傾向にあるからで、1980年代までに見られた「燃えるような経済成長」など、とても期待出来ません。政治家は二言目には「経済を成長させて税収の拡大を図る」と言いますが、お題目に過ぎません。

経済成長に必要な「イノベーション」が現下あまり無いからです。規制を緩和・撤廃して経済成長を図ることも確かに一策ですし、また、他国の経済成長に乗って輸出の増大を図ることも必要ですが、成熟した資本主義国たる我が日本、「低成長時代」は免れません。

歳出に目を向けると、社会保障費(年金、医療、介護)は、高齢化に伴い漸増傾向にあります。毎年1兆円は増えると言われていますが、それだけでは収まりません。国債費は、目下の低金利に救われ、さほど増えない予想ですが、こちらも増えこそすれ減ることはありません。地方交付税交付金と合わせ、これらで歳出の70%以上も取られ、いわゆる一般政策経費は国家予算の30%にも満たないという悲惨な状況が続いています。政策経費である公共予算や防衛費を減らすのにも限度がありますから、社会保障費の見直し・減額に手を付けなければいけない局面に差し掛かったようです。なお社会保障費は、原則として加入者の保険料と税金で賄われますが、それでも足りないのです、10年前からは、積立金を取り崩しつつあります。その結果、最高時149兆円あった積立金は、今

や121兆円に減り、このままの趨勢で行くと、10年後にはゼロになると予想されています。

歳入の頼みの綱・国債も、公的債務残高がGDP比200%という世界最悪の体たらくで、もうこれ以上の発行は危険極まりない状況です。国債発行を支える大黒柱である日本の経済競争力の強さ―これが貿易収支や所得収支の黒字化を産んでいる訳ですが―「貿易収支が31年振りに赤字転落」ですから、国債も今までみたいな安易な消化は期待出来ません。

結局は、最後の手段である消費税率アップが喫緊の課題になりました。欧米諸国（大体20%前後）に比べて、日本の税率5%は格段に低い水準です。今の消費税総額は13・5兆円（国庫分10兆円）ですから、5%上げれば10兆円の歳入増です。歳出の見直し（例えば公務員の給与を引き下げる、国会議員の数を減らすなどの行政改革）を行う一方で、10兆円の歳入増を齎す消費税率アップは已むを得ない政策手段です。とは言え、増収は高々10兆円です。依然として、40兆円近くの財源不足です。国債の40兆円発行が続きます。国家の債務残高は益々積み上

がって行きます。本当ならば、消費税率はもう少し前に引き上げるべきだったのです。徒らに遷延した咎めがここに来て一挙に噴出して来ました。

ところで、困った問題もあります。この13・5兆円は、国民が税金として負担する訳ですから、我々の可処分所得が1年10万円も減ることになります。ジジババ世帯で言えば、年20万円、毎月2万円近い生活費減です。昔よく言われた「耐乏生活」でしょうかね。子どもや孫に頼られても、今までみたいには行きません。

一般政策経費を減らせば、もしかして、道路は穴あきだらけで、おまわりさんも居なくなるかもしれません。みすばらしい社会になりそうですね。社会保障費を減らせば高齢者が困ります。どうも八方塞がりになってきました。経済成長に淡い期待を掛けながら、「一億総我慢」ですかね。

いずれにしても、もう「待ったなし」です。『税と社会保障の一体改革』ではなく、これに行政改革も加えた『三位一体改革』を大至急に行わないと、タイタニック号は間違いなく、氷山に衝突します。

故郷訪ねて

浜口 須美子

急に自分のルーツの地を訪ねたくなった。

熱中症で死者が出たという酷暑の中、娘と二人で、私
が三歳まで住んだ奈良高畑町に出かけた。引越した後
も隣りに伯母が住んでいたので、学生時代は夏休みに泊
まりに行った。家から数分で春日大社の森に行ける。森
への道は、ささやきの小道と名付けられ、恋人達が囁く
道。中学生の私はスケッチに出かけた。若宮あたりは、
人もあまり通らない。たまたま通りかかった女子大生の
グループが、私の絵を覗き込んで「じょうずね。何年生？」
と聞いた。小柄だった私は「小学五年」と答えた。「小
学生にしては、すごくじょうずじゃん！」実は中学生で、
まして美術部なんて言えなかった。
今もこのときの嘘を覚えているのは、自分の見栄っ張
りな性格に気づいた最初の出来事だったからかもしれない。
い。

「宿題で植物採集をしたい」と言ったら、伯母は近所
の家の庭で咲いている紅蜀葵（コウショッキ）、花魁草（オ
イランソウ）などをもらってきてくれた。私は野の花の
つもりだったが、植物採集の宿題なのにこんなに華やか
な花が並んでいいのかしら、と思いつながら提出した。
今もこの押し花の事を覚えているのは、伯母の好意に
本当の事が言えず、自分の意思をはっきり伝えられない
性格に気づいた最初の出来事だったからかもしれない。

毎年、伯母は本屋に連れて行ってくれた。好きな本を
買ってあげると言われて、いかにもこの本が欲しかった
かのように「灰色の谷の秘密」を買ってもらった。

内容は記憶にないけど、今も題名の記憶が残っている
のは、まるで文学少女のように振舞う自分のいい格好し
いの性格が印象に残っているのかもしれない。

そんな数々の思い出を胸に、娘と私は近鉄奈良駅から
商店街を抜け、猿沢の池から割石町、そして奥山ドライ
ブウエーに続く道をひたすら歩いた。

私のルーツ、発祥の地は、今は素敵な喫茶店になつて
いた。

娘と二人、まるで倒れこむように喫茶店で水分補給した。住んでいた家は奈良の町の風致地区にあるため、中庭の手水鉢、大きな飛び石、懐かしいトクサの群生、風情は昔のままに残されて、私の生きた時間以上にそこにあり続けていた。

娘が横で、全身アセモだらけになりながら言った。

「きつと何年たつても、今日のこの日を忘れないと思うわ。最高に暑くて死にそうになった、お母さんのふるさと、奈良のこと」

私の奈良の記憶の数々、娘の記憶の中にも今また、新たな奈良の記憶が刻まれたことだろう。

もしかして「こんなに暑い日に歩くのは嫌だったけど、お母さんがうれしそうやったから、よう断らなかつた」という「本当の事が言えず、自分の意思をはっきり伝えられない性格」を娘が自覚した出来事として記憶に残ったのだと思うと、私から娘にひきつがれていくものに感慨を覚えた。

娘よ！ 付き合ってくれてありがとう。



奈良の「鷺池」

原発とホーキング史観

中村 將陸

まえがき

ある講演会で、地球外知的生命の存在を尋ねられたステイーヴン・ホーキング博士(筋委縮性側索硬化症を患っている車椅子の物理学者)は、「この宇宙には知的生命は多数存在している。ただ、知的生命同士が遭遇する可能性は実に低い。文明が高度に発展すれば、必ず核戦争が起き、文明が短期間に崩壊するからだ」と答えた。

我々の住んでいる地球では、人類は核を軍事利用にも、平和利用にも使用できる技術を手に入れたほど、文明は高度に発展している。知的生命は必ず核戦争を起こすことを、あたかも物理現象を説明するように淡々と語る博士の言葉には不気味さを感じたが、果たして博士のこの史観は的中するのだろうか。広島、長崎に原発が投下されて六十七年、その後の人類の歩みを考えるとあながち冗談として笑い飛ばすことが出来ない。

一貫性のない米国の姿勢

米国が核拡散防止条約を楯に核兵器の保有を監視しているにもかかわらず、核兵器を保有する世界の核クラブの数は着実に増え続けている。当初、米、露、英、仏、中の五大国だったものが、いつの間にかインド、パキスタン、北朝鮮を加えた八カ国になった。さらに、灰色と目されているイスラエルやイランを計算に入れると十カ国にも達する。目下、米国は対イラン強硬路線を取っているが、友好国であったインド、パキスタンの核保有に対しては毅然たる態度を示さなかった。特に、何をするか分からない不気味な独裁国家北朝鮮が、I A E A (国際原子力機関) 監視団を国外退去させ、原爆開発にまい進した時も、米国はただ傍観するばかりで、強硬策を貫かなかった。

米国はダブルスタンダードといわれても仕方がない。識者の中には、目下の米国の対イラン強硬策は、共和党から弱腰外交を責められたオバマ大統領の選挙対策に過ぎないという人もいる。こうした一貫性のない米国の姿勢が世界の核クラブの増殖を放置している。

原発は原爆へのゲートウェイ

日和見的な米国の姿勢に加え、世界は原発が核保有のゲートウェイになっている事実から目をそむけるべきではない。原爆には広島に投下された高濃縮ウラン型と長崎に投下されたプルトニウム型とがあるが、特にプルトニウム型の原料が原発から安易に生成される点を重視すべきである。半端でない数の遠心分離機を使って、天然ウランを濃縮して原発の燃料棒は作り上げられてゆく。ここで北朝鮮のような技術レベルの低い国は、低濃縮ウランで原発を稼働し、原子炉内で副産物として原爆の素材であるプルトニウムが生成し、長崎型原爆を製造している。原発が原爆のゲートウェイとなっている現状をこのまま放置するならば、核の平和利用の美名のもとに、核クラブは世界中へと拡散して行き、限りなくホーキング史観の世界へと近づいてゆく。

原発より再生可能エネルギー

我が国では目下、国論が原発推進と脱原発に二分し、全く正反対の主張が激突している。原発推進派の主張は、

産業国家日本の屋台骨を支える低コストで安全なエネルギーは原発以外に考えられないというものである。しかし日本民族は、広島・長崎で原爆の洗礼を受けた世界で唯一の国民である。前述の核の平和利用の美名のもとに進行中の危険極まりない核クラブの膨張をこれ以上傍観することが許されるものではない。

幸い我が国では、再生可能エネルギー利用に対する関心が非常に高まっている。規模は小さいものの、各方面で実に多様な有望な試みが実施に移されている。今まで政府は、核燃料リサイクルの確立などの原発関連事業に膨大な資金を傾斜投入してきた。このため再生可能エネルギー利用の研究が諸外国に比べ大きく阻害されてきたといわれている。

今こそ日本は、再生可能エネルギーの開発面でも実用面でも世界をリードし、同時に、世界に向けて核兵器の廃絶と脱原発を強く訴え、ホーキング史観が実現することを是が非でも阻止しなければならない。

不思議な縁

猪股 重子

この度、好きな俳句の取り持つ縁で、中村晃也さんの紹介により企業OBペンクラブに入会させていただきました。

何も分からずただ面白いと皆様の話を聞いているうちに、一年がたちました。

今回一緒に入会させて頂いた保坂さんとは、横浜の句会で偶然の出会い、今では姉妹以上に助け合いながらの珍道中です。

中村晃也さんとの糸も、NHKのフォト俳句を見て感動のあまりメールをした時につながりました。「ペン俳句」という会があるのではありませんか？ とのお誘いに早速、保坂さんと二人で出掛けました。

二人とも今はペン俳句会のとりになっています。少々の体調不良は吹き飛ばし、二回三回と電車を乗り継いで出席しています。

西川先生の句評は私たちの心にピンピンと伝わり、また、先輩の皆様方のお話は地球の裏側までのスケールの大きさで、何を聞いても面白く目を見張るばかりです。今では年数回の吟行も大きな楽しみです。昨年の三溪園、伊豆の旅など、今年はどこに行くのかなーと先の先まで空想しています。

三溪園では、★秋天に石の貌して亀据わる と詠み、伊豆では、★時雨るるや湖畔の茶屋にそば噺り など、夜の更けるまで俳句三昧、皆さんの俳句好きには驚きました。

句材をさがしにあちらこちら、保坂さんと小さな旅に出ることもあります。そんな中で「春の高野山の旅」と思い込みの旅を描きます。

夫を見送ってから始めた巡礼の旅の仕上げと、俳句の種探しも兼ねて出かけました。初めて泊まった宿坊では、少々の般若湯に和み、一句

★朝掘の筍飯や寺泊

★気まま旅焼き筍の列に付き

など、筍をかじりながらの女旅。これ以上の見事さはな

いと思われる満開の吉野山の桜を見て感激、意気投合し、味をしめ、また二人の思い込み人生の旅を計画しました。

今年の九月には急に思い立って、日帰りバスの旅「戸隠古道と小布施」に行く事になりました。決行日近くになつてから、そのコースは結構身体にきついよ、日帰りは無理だよという声が聞こえてきました。バス会社に変更を頼みましたが折り合いがつかず、「大丈夫ですよ。高齢の方も行っていますよ」との返事に無理はしないで行ける所まで行き、美味しい空気を吸うだけでもと決心してでかけました。

戸隠古道の並木道や古い仏達に感動しながら、とにかく参拝しようと、険しい階段を登りだしました。途中の石段には座って休んでいる男性もいました。大半は帰って来る人。「もう少しですよ」と山の合言葉をかけられ二人で励ましあいながら登り、とにかくあの社殿まで行こうと頑張りました。

お参りを済ませ、「ここまででいいよね、奥の院はパスしよう」と言ったら、近くの人達に、此処が最後ですよと言われてびっくり。まだまだ上があると思ひ込み

登って来たので一段と感激しました。無我夢中と思ひ込みだけで達成した頂点に、やれば出来ると自画自賛し、帰りはルンルン「下山の思想」ではないけれど周りの景色も目に入り、そこで一句

★磴險し戸隠古道法師蟬

と詠み、また、満月を車窓に見ながら

★十六夜の信濃の月を土産とし

など、無事に帰ってきました。

火事場のばか力よろしく二人とも早とちりで、思い込んだら一直線の気質、これからも皆様を巻き込んだの珍道中が続くのだと思っています。

最後に新年の句を記します。

- ★一病を伴侶となせり七日粥
- ★父母の年越えし余慶や鏡餅
- ★笑いじわ増えて母似の初鏡
- ★今生にゆるく遊べと返り花
- ★あるがまま生きると決めし雑煮食ふ

香港グルメ旅行

中村 晃也

新宿病院の新居院長から、彼の提唱する「医食同源」の神髄を味わう会に参加しないかとの電話をもらった。

新居先生は五十回以上の香港食べ歩きの実績を踏まえて、お目当ての香港のレストランに、「今度のメンバーは日本を代表するグルメの集団、ありきたりの料理では駄目だ。観光客用のメニューは受け付けない」との強いメッセージを通達済みとか。

ホテルは広東路に面したマルコポーロ。ペニンシュラホテルやネイザンロードにも近く、有名レストランにも歩いて行ける便利なところ。チェックイン直後に、「ホテルの向かいに雲呑のおいしい店があるよ」と新居先生に教わって早速、「怡園粥麵小厨」に繰り出した。

鮮蝦肉雲呑の美味しいこと！特有の焦げ臭さがアクセントの蝦団子が八個も入っているなんとも言えぬダシの効いたスープ。夕飯のためにお腹のスペースをキープ

しなければと思いながら、結局食べ尽くしてしまう意地汚さ。この店は朝のお粥も絶妙な味でしかも値段も安い。

夜は「富臨燒鵝火鍋海鮮酒家」での活蝦を中心にしたシャブシャブ。鍋の中央にカレー味と醤油味のタレの小皿があり、具に応じてお好みのタレに浸すのだ。上海蟹は横幅が約七〜八センチ。甲羅を開いて黄色の卵をスプーンで口に運ぶ。言葉にならないこの味。今まで食べたどの種類の蟹とも違う味だ。鶏卵をタツプリ使ったシュークリームのような味と舌触りにウツトリ。

二日目の昼は「麒麟金閣酒家」。点心のあと三階建ての蒸籠が現れる。鰻のシウマイ、アワビの醤油味甘煮、ブロッコリーの固ゆでが各階に入っている。豆苗の強火の炒め物は、新鮮な緑色がそのまま保たれ、歯ざわりが最高。デザートに出た、どんなに満腹でも「死んでも食べたいアイスクリーム」も絶品である。

夜は、九竜半島東端の鯉魚門（レイユームン）の「海天花園酒家」。海岸に沿った細い通路の両側に、漁れたての活魚で溢れんばかりの水槽が並ぶ。四十センチはある海老や、甲羅に斑点模様のある大型の蟹、名前も定か

ではない色とりどりの魚、貝柱の長さが三十センチもあるミルガイ。アワビやトコブシ、タコにイカと種類も豊富だ。そこで客が食べたい魚と調理法を告げれば、何分かは調理された食材が客前に出る仕組みである。

先ずトコブシとアワビの醤油味油煮。次いででっかいシャコの油炒め。巨大なボイルドマテガイ。そして蟹、蝦、蒸した魚と続く。最後にこれまた美味しい卵チャーハンとウドン、デザート。これでまだ二日目だ。

三日目の昼は広東料理の「翠園酒家」。海老のクリーム煮。果物で飾られた伊勢海老の目玉は赤い電球が光っている。続いて皮だけを北京ダック風に焼いた子豚チャーンの目玉にも赤い電球が。料理を残してはいけない。苦しくても食べなければいけない「満腹の刑」。

そしていよいよ本旅行のハイライト「西太后のスープ」の登場である。本当の名前は「寶鼎仏跳牆」。仏様でも垣根を飛び越してくる宝の壺とでも訳すのか。なにしろ高さ四十センチはある壺に諸々の具を詰め込み三日三晩グツグツと煮出したスープなのだ。鱧鰭や南海の燕の巣は云うに及ばず、スッポン、黒い大海鼠、鹿の脚の髓、

帆立の貝柱、中国産烏黒鶏、朝鮮人参などが入っている。

混沌とした味だが、スープを飲んで五分たったら全員が顔をボーッと上気したところを見ると、これはまさしく天然の強壮剤なのだ。日本では全部の食材が簡単には揃わない。無理して集めると八十万円はするとのこと。

夜は「北京楼」。北京ダック、蟹肉と卵白をベースにしたトロリとした淡雪のようなスープ、餡子餅のような水餃子、鉄板焼き、北京風手打ち麺。もう感激よりは義務感が先行して全員黙々と出される料理を食べるだけ。

最終日の昼はフェリーの発着所隣接の「飲茶ハウス」。ワゴンの料理の小皿を選び、空港へ発つ時間がくるまでひたすら食べる。遂にベルトがはち切れてしまった。

「中華料理は陰陽五行説にしたがって、陰と陽の食材を組み合わせて栄養のバランスをとり、五色の食材を巧みに取り混ぜて料理のルックスを良くし、食欲を亢進させる」とは新居先生の言。そして中国茶を愛飲すれば余分な脂肪分は体内に蓄積されずにスリムな体型が保たれる。美味でしかも健康によい。「医食同源」の神髄に少しばかり触れた、思い出深い旅行だった。また行きたい！

原発震災に思う

大平 忠

大震災の翌日の三月十二日、経産省保安院の審議官が記者会見で、「炉心溶融が進行している可能性がある」と発言をした。間もなく、その審議官はテレビに登場しなくなった。後の新聞報道によれば、事前の了承も得ずに国民に無用の不安を与えたと咎められたらしい。「ほんとうのことを言ったので飛ばされた」との風評も立った。

このでき事は、半世紀にわたって原発の建設と推進に携わってきた人々の思考と行動を如実に表している。

事故以来、政府官邸、保安院、東京電力、メディア、の発表・発言・解説は、多数のため、全部を聞いた訳ではない。しかし、聞いたものは、後手を踏んだものが多かった。国民に不安を与えるものは、不確かなものとして事前に篩にかけられ、報道が遅れていったのであろう。放射性物質拡散予測システム「SPEEDI」もその例である。国内には無用の混乱をまねくと公表されなかつ

た。我々は、ドイツ気象台の発するシミュレーション映像を見ていたのだが。

昨年十一月に放映されたNHKスペシャル『原発安全神話の崩壊―当事者の証言』には衝撃を受けた。

「当事者」は、いずれも原発の検討・建設・推進に携わってきた官・学・民（東電）の責任者たちである。一つは、一九六九年のこと、アメリカの原発立地基準「ロー・ポピュレーションの地区」は、日本では採用されず削除されたという。さらに、時期は不明であるが、アメリカでは「重要な事故の発生に際しては、まず住民の避難にあたること」が決められた。しかし、日本ではその条項は無い。どちらも、当事者は、「住民に無用の不安を与え建設に支障を生じる」からと削除した理由を述べていた。

原発推進の当事者である東電には「隠し」と「改ざん」の precedent がある。「隠し」の例は、一九七八年には福島第一原発三号機で、日本初の臨界事故（炉外核分裂）が発生し、一九九二年には、柏崎刈羽原発一号機で原子炉が自動停止した。いずれも、遅れて明らかになった。「改ざん」については、福島第一・第二原発、柏崎刈羽原発

で、八十年代から九十年代にかけて二十九件の事故報告が改ざんされていた事実がある。

これらの事例から浮かび上がってくるのは、「経済成長のためには電力が必要であり、原発の建設・推進は必須である。そのためには、国民に無用の不安を与えてはならない」という論理であり、意志である。これはよく考えれば、国民の安全・安心は二の次にすることに他ならない。当事者たちは、分かっているが国の論理と意志に金縛りになってきたのである。一方、異論を唱える者は無視されてきた。これは過去の例が証明している。

山本七平著『空気の研究』には、日本人の思考と行動を表した三つの言葉が取り上げられている。

「民ハコレニ由ラシムベシ、知ラシムベカラズ」

「父ハ子ノ為ニ隠シ、子ハ父ノ為ニ隠ス、直キコト其中ニアリ」。この二つは、いずれも孔子の言葉である。

「日本（タテ社会）では、行きつくところまで行かないと、分かっているも動きがとれない」。これは、名著『タテ社会の人間関係』の筆者中根千枝の言葉である。

「知ラシムベカラズ」の意味は、知らせてはいけな

はなく、知らせることは難しいというのが本来の意味である。しかし、民に知らせてはいけないの意味に曲解されることが多い。国会でも誤って使用されることがある。

孔子第二の言葉は、日本では、忠孝一致してのタテ社会の規範を表す。東電、保安院、政府官邸は、まさしく「民に知らせてはいけない」と、情報を「隠して」しまったのである。己が属する「村」のきまりには忠実だが、外の者が正論を言っても馬耳東風である。石橋克彦神戸大学名誉教授は「原発震災」の言葉を造り、人の生命と健康さらに首都を破滅させる原発の脅威を以前から唱えてきた。原発関係者で知らない者はなかった筈である。メディアは、原発の運動に対して、政治色のないものについても冷たかった。電力会社の広告料の睨みだけではない、なにか敬遠する「空気」が感じられた。

従って、「分かっているも動きがとれず、行きつくところへ行ってしまった」。それが、今回の事故であった。無用の不安を隠してきた「村」の存在が、国の破壊へ繋がり、無用どころか国民に大きな被害を与えてしまった。太平洋戦争へと歩んだ道とどこか似ている。

中国の西安を訪ねる

田原 敬

一九九七年四月、中国西安を歴史の会の仲間と旅をした。前漢、唐などの王朝が都とし、唐代に長安と呼んだ。広々とした城門近くを城壁に沿って西に向かうと、音楽に合わせてソーシャルダンスを踊る太極拳の一団あり、あるいは一人で黙々と運動する老人あり。日本で通常のテンポで暮らす者には、何か別世界に入ったような不思議さを感じる。

通訳の薛東風氏の説明に依ると、四方の門で西門が殊に有名であり、『西遊記』で有名な玄奘三蔵師も、西の城門を後にシルクロード、天竺へと長い旅に出発している。

陝西省歴史博物館に入る。殷、周、秦、漢、唐の時代を中心とした、この陝西地方の豊富な展示品は見応えがある。殷代と周代の青銅器の違いを、時間をかけて見る。この他、新石器時代の仰韻文化やういんぶん化に属する村落遺跡である

半坡遺跡はんぱいしきが目を書く。

小学六年生の子供達が大勢見学に来て、ガラス板に頭をつけ、手帳を手先生に質問している。その熱心さに、この国の明るい将来を見る思いがした。

副館長の方鄂秦氏ほうかくしんは、名刺に国家一级畫家とあり、沢山ある壁画の修復作業を指導していると自己紹介してくれる。たいへん温厚な人柄で、我々の質問に丁寧に答えてくれる。

陵墓の地下深くで長年月一定の湿度に保たれていた壁画を一ミリ厚で漆喰から切り剥がす作業は大変だ。変色やヒビ割れ等が起らないように細心の注意で板に貼る。殊に湿度管理は嚴重だ。材料は合成樹脂を用いるが、一枚そっくり失敗してしまうことがあったそうだ。

外に出ると、二、三十階建ての高層マンションを建設中である。通訳の薛さんに「一つ買いませんか？」と言うと、「我々には縁がないことで、とても手ができませんよ」と笑顔がいい。

私達は阿倍仲麻呂の大きな記念碑の前に立っていた。奈良と西安が友好都市になった記念に建立したとのこと。

その石碑は新しく、阿倍仲麻呂は十九歳で遣唐留学生に。

玄宗皇帝の信任が厚く、秘書役の顯官となり、当時は日本人阿倍仲麻呂でなく朝衡という中国風の呼び名であった。七五三年、四艘の船で日本に向かった。鑑真和尚は日本に着いたが、藤原清河、阿倍仲麻呂の乗った船は、現在のベトナム中部のドンホイ付近に漂着し、七五四年に長安に戻った。結局二人とも中国に骨を埋めた。

記念碑の裏側に、仲麻呂の「望郷詩」があった。

翹首望東天

天の原 ふりさけ見れば

神馳奈良邊

春日なる

三笠山頂上

三笠の山に

想又皎月圓

いでし月かも

碑の西側には仲麻呂と親しかった李白が、仲麻呂遭難に際して詠んだ「哭晁卿衡」が刻まれていた。

長安の街は碁盤の目のように整然として、日本の奈良や京都がこの地に倣ったことは確かだが、スケールだけは真似られず、平城京・平安京とも長安のほぼ四分の一しかない。南北の街路は、幅も百五十mのマンモス・ロードで、驚くばかりだ。

一九七四年の文化大革命の最中、兵馬俑が偶然発見さ

れた。西安から東に三七km、陝西省の中部にある驪山りざんの麓、臨潼県西楊村である。この年は旱魃のため、トウモロコ

りんどうけん

シ畑の中で農民が井戸掘りをしていて偶然に見つかった。

朝から汗ばむほどの暑い日だ。兵馬俑博物館へ向かう。

私達一団は貴賓室に通され、副館長の呉永琪氏ごえいきが説明してくれた。数ある中国の博物館の中でもこの博物館が筆頭だそうだ。

以前、レーガン大統領がここを訪問したとき、陶馬の背中にそつと手を置き、真顔で「蹴られることは無いかね」と聞き、爆笑が起ったそうさ。そして俑坑から上がると、出口の直前で、はたと兵馬俑を振り向いて、「デイスミス（解散）！」と大声で言った。そのサービス精神と周囲を和ませる心のゆとりが、いかにも面目躍如としている。

八千体の兵馬俑。そのために大量の森林伐採をおこなったそうさ。森林資源の自然破壊はいかばかりであつたらう。

名刺と肩書

都 甲 昌 利

定年退職で会社を辞めた時、もう名刺は要らないと思っただけ。しかし、いろいろな会合などで人に会うと相手が名刺をくれるので、こちらにも名乗らざるを得ず、名刺を作るようになった。肩書がなくなつたので、さて、どんな名刺を作ろうかと迷った。年金生活者と書くのは抵抗があつた。その頃、私は新聞、雑誌に投稿をして雑文を書いていたので、著述業など考えたが、この肩書で生計を立てているわけでもないし、結局、氏名と住所・電話・FAX番号だけにした。この世の中には名刺に多くの肩書を入れないと不安になる人が居る。中には表面だけでは足らず裏面にも書き入れている。

作家の渡辺淳一さんが名刺について面白い事を書かれていた。「定年後も、男たちはまず会うと必ず名刺を差し出すので、持っていないと浮浪者のように思われてしまう。男たちは名前だけの名刺を貰ったら、表と裏を何

度も見返して、どういうことをしている人間かと知ろうとする。何かいい方法はないものか」

私が名前と住所だけの名刺を差し出すと、「いま、何をされているのですか？」と必ず尋ねられる。「サラリーマン時代には出来なかつたことをやっています。例えば音楽会に行くとか、夫婦で旅行をするとか……」と答えるが、面倒くさい時には、「遊んでいます」と返事をする。

サラリーマン時代には名刺は不可欠だ。初めて会う人とは名刺を交換する。サラリーマンには肩書が必要なのだ。会社名と肩書で仕事をしている。大企業の社員で取引先企業や下請け会社や子会社の社員と会う時、ペコペコ頭を下げるのは後者の社員だ。肩書きが力を発揮する会社だ。しかし、彼等はその人物に頭を下げているのではない。会社と肩書に対してだ。大企業の社員は、自分は偉いのだと錯覚している。定年で会社を離れば、彼らは見向きもしない。

私の友人で現役時代良い顧客を大勢持ち、売り上げを伸ばし、会社に貢献した男がいた。顧客がついているので大丈夫と思い、定年退職後に退職金で会社を創り商売

を始めた。しかし、彼は事業に失敗した。顧客が段々と離れていったのだ。顧客は彼の居た企業と彼の肩書を信用したのだ。彼の人物にほれ込んだのではない。彼は大きな錯覚をしていたわけである。だから、何時までも組織にしがみ付き、相談役とか顧問という肩書で居残る。サラリーマンの究極の肩書きは「代表取締役社長」だろう。だが、一人しかなれないのである。この肩書きが欲しいため社内で壮絶な戦いが繰り広げられる。

現役時代にこちらが名刺を差し出した時、相手が名刺を差し出さなかった人がいた。指揮者の岩城宏之さんだ。超有名人で名前が人口に膾炙しているので持たないのかと思ったら、「いや、私を知らない人はたくさんいますよ。主義として持たないことにしている」とおっしゃった。

名刺を持つ必要のない人はどんな人だろうか。天皇や皇后、皇太子殿下や雅子妃のような皇族は、名刺をお持ちになっておられないだろう。

新聞やテレビで日本中に知られている政治家であっても、名刺を持っている。選挙目的と思われる。以前は白黒印刷で衆議院議員か参議院議員という肩書と氏名だけ

であったが、最近はカラー刷りで宣伝文句が入れてある。民主党最高顧問の渡部恒三衆議院議員の名刺には、「お陰さまで議員活動50年」「平成の水戸黄門」おまけに印籠まで印刷してある。女性議員とは数人と名刺を交換したが、いずれもカラーで写真入りである。写真は皆、若く美人に撮れている。作家や小説家は殆どが肩書はなく氏名と住所だけだ。私の友人の深田佑介さんの名刺は氏名と住所だけだ。平岩弓枝さん、上坂冬子さんも同様だ。同じく名前と住所だけの私の名刺とは天と地の違いがある。彼らが名刺を差し出しても、「何をなさっておりますのですか？」とは尋ねない。

最近パソコンで自由に名刺を作ることが出来る。この次は「日本国大統領」という肩書で名刺を作るとするか。



心静かな大晦日

福本 多佳子

テレビが除夜の鐘を映し出し、新年になったことを知らせていた。外からは太鼓の音がかすかに聞こえ、初詣に集まる人々の気配が伝わってくる。一通りの年越しの儀式を済ませ、鶏肉とせりを入れた年越し蕎麦を味わう。身体が温まったところで布団に身体をもぐり込ませると、これまでの色々な出来事がスライドのように脳裏に明滅した。

若い時には海外から戻ってきてすぐに新しい仕事に邁進し、思い出にゆつくり浸るような余裕もなかった。アメリカから戻ったこの一年半の間は、苦い思い出を忘れることと、これからどう生きていくかをあれこれ手探りしているうちに時間がたってしまい、これといった結論も出ていない。

暗闇のなかに、海外で出会った友人たちの顔が朧に浮かんできた。

まずはアート仲間の面々だ。ユダヤ系アメリカ人のビジネスマン、トムは、仲間の中心的存在でビジネスにも成功した資産家である。すべてがうまく行っていると信じていた六十代の初めに末息子が自殺してしまった。

「同じ家にいながら、自殺にいたる息子の変化に気づけなかった。息子は私に何も相談しようとしなかった。それがすごいショックだね。ここまでなんとかやってこれたのも、アート・セラピーのお陰なんだ」

アトリエ付きの豪壮な屋敷、広いバルコニーで夕焼けに赤くそまる山の頂を眺めながら、彼は彫刻を習い始めた理由をそう話してくれた。

トムの家での集まりに現れなかったジュリー。彼女は豪邸を二つも持ち、子供たちも順調な人生のスタートを切って、孫の出産も間近だ。順風満帆の生活と言えよう。ドイツ系のイングリッドが、「やれやれ、ジュリーったらまたなのね。今度は彼女の家ではないから私たちも気にしないで済むけど」

以前、ジュリーの家で勉強会を企画した時に、肝心の本人が鬱状態ですっかり白けたのだそうだ。

「皆が彼女のアトリエで制作に励んでいる間、彼女はずつと自室に閉じこもったきりだったわ。何不足ない人生を送っていても、脳の中の或る種のケミカルが足りないだけで躁鬱になってしまうのよ」と、イングリッド。

韓国の男の子を養子として育て上げた北欧系の女性、マーガレットは、その子が大学行きを拒否して家に引きこもっている、と悩んでいた。私は、同じく韓国からの養子である友人が、とても悩んだ時期があつたけれど、テニスに夢中になったことで克服できた、と言っていたのを思い出し、マーガレットに紹介しようとした。その時もイングリッドは、「無駄よ。ケミカルが足りないだけなんだから」の一言で片づけた。

（貴方はドイツ移民の子供である前に白人だから、白人だらけの学校で違和感を覚えずに済んだのよ。これはアイデンティティに関する問題だわ）——口にはしなかったが私はそう思っていた。

後にその息子はアーミーに志願した。アメリカ人としてのアイデンティティを深める道を選んだのだ。

帰国して半年後に、大学時代の友人たちが我が家に来てきたことがある。一人が、両親から相続した家を立て直し、長年の交際相手と同居し始めたと言っていた。「先週、二人で京都に行つて来たのよ。やはり彼の旅行は気が休まるわ」と幸せそうだったのに……、今は鬱状態に陥っているらしい。

全てが快調に進んでいるはずの人々が鬱状態に陥るのは何故だろう。私が落ち込むならわかるけれど……。

先月、美術館で偶然に知り合った主婦とカフェでゆっくり話した。「悩んでいるときに、話すと気が晴れ晴れしてくる人、そういう人つてとても大事な存在」と言つた後で、一言ぼつんと、「結局のところ、私にはこれといった趣味が……、生き甲斐というものが無いんです」

大晦日の静けさに包まれながら、（生き甲斐となるものを私は見つけたとは思ふけれど、今年は仕事を探して社会復帰しようかな？ いや、それよりも人生のパートナーが欲しいな。適度な刺激、喧嘩相手が欲しいのかな……）——吸い込まれるように眠りに落ちて行つた。

姉からの贈物

濱田

優ゆたか

昨年十月半ば、長姉の妙が急に亡くなった。その日の朝、ホームからの知らせを受けて駆けつけたときは、すでに息を引き取った後だった。朝食の後、寝入ったまま逝ったと聞く。享年八十三、老衰死だった。

確かに三年ほど前から主治医にいわれていた、いつ逝ってもおかしくない、と。とはいえ姉は、肺炎など重篤な病気に何度も罹りながら、その度に強い生命力でそれを跳ね返してきた。それで、終の別れはまだ先と、私は独り決めしていた。だから、不意の死をすぐには受けとめられず、その場に呆然と立ち尽くした。

しかし、身寄りのない長姉の面倒をみる人は、次女の志津江姉と私の二人しかない。この先やるべきことが盛りだくさんあり、厄介な問題も残されている。葬儀から一連の法事・法要を無事に済ますまで、私は感傷の気持ちを封じてことに当たろうと決意した。

大わらわで準備に取り掛かり、不行き届きながら葬儀と初七日の法要をどうにか終えた。その後、休む間もなく七七忌と納骨の段取りをしなければいけない。

姉の嫁ぎ先の先祖代々の墓は、九品仏の浄真寺境内の墓地にある。そこには十年前に亡くなったご主人が眠っている。姉の遺骨は同じ所に納めるのが当然であるのに、それがすんなりいかない事情があった。

ご主人の親族である墓守との間に残された懸案の処理が必要だったのである。これまで平行線だった両者の意向を、話し合いを重ねてなんとか期限ギリギリにまとめ、七七忌の法要と納骨式を無事に済ませた。

姉夫妻は人も羨む相思相愛だったから、二人の遺骨が並んで埋葬されたことを見届け、やっと安堵した。

ご主人の傍らで眠りたいという姉の念願を叶えてあげて、これまで世話になる一方だった姉の恩にいささか報いることができた気がする。

私は年の離れた姉たちに可愛がられ、数多くの贈物ももらった。中でもよく憶えているのは、高校の入学祝いの贈物に妙姉からもらったカメラである。

それまで持っていたのはボルト判の、固定焦点、定速シャッターのカメラ。日向で順光ならそれなりによく写るが、中学三年くらいになると物足りなくなる。

レンズが良く距離も露出も調整できる本格的なカメラが欲しくて仕方がない。しかし当時のうちの暮らし向きでは、それを親にせがんでも無理なことは分かっていた。でも諦めきれず、カメラ店をのぞいては、高級機のレンズたちの蠱惑的な青い輝きに見入っていた。

そんな私の念いをいつ知ったのか、志望校に合格したときに、妙姉が当時流行の二眼レフカメラを買ってくれた。私は飛び上がって喜んだのはいうまでもない。

普及品ながら性能が良いと評判だったリコーフレックスⅣ型である。実際に写してみると特に中央部のピントのシャープさは感動的。私は写真部に入り写真を撮っては、自分で焼き付け、引き伸ばしをした。価格は安いとはいえ七、八千円、姉の月給が約二万円だったから、相当無理して買ってくれたのだ。

姉たちの贈物でもう一つ、忘れられないのは文学全集。高校時代に妙姉が買ってくれた筑摩書房版『現代日本文

学全集』と志津江姉が買った新潮社版『現代世界文学全集』が合わせて百数十冊、今も家にある。怠け者の私のこと、それらの文学全集を読破したわけではないが、それでも名作とされる作品に一通り目を通せたのは、この全集のお陰である。

省みると姉たちは、私が情操の豊か人になるように、親を補い支援してくれた。レコードや画集も姉たちからお陰で、勤めを終えた今も退屈することはない。

納骨式が終わったのが三時半。天気予報は午後は下り坂と伝えたが、曇り空から雨が降り出すことはなかった。日が短くなつた十一月の下旬、墓地の植樹の陰にははやくも淡い暮色が忍び込んでいた。

改めて周囲を見回し、この季節に墓参をしたことはなかったと気付いた。彼岸のときは梅、お盆のときは百日紅、秋彼岸にはコスモスが彼岸花が咲いているのに、いまは花の類は見当たらずただ侘しさが漂う。

忌明けの法事を終えるまではと封印していた感情が動きだし、妙姉を亡くした喪失感や悲しみに見舞われる、秋愁の刻はこれからはじまるようだ。

濁点ミステリー

平尾 富男

平仮名に濁音を表記する為の濁点が初めて使われたのは、江戸時代になってからで、その使用が一般化したのは近代以降である。

『古今和歌集』の現存する最古の写本とされているものを見ると、平仮名の和歌が濁点なしに書かれている。その中の巻頭二首目に有名な紀貫之の歌がある。

そてひちて むすひしみつの こほれるを

はるたつけふの かせやとくらむ

当時の人は、「袖（そで） ひちて 結びし水（みず）の 凍れるを 春立つ今日の 風（かぜ）や解くらむ」と、五・七・五・七・七の和歌の文脈の中で間違いなく読めたのである。

「（夏の間）袖が濡れるようにしてすくった水が（冬の間）凍っていたのを、立春の今日吹く風が融かすだろうか」が現代訳である。

和歌が貴族社会で花咲いた平安時代には、濁点が存在しなくとも全く問題はなかった。

一方で、同音異義語が極めて多い日本語は、濁点を使わないことによって意味の曖昧さ、不明確さが増幅することもある。例えば、「なつ」は「夏」なのか、「撫づ（撫でる）」なのか。「なかも」は「長雨」か、「眺め」か。

過去の歌詠みの世界では、むしろその特徴を利用して文学的な深さを究めることが出来た。つまり、ひとつの仮名で清音と濁音を兼ねること、より豊富となった同音異義語を掛詞として駆使し、たった三十一文字で表す歌の内容を、読み手の想像力を喚起させて、精緻で特異な精神文化の香り高い世界に導いたのだ。

みな人の 心づくしに 和歌のうらを

かきぞとどむる もじの関守

この歌（当然ながら、実際には濁点はない）は、『古今和歌集』の歌人、慈円が詠んだもので、和歌の本質を突いている。「和歌というものは、人間の心の中の深奥を詠み、文字に書き表すことを旨とする」という意味だ。同時に「和歌山県の和歌の浦にいる人を、遠く離れた

福岡県（筑紫の国）の門司の関所に派遣された関守が、想いを込めて歌を詠んでいる「情景が浮かんでくる。「心づくし（尽くし）」の濁点がないために掛詞「つくし（筑紫）」が容易に連想できる。

平成の今、千年以上も前に書かれた『源氏物語』が、大ブームである。この世界に誇る日本文学の宝も、日本人の心を写す手段として古代から詠まれてきた和歌なくしては誕生しなかった。その『物語』から、濁点の不在が歌に普遍的な深層心理的意味を付与した事例を挙げる。

光源氏は身ごもっている葵上が心配の余り、六条御息所との逢瀬に心がこもっていない。そこで六条御息所が心の中の葛藤を次の歌に託して、光源氏に贈った。

そてぬるる こひしとかつは しりながら

おりたつたこの みつからそうき

歌の解釈は、「こひし」を「恋し」、「恋じ（恋しく思わない）」、「恋路」、「小泥（こひぢ）」と読むかによって変る。また、「みつ」は「見ず（づ）」、「見つ」、「水」、「うき」は「憂き」、あるいは「浮き」と読める。いや、これら全てを歌に込めて詠んだということも考えられるのだ。

必ずしも詩的趣はないが、「恋の路は涙で袖が濡れてしまふ泥の路なのだと知っていながら、その泥の田の中に足を踏み入れる（農夫の）田子のように自ら入って行き、恋しい想いと恋しくはないという感情とのせめぎあいに苦しみ、恋路を見ず、或いは見つ、この水に浮いていることは、憂き（惨めで情けない）ことなのだ」と、現代語に訳せる（まさに、人の心は不変だと感じ入る）。ちなみに、この和歌は古来から、源氏物語の中でも最も秀逸な歌のひとつであるとの評価があるのだそうだ。『古今集』の一世紀後に出された『拾遺集』にある次の句にも、存在しない濁点のミステリー世界を探求する醍醐味が隠されている。

人知れず 落つる涙は 津の国の

なかすと見えて 袖ぞ朽ちぬる

この中の「なかす」から、「流す」、「泣かず（泣かない）」、そして「長洲（の浜）」が想起され、「見えて」からは、「見えて」とその否定を表す「見えて（見えぬ）」の相反する言葉が踊り出す。

さて、読者諸氏はいかに翻訳料理するだろうか。

「三途の川」を渡らずの記

矢澤 正二

「三途の川」を渡らずの記は、以前ペン随想に書いたところですが、その状況をもっと詳しく教えろとの声がありました。そこで、改めてその時の体験を書き留めます。

私は、二〇一〇年一月三十日に脳卒中で倒れました。

二日前から箱根にりましたが、何が起きたのか分かりませんでした。その夜、酒を少々飲みすぎて寝ていたところ、いきなり図体の大きな男が二人来て無理やり私を救急車に乗せたのでした。そうこうしているうちに頭の中が朦朧としてきました。

そして気がついたら、川のほとりに来ていました。これが世に言う「三途の川」（やっぱりあったのだ「三途の川」が）にきたようでした。

そこで、薄明りのする川の向こう岸に懐かしい父母と出会ったのです。母は「こっちへいらっしやい。また一

緒に暮らしましょう」と耳に心地よい、すべてを許す優しい声で言いました。そして私は、以前に父が「来世に行っても、この家族でいたい」と言っていたのを思い出しました。ふとまた、父母のもとで暮らすのもいいかなと思いました。しかし、父は「いいのか、それで」と言っただけです。

それで私は、はっと気がつきました。私にはまだやり残したことがある。娘は結婚したがまだ子供は出来ない、どうするつもりだろう。息子には彼女がいるらしいがまだ会ってもいないし、どんな女性だろう。これはまだ死ねないぞと。そこで、父母に言いました。「もう少し待ってくれ、まだ見極めたいことがある」

そこで、家族の実情を説明して、まだ行けないと言うと父母も納得しました。こうして、「三途の川」を目の前にして後にしました。

ゆつくりと目を開けたところ、妻と娘、息子が心配そうに私の顔を覗き込んでいたのです。

そこは、小田原市立病院でした。医師の迅速かつ的確

な処置のお陰で一命を取りとめました。

目覚めた私は一生懸命話のですが、なぜか相手には伝わらない。私の言葉は、聞いている人にとってはまったく意味不明でした。いわゆる失語症の症状です。それを理解して通訳してくれたのは娘でした。どういうわけか娘だけは理解でき、周囲にそれを伝えてくれたのです。やはり「血は水よりも濃い」というのは本当だなあと思った次第です。

ただし、周囲の言葉は一〇〇%理解できません。間違っても病人のそばで、「ああこれは駄目だ」「幕は決まっているの」などの話はしないことが肝要です。これは、病人は水面下において、水面上の会話がすべて聞こえるというような具合なのです。

頭の中をCTの画像で見ると、直径二cm位の穴が空いているのです。その穴から重要なことや肝心なことが抜け出ているのでは、とこれは妻が常々私に言っているところでもあります。そして、その穴は生涯埋まらないということです。ただ、その穴の周辺の細胞が徐々に機能をカバーするように働くそうです。

それからがりハビリの毎日です。これは一日でも早いほうがいい、できれば発症の翌日からでもやったほうがいいのです。できるだけ早くベッドから離れ、身体を動かすことが肝要です。夜の睡眠以外はすべてリハビリ、次から次へと宿題を出され、私のベッドはいつも空っぽでした。

リハビリは嘘を言いません。やればやっただけの効果が見れます。それと、「こんなところで死んでたまるか」という強い気持ちです。

そして、二月二十五日に小田原の病院を退院し、都内のリハビリセンターに転院しました。医師からは奇跡的な回復だと言われました。

とにもかくにも、家族の看病と、親類や友人たちの励ましのお陰で健康を取り戻しました。皆に感謝の気持ちで一杯です。

父母も天国で温かく見守ってくれているでしょう。

重ねて言いますが、これは本当の話であります。

小次郎の思出

保坂 令子

このたび中村晃也さまのご紹介で企業OBベンクラブに入会させていただきました。「悠遊」第十九号に投稿させて頂くに際して何を書くべきかを考えました。

娘の結婚を機に可愛い子犬との出会いと訣別があり、東京で生まれ育った私が、横浜に転居することになった経緯について書くことにしました。

私は主人亡き後二人の娘を育て上げましたが、長女が大学卒業後一年で結婚した折に、心の寂しさをともに支えてくれた次女が、自分が大学二年で婚約し卒業を待つ結婚することになり、母親が一人になることを心配して、アルバイトで貯めたお金で、自分の身代わりにとヨークシャテリアをプレゼントしてくれました。

手のひらに乗るほどの小さな犬に「小次郎」という名をつけ、まるで赤ちゃんのように大事に育て、その半年後に次女は嫁ぎ、小次郎と私の生活がはじまりました。

男の子がいない私は、息子が出来たようにことごとく自慢し、周囲から笑われるほどでした。孫達からは、小次郎のママだから「こじママ」と呼ばれるほどで、そんな楽しい生活が十三年続きました。そのうちに小次郎は白内障で目が良く見えなくなり、少しずつ身体も弱ってきて、何度も獣医さんに連れて行きました。

平成十一年十二月十九日の深夜、小次郎は一緒に寝ていたベッドで苦しみ出し、病院に連れて行く間もなく私の腕の中で旅立ちました。私は悲しみの余り、食事も喉を通らず、救急車を呼んだことも二回あって、娘達から一緒に住むか、または近くに住むようにと要請されました。私自身も心細く、一人で生きる自信を失ってしまったので、横浜の娘の家の近くに転居したわけです。

俳句だけを生き甲斐にしていた私は、横浜の俳句会に飛び込みました。そこでお会いした猪股重子さんとの一期の縁があり、今ではお互いに体調が悪いとき、心が壊れそうな折に支えあいながら、ペン俳句会に参加できる幸せを大切に、二人三脚でゆっくり歩いてまいりたいと思っております。

企業OBペンクラブの皆様、よろしくご指導くださいませ。

俳句十篇「愛しき犬との訣れ」

冴ゆる夜に純なひとみを閉じし犬
寒夜逝く犬へ浄めの涙雨
まだ温き犬を抱きぬ冬の真夜
骨壺の小さき重みや十二月
極月に失いしところ埋められず
きのうより今日の寂しさ年暮るる
冬三日月ふつと寄り来る犬の影
訣れきて刻の重さや月冴える
犬の名を呼べど戻らぬ枯れの中
面影を追いて雪降る道をゆく

令子



新巻鮭

廣澤 重穂

久しぶりに、友から芋煮会の誘いの電話があった。芋煮会といっても、それを理由に昔からの友が集まって鍋をやる、という話だ。バーベキューよろしく庭に火床ひどを設け、陽の高いうちから煮たり焼いたり、そして吞んだり騒いだり。少し郊外の彼の家は周囲に家はなく、寒い中、火を囲んでの騒ぎ放題だ。

集まるのは十数人。昔からの友人や仕事仲間、飲み友達など様々な顔が揃う。だが共通しているのは、いまだ「青春と真ん中」。青春ドラマの酒井和歌子や村野武範、中村雅俊らがそのまま歳を重ねたような……、連中ばかりだ。

そんな友からの誘いであった。

となれば、手土産を持参せねばならぬ。だが、普通のものだと面白味に欠ける。意外性がありながらも面白く、かといって奇を衒い過ぎてもいけない。そんな手土産を

探さねばならぬ。

そんな中、たまたま迷い込んだ魚市場。そこで新巻鮭を見つけた。

『いい、実がいい』

何しろ新巻鮭という名前の響きがいい。「アラマキ」とア行音が続く心地よさ、「シヤケ」と鋭く締めくくるキレのよさ。何とも言えない。そのうえ漢字三文字だ。それに、あの「御歳暮」の文字だって漢字三文字。いかにも日本の伝統ではないか。ビール？ ワイン？ 生ハム？ カタカナじゃ折角の手土産だって有難味も薄からう。それに何より、昔から新巻鮭こそ御歳暮の定番だ。などと考えると、さらに想像が膨らんだ。

天井からぶら下げられた腹部の片身が削がれた塩鮭。そう、あの高橋由一の油絵『鮭』だ。明治の初めに西洋の油彩が日本に持ち込まれ、黒田清輝などに影響を与えたという写実主義の原点だ。

これほどまでに評価される新巻鮭だ、皆が感動しないわけがない。

ますます空想が膨らむ。

新巻鮭を肩からぶら提げ、彼らが集まる庭に顔を出す。すると、やんや、やんやの拍手。そして得意げな自分。昔のお嬢さんが駆付け三杯と酒を注いでくれる。最高じゃないか。

目に浮かぶようだ。

「よしつ、これ下さい」

「宅配にしますか？ 宅配なら、配送費を頂戴することになります」

勿論持つていく、何しろ手土産なんだから。くれぐれも配送費が惜しいわけではない。

「いまから知人宅にお伺いするので、持参します」

「少々お待ちください。いま箱詰めして梱包しますから。電車じゃ匂いますしね」

そうか、荒縄のままぶら提げて行くわけにもいかないようだ。結局、一メートル足らずの箱が用意され、持ち手まで付けられて綺麗に梱包された。

彼の家に到着。「久しぶり」とか「ご無沙汰」といった言葉を掛けられる。そのうち、家の主が、

「おい、そのバイオリンケースみたいなのは何だ？」

きたきた、よくぞ聞いてくれた。待つてろ、待つてろ、いま開けるから。

「ジャン、新巻鮭の登場。どうだ、豪勢だろう？ 台所にも吊るしておいて、酒の肴にでもしてくれ」

「おいおい、冗談だろ？ 台所に吊るしたら匂いがたまらん。それに、どうやって食うんだ？」

そんな言い草はなかるう。それとも新巻鮭の価値が分らないのか？

「ネットで新巻鮭と検索すれば？」

誰かから声が掛る。何がネットだ。そんなもの、昔は無かったはずだ。

それがきっかけとなり、オレの手土産を肴に扱き下ろす、扱き下ろす。それにしても分っちゃないなあ。尾崎士郎なら『庭相撲の懸賞だ』、白洲正子なら『あら粹ね』と……、言ったはず。

なお検索によれば、新巻鮭を貰ったらすぐに適当な大きさに切り、パックして冷凍庫に保存するそう。

それにしても皆さん、新巻鮭を貰ったら面白味を感じていただけますか？

掌編小説勉強会

この一月で「掌編小説勉強会」は、発足してから五年経ち、開かれた合評会は三十回を数えました。

メンバーは女性二名を含む十名、年齢層は五十代から九十代にわたり、キャリアもさまざまです。そのうえ個人的な各人が自由にテーマを選んで書くので作品の内容は十人十色。合評会の度に、こんどはどんな作品が集まるか、とまるで玉手箱を開けるように楽しみです。

この勉強会の合評会には、書き手に加えて講評専門の常連が出席して、それぞれの視点から活発な評議を行います。

掌編小説は、原稿用紙三十枚以下で短編より短く、小説を書き始めるには適當の長さといわれます。隔月一編原稿を書き上げて合評会に掛け、その評議結果を織り込んで作品を仕上げます。

この勉強会の成果として、これまでに二百編を超える作品を書き上げました。

書き溜めた作品の中から厳選した作品集を編んで多くの方に読んでもらいたいと考え、私たちはその実現に努めています。

昨年は、その先駆けとして電子書籍の試作に取り組み、三人三篇の作品を収めた電子ブックの小冊子を作成してネット上に公開しました。今、電子出版は次の段階に備えて関連技術や業界の動向を注目しています。

今年は、厳しい状況を工夫して乗り越え、通常の本による本格的な作品集を出版しようと、その企画化を意欲的に進めています。

私たちの作品集が発刊された暁には、ぜひご購入下さいますようお願いいたします。

(濱田、西川、廣澤)



創作短編



悲恋哀歌

馬場 真寿美

——コトリ——

そのかすかな物音が、温んだベッドの中で、眠りに落ちようとしていた百合の意識を、一瞬のうちに覚醒させた。

——史郎？ 帰ってきた！

物音がした玄関先に向かい、全身の神経を敬てる。

「今日は遅くなると思うから、先に寝ておいで」

史郎はそう言つて、今朝、仕事に出かけたのだが、実際には、百合はその帰りをずいぶん遅くまで、寝ないで待っていたのだ。

しばらくすると、足音を忍ばせ、史郎の冷え切った身体が、布団の中に滑り込んできた。先に寝ているようにと言われていたものの、百合は我慢できずに「お帰りなさい」と、甘く鼻にかかった声で囁きながら、史郎に身を寄せると、胸一杯にその懐かしい体臭を嗅いだ。シャワーも浴びずにベッドに潜り込んだ史郎の身体は、かす

かに汗臭かった。けれど、そんな匂いさえ、今の百合にはたまらなく好ましいものに思える。

「ごめんよ。起こしちゃったね」

そう言つて抱き寄せられると、恋しさと切なさの綯い交ぜになった思いが、一気に溢れ出て、百合は思わず史郎にしがみついた。

「どうしたの？ 一人で家にいて、淋しかったのかい？」

そう史郎に優しく髪を撫でられると、百合も自分から夢中になってキスをせがんだ。舌を絡ませ、耳たぶを囓むと、史郎がわずかに身を引くのが分かった。

——どうして？

突き放されたような気がして、百合は遂方に暮れた。

「明日も仕事で早いんだ。君も、もうお休み」

そう言つと、百合の傍らで、早くも史郎は軽い寝息をたて始めた。

史郎に出逢い、二人で一緒に暮らすようになって、半年という時間が経っていた。その間、ずっと同じベッドで、抱き合つて眠るのが習慣になっている。けれども、

いまだに二人の間には、肉体上の結びつきはなく、しごく清らかなままなのだった。今まで、これといった男性経験もなく、無垢な百合にも、この状態はさすがに不可解で、焦れるようなまどろっこしい思いに苛まれた。それでも百合は、史郎が自分を心から愛し、いとおしく思ってくれていると信じていた。夜毎、闇の中で繰り広げられる濃密な愛撫の合い間にも、史郎はいつも、

「君にめぐり逢えていなかったら、今頃ぼくは生きていられなかったよ」

と、百合の胸に顔を埋めながら、何度も囁くのだ。

——大丈夫。彼は私を愛してくれている

百合は目を瞑り、両手を胸の前で組むと、自らに言い聞かせるように呟いた。

「百合、今日、何か予定はある？」

ある日曜日の朝、史郎が百合に唐突に訊ねてきた。

「うん。別にないけど。でも、なぜ？」

すると、史郎は心持ち顔を赤らめながら、こう答えた。

「うん。もし良ければ、今日、僕の実家に行つて、両

親に会つて欲しいんだ」

百合は、とつさに何と答えてよいものやら返事に窮した。

——史郎さんのご両親に会いに行く？

それって、もしかしてプロポーズなのだろうか？ 百合の胸は轟いた。『史郎さんのお嫁さんになりたい』それが百合の秘かな願いだったから……。

都内にある史郎の実家まで車で出かけ、二人が到着したのは昼過ぎである。史郎の実家は、百合が想像していた以上に大きな家だった。門には『犬飼』と彫られた立派な表札がかかっている。玄関まで出迎えてくれた婦人は、史郎の母親なのだろう。優しそうな面差しが史郎とよく似ていた。

「あなたに、結婚を考えるような女性がいたなんてねえ」

窓の外一面に広がる、青い芝生の庭を眺めていた百合の耳に、そんな二人の話し声が聞こえてきた。

「そう。じゃあ、本当に結婚するのね？ で、お式はいつ？」

「うん、できるだけ早く。だけど、式はあげないつも

りなんだ。妊娠している身体じゃ無理だと思うから」

——妊娠？

突然耳に飛び込んできた単語に、百合は混乱していた。結婚を反対されないために、史郎は両親に、私が妊娠しているとでも話しているのだろうか？

「それで、母さんに相談があつて来たんだ。結婚して子どもが生まれるまで、しばらく百合をこの家で預かってもらえないかな？　ここなら庭も広いだろ？　落ち着いたら必ず迎えに来るから」

——何の話？　あなたたちは、いったい何を相談しているの？

「しょうがないわねえ。わかつたわ。お父さん、最近ちよつと運動不足だから、散歩相手にちよつどいいかもね」

そんなやり取りが聞こえたあと、ふいに百合の首に力が込められた。

「さ、リリー（百合）、聞き分けておくれ。ぼくだって、少しの間でもおまえと離れるのはとても辛いんだから。でも、ほんの少しの辛抱だよ。ぼくのお嫁さんになる女

性はとっても犬好きだから、子どもさえ生まれたら、また一緒に暮らせるようになるからね。おまえと出逢ったとき、彼女とちよつとした誤解で別れることになって、でも、妊娠していることがわかつて、戻つてきてくれたんだ。あのとき、おまえがいてくれなかったら、失恋の痛みで、今頃ぼくは生きていなかったかもしれないよ」
もはや、史郎の声も、百合（リリー）の耳には届かなかった。

「さあ、今日からここがあなたのおうちよ。どう？

庭も広いから快適だと思うけど。でも、ごめんなさいね。放し飼いにはできないから……」

「カチャリ」という音がして、親切なご婦人は百合の首に、この上なく不愉快なリードを装着した。

「うそよ、うそよ、こんなこと！　私は史郎さんのお嫁さんになるんだから」

百合は、あらん限りの声を張り上げて泣き叫んだ。

けれども、百合の悲鳴は、『キャイン、キャイン』という、身を切られるような切ない犬の遠吠えとして、辺りに響き渡るだけだった。

テンゴ

三 春

すべてはモスクワのソコロニキ公園での日本産業見本市から始まった。天吾は音楽大学の二年生。見本市のアルバイト通訳として母の祖国ロシアを初めて訪れ、心が躍っていた。初日の晩餐会で、ソ連外務省に勤務しているというV氏から、何か困っていることはないかと尋ねられた。このアルバイトのために二期のピアノの試験準備ができないと答えると、ピアノのある家に連れて行ってくれるという。

翌日、カーテンで窓を覆った車に乗せられて着いた先は市内の高級アパート。部屋にはグランドピアノが据えられ、練習が済むと豪華な夕食が用意されていた。昨日会ったばかりの相手がなぜこんな親切をと戸惑いつつも、見たこともない美食に舌鼓を打ち、日本での生活や家族のことをべらべらと喋った。こうして、送迎つきピアノ練習と豪勢なディナーの日々が繰り返された。

見本市も終盤に近づいた頃、Vに誘われたパーティーには目付きの鋭い七人の先客が待ち受けていた。なんとなくいやな予感がしたその時、「君のような友人が日本にいることは実に嬉しい。友情のために乾杯！」と、Vがグラスを高々とあげた。酔うほどに警戒心は薄れ、世界はバラ色と化し、周りの人々がすべて善人に見えてくる。ウオッカを手にした男が「大学を卒業したら二年ほどイタリアに留学したくないかね？ 渡航費や学費なら心配ないよ」と、耳を疑うような提案。酒で惚けた頭には、ローマやミラノで暮らす自分の姿が浮かんでくる。

「商売でこんな提案をするわけじゃない。友情を示してくれるだけでいいんだ」と紙とペンを差し出され、言われるままに「ソ連邦の友人として生涯ふるまうことを誓います」と書いてサインしてしまった。手紙を出すときのためにと、何枚もの封筒に日本の自宅の住所を書かれ、明日は午後四時にソヴェツカヤホテル（当時は共産党幹部専用のホテル）を訪ねるようにと言われて、急に不安が押し寄せてきた。

翌日、今度こそきっぱり断るつもりで指定のホテルに

出向くと、白髪の紳士が握手を求め、「おめでとう！

今日から貴方は我が国の防諜機関の一員です」と言つて、ポケットから一枚の写真を取り出した。「これを見た時から、君こそ日ソ両国の平和と親善に欠かせない人材だと感じていました」。なんとそれは、デモでスクラムを組む天吾の写真！ 粹がつてたった一度だけ参加した六十年安保デモだ。どうしてこんなものがここに？ その時からもう狙われていたのか？ その恐怖と驚き。途端に心臓バクバク、口はバクバク、めでたくなんかあるもんか！

——日本に帰ってからあの封筒に入った音楽会の招待券が届いたら、開演三十分前に会場に着きなさい。外国人に「ここは映画館ですか」と英語で尋ねられたら「いいえ、コンサートホールです」とロシア語で答えなさい、それが合言葉だ——

お喋りで少々気弱なお人よしの天吾は、どう鼻屑目に見てもスパイには向かない。スカウトした組織はソ連軍参謀本部情報総局、略称ГРВ (ゲーエルウー、GRU) だ。天吾はこの事態を一人では抱えきれず、同宿の日本

人に相談した。ホテルに隠しマイクが仕掛けられていることは公然の秘密。蛇口を全開して水音でごまかしながら、友人は便座の蓋に、天吾はバスタブの縁に腰掛けてのヒソヒソ話、もちろん良い知恵など浮かぶ筈もない。

日本に帰って三か月後、怖れていた封筒が届いた。中には雪村いづみの公演チケットが一枚。気丈な母は、息子の打ち明け話を聞くと即座にこれをゴミ箱へ。その後の何通かもすべてポイ！ 毎日をビクビク暮らす天吾だが、情報局の連中が接触してくる気配もなく三年が過ぎ、半ば安堵した頃に再び訪ソ、久々のモスクワだ。

だが、敵もそう簡単に諦めたわけではなかった。何気なく振り向くと、物陰からこちらを窺う男の姿、あのVだ！ 脇をすり抜けながら「五時に公園で」と囁くVに、慌ててノーと答え、逃げるように次の目的地レニングラードへ飛んだ。日本代表団を連れて工場見学やエルミタージュ美術館で過ごしたある日、ホテルに戻ると水音が聞こえる。浴室の扉が少し開いているようだ。

ちなみに、このアストリアホテルは、イサドラ・ダン

カンの夫で詩人のセルゲイ・エセーニンが謎の首吊り自殺をはかり、また、ソ連に侵攻したヒトラーが勝利のクリスマスの祝宴を開くつもりだった所でもある。

天吾の部屋の浴室は隣の客と共同で、使う時には相手側の扉をロックするはずなのに、鍵どころか僅かに開いている。そのまた翌日も、「いらっしやい」と言いたげな隙間に目をつぶる（実は釘付け）。そろそろ寝ようという時に電話が鳴った。相手は浴室の向こうの女性客、珍しいワインがあるから一緒にとの誘いにシブシブ（イソイソ）着替えて浴室を抜けると、眠気を吹っ飛ばすような美女が待っていた。思いがけない幸運にぼうつとしながら盃を重ねつつ話を聞けば、画家である六十過ぎの夫の嫉妬深さに嫌気がさして気晴らしに来たのだという。

「ああ、ワインで身体が火照ってきたわ、ちよつと目を閉じててね」と、薄物のガウンに着替えた。「ねえ、もっと近くに寄って。私のこと気にいらないの？」と甘い声、そしてとうとう……。

なんだか廊下が騒がしい。足音が部屋の前で止まった

途端にドカドカと三十歳前後の男が乱入、美女の頬に平手打ちを一発！ 六十過ぎの画家のはずがなんとプロ・ボクサーだった。「妻の浮気にはウンザリしてたのさ、やつと現場を押さえたぞ、君のおかげで有利に離婚できる」。怯える天吾は、支配人立会のもとでいくつもの書類に署名させられた。本物の浮気騒動かそれとも例の組織の回し者か、いずれにしても脅しとしては効果満点だ。書類はその筋に回され、あと二週間有効だった滞在ビザが突然打ち切られた。

あれから五十年か……。天吾は老眼鏡をはずしてじつと目を閉じ、遠い昔に思いを馳せていた。

さてそろそろシエレメチエボ空港に着陸だ。あいつと一杯やるのも久しぶりだな。お互い引退したというのに、会えばいつも小言ばかりだ。

「女の尻ばかり追いかけて、お前は組織のお荷物だ！」でも、そのお荷物を引き入れたのは、V、君じゃないか。僕は「・5」（テンゴ）、007・5だ、お荷物で当たり前さ。

歩き出したペン・フォト句会

一昨年の八月に誕生したペンフォト句会は、本年一月に十五回目の勉強会を迎えました。約十名の常連メンバーが毎月二点の作品を持ち寄って勉強会に参加しています。

毎月の成績が当クラブのホームページに載るようになって、外部からのアクセスが可能になり、「面白く見えています」とのコメントを多数頂いています。当サイトへのアクセスが多い所以です。

今号から、ペンフォト句会での作品の一部が本誌に掲載されることになりました。カラー写真の効果が良いようにと、表紙と裏表紙の二部に分けて掲載されています。

作品集（自然編）では美しい風景写真に洒落た句が、（生活編）では、巷の風景を切り取った写真にウィットのある句が付いています。これら全てが、十五カ月前は全くの素人だった会員の作品です。

句を付けることにより、写真の作品価値に一層深み加わるので、写真に自信のある皆さんの、勉強会への参加をお勧めしたいと思います。皆さんは句をつける才能がないのではなく、下地ができてないだけなのです。

勉強会に毎月参加するだけで、確実に実力は向上します。昨年、NHKの番組「カシヤット一句フォト五七五」の審査委員長である板見浩史さんをお招きして講演を聴きましたが、今後も外部から講師を招聘するなどして、レベルアップを加速したいと思っています。

自己満足に終わらないように、第三者的な評価手段として、例えばNHKの番組で、作品が全国放送される、または佳作として入選する、そんなレベルの会員を増やすことを、当面の目標にしたいと思っています。

（プロマネ 中村 晃也）

悠遊の記



七十の手習い…ペン画

松浦 武弘

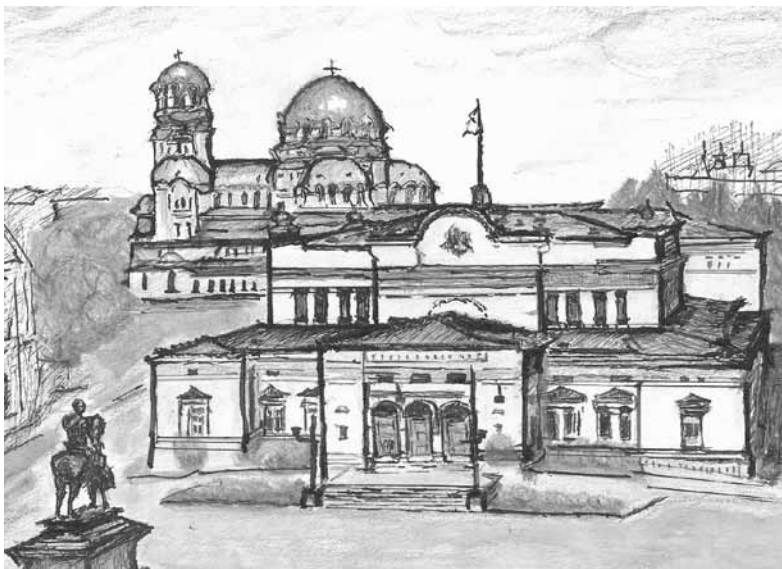
私は、瀬戸内海の大崎上島に生を受け、中学三年生の一学期末まで郷里で過ごした。東野小学校三年生から、絵画指導をしていた校長から徹底的にデッサンを仕込まれた。四年生からは校長に引率され、写生大会に参加し、広島、呉、三原等に出向いた。

小学校時代はクレパス、不透明水彩、透明水彩などで、絵を描いていたが、中学に入って油絵を始めた。

絵を描くことを忘れてしまっていたが、一昨年長男に孫娘「朱里」が誕生し、絵心を取り戻した。

ペン画を主体に描いているが、我が国では参考書が意外に少ないことが分かった。

ペン画の白と黒で表現することの困難さを感じるとともに、ペン画の堅さを和らげるためにも、水墨画の柔らかさにも惹かれている昨今である。



ソフィア中心部

頭と眼の療養願

中 川 路 明

最近のクラブ員は、会費だけを納めていれば、事務局・運営委員に一任が多い。会長が出版に意欲を示し、委員を募っても積極的の手が挙がらない。かつて九十年代、例会は、午前全体事項、午後出版委員会、あとの各週テーマ毎に出版分科会で月一、二冊刊行と、当時の会員には勢いがあつた状況を、今号で皆さんに紹介したかった。

一方、先輩石川さんの追悼記を書くため過去の悠遊全冊を読むも、重複多く整理難しく、更に眼と膝関節の故障が悪化して体力低下。先ず追悼記を仕上げ、出版会の紹介は待つて頂き「悠遊の記」に、療養願を書きました。

しかし、掌編小説・何でも書こう会・8000字文学館・俳句・川柳など九十年代より好材料が揃っている。ただ、文章を読んで貰うには、読み手の心に響かないと

駄目は石川さんの教え。私も「である」の断定は勿論、単なる動詞、形容詞では、文章の背景を読み手が描けず響かないとよく申し上げた。この習得の秘訣には、私の経験でも、苦勞して成功した好きな先輩プロ作家に従つて、一年以上添削して貰えば文章は一変しました。

安定から変化の時代へ会員文章の上達は凄い。東北に習い、自ら起ち皆の力を集め、第二の黄金時代に挑戦して下さい。私も療養に努め、またお目にかかります。



インドでの困惑

伊藤 文明

インドへ旅した時のことである。デリー市内観光の後、聖なる河ガンジスのほとりにある聖地ベナレスへ向かった。旅の目玉は沐浴風景観光で、大いに期待した。

我々十二名は、夜明け前の暗い道をガンジス川へと向かった。小さな家々が両側に犇めく狭い道を、大きな角を持った大きな牛がゆつくりと歩いている。人はその脇を、体を斜めにしてすり抜けて行かねばならない。怖い。ぬかるむ道を十五分くらい歩いただろうか。ようやくガンジスの川縁に着いた。少し明るくなってきた。最初に目に飛び込んできたのは、火葬をしている家族だ。ガイドの話だと、ヒンドゥ教徒の聖なる河ガンガー。死者をこの河に葬ることが死者への最高の敬意とされており、人々は、薪を買い、川縁で火葬にするという。貧しい人々は、一束の薪を買うのが限界。きれいに仕上げられても、そうでなくても一束で火葬は終わり。遺骨は念

願の聖なる河ガンガーに流され、水葬される。流れてゆく遺骨や灰の川下では、人々が沐浴しているはずである。

我々は、手配されたボートに乗り込んだ。舳先の漕ぎ手は、まだあどけない少年二人だ。五分ほど川を下った。

沐浴する人々が見えてきた。「ガート」と言われる沐浴場所で、足だけ、あるいは下半身だけ水につけている人、全身を川に沈めている人、さまざまである。ボートはさらに沐浴する人々に近づいた。十メートルを切った。沐浴する一人がチラとこちらを見た。

その視線に合った時、私は強い困惑を覚えた。念願のガンガーにたどり着き、念願の沐浴をする人々を、あたかも野生動物観察のように見下ろしている自分がいた。恥ずかしかった。情けなかった。

船頭たちは、観光客へのサービスと、さらに近づこうとする。私は「止めてくれ、もっと離れてくれ」と叫んだ。が、声にはならなかった。

帰国後、写真を整理してみると、ガンジス川の沐浴関連の十数枚は、全て手ブレ、ピンボケで使いものにならなかった。

傘寿のこの頃——クオ・バディス——

児玉 忠雄

人生は結局、生病老死で青春、朱夏、白秋、玄冬と迫る。少なからずの友人、知己が八十を前に病・死を迎えた。私も程なく傘寿。来し方を顧み行く末を思う。十八世紀の禅僧仙崖の「老人六歌仙」を思い出す。

「……手は振ふあしはよろつく、齒は抜ける耳はきこへす目は疎くなる……聞きたかる淋しかる心か曲る慾深ふなる、くとなる愚痴になる……」身につまされる。

黄昏の余熱を駆りエンディング・ノート、自分史などに手をつけた。ところがご多分に洩れず容易ではない。我笛吹けど汝等踊らずである。

家の外では、学校・会社の同期会、町内会、画、歴史サークルなど付き合いが多い。いろいろな話が出る。やはり、世相に腹が立つ話が多い。中でも政治。「歌手一年総理二年の使い捨て」。自民・民主の頻繁な総理・大臣の交替と差し替え、我慾本位の政局の転変で、内政・外交が

迷走後退を続け苛立たしい。思い切った財政再建・成長経済への路線転換が急務なのに、経常赤字が五年も続けば国債の暴落、ギリシャ化の悪夢が現実のものとなる。

近く予想される総選挙では、ここ二、三十年続いた自民・民主政権の混乱・虚妄を反省し、無能劣悪な候補達を肅正排除しないといけない。民主・自民の自浄努力はどこまであるか。みんなの党、維新の会、石原新党などによる政界再編の動向も注視したい。国民の生活面では東日本大震災、原発事故という未曾有の国難が勃発し、東北の人々は、不幸極まりない境遇に置かれた。それらについて政府東電の対処は極めてお粗末であった。また最近M8程度の東京直下地震では、関東大震災を上回る被害が予見され、背筋が寒くなる。身近の防災対策を急がねばならない。

国家としての中長期の対策は、人材、エリートの養成である。戦後教育は大方失敗であったと反省し、まず家庭教育、そして学校を国際競争力あるものにし、企業も人事政策の修正が必要である。なんといっても、新しい価値と文化を生み出すのは若い世代である。

みみしい

西田 昭良

「まぶた」(瞼)という漢字があるのですから、「みぶた」という漢字があってもいいと思うのです。

物を見たい(観たい)時は瞼を開き、見たくない時には瞑る。と同じように、聞きたい(聴きたい)時は開け、聞きたくない時には閉じる「みぶた」という漢字が欲しいのです、白川静さん。本場の中国の学者ですら成し得なかった、漢字起源の世界第一人者ですから、あなたは。漢字は無理でも、機能だけでも欲しいのですが、進化の神様はそこまで気が廻らなかつたのでしょうか。だから神様は「みみしい」を与えてくれました。

かなしみを容るる器の小さければ

神はわが母にみみしひ賜う

(大江昭太郎)

「みみしひ(い)」とは「耳がきこえないこと、また、その人」(広辞苑)。なんと快い響きでしょう。

老いたとはいえ、まだ体だけは小さくなっていない私にも、聞(聴)きたくもない世俗の雑音は幾らでもあります。それが嫌なのです。右から左へ、とよくいわれるのですが、器量の小さい私にはそれができないのです。

耳を自由に塞ぐ機能さえあれば漢字も出来ていたのでしょうか、残念です。

神が今、目か耳かどちらかを差し出せ、とおっしゃれば、私は喜んで耳を差し出すでしょう。



ただいま療養中

黒崎 昭二

平尾富男さま

寒さの折、ご健勝の御事とお慶び申し上げます。
いつも大変お世話様になり、厚く御礼申し上げます。
今年もよろしくお願い申し上げます。

一月の特別公演および新年会の件でございますが、黒崎が体調を崩しまして、欠席させて頂きたくご連絡申し上げます。心臓の発作を起こし、大事をとり入院いたしました。快方に向かっておりますので、二月には皆様にお目にかかるのを楽しみにしております。

皆様にどうぞよろしくお伝えくださいませ。

黒崎（内）

全く残念無念なことに、この正月は病院で三週間もすごすことになり、情けないことでした。二度目の心筋梗塞でしたから、対応を誤れば鬼籍入りしていたかも。悪運強く現世に踏み留まりました。但し、体力・気力ともガタ落ちで、目下はおとなしく家にもつている状態です。

「悠遊」に投稿するつもりで腹案も用意していたのですが、断念しました。食事も、塩分の少ないものばかりでは食欲が半減です。このまま萎えてしまっただけいかに、いざれ復活して皆さんの中に厚かましく出ていきます。勿論、夏以降を目標に、以前からやっていたテニスもゴルフも再開します。

小・中・高・大と、同級生はみな傘寿を過ぎて弱っている仲間が多いことも事実です。世の中すべてに優先するのが健康ということ、しみじみ噛みしめている昨今です。

平尾さんにはキャンソで制作した私のハミリをいつの日かお見せしたいものです。

ペンの皆様によろしく。

平成二十四年三月三十日

黒崎 昭二 敬具

書きたいもの

高橋 孝藏

平成十一年の第六号からずっと書き続けてきたが、この第十九号では一回お休みにさせてもらうことにした。特に理由はない。敢えて言えば、「近代スポーツの父 ストレンジ先生」の調査と研究にエネルギーを使い、これから一休みしたいのが本音。

書くのを止めるつもりはないので、三月を目標にまた書き始めようと思っている。ホーム・ページを立ち上げ、そこに書いたものを自由に載せたい。

ストレンジ先生の調査に付随して、多くのことを勉強させて貰った。

たとえば明治維新時、日本の近代化を推し進めてきた「お雇い外国人」。鉄道、水道、電灯、西洋建築、酪農、紙幣印刷、西洋医学、ホテル経営、歯科技術……。これらは、実は欧米から来日した若い専門家たちが成し遂げたことなのだ。彼らの功績をもう少し書く人がいても良

いのではないか。

・「横浜居留地」。生麦事件発生直後、横浜居留地はただちに住民集会を開き、全員一致して、家臣約四百名を引き連れた島津久光一行を追撃すべしと決議した。外人居留地の力はどうなものだったのだろうか。

・「幕府の海外留学生と密航留学生」。幕府は武士たちを欧州に派遣して劣勢挽回を図ったが、各藩も実は幕府の許可を得ずに海外に留学させていた。密航留学生の明治維新で果たした役割は大きなものがあるが。

・「幕府の軍隊」。歩兵、騎兵、砲兵の三兵種の近代軍隊が編成されつつあった。戊辰戦争での実力の程は？

・「十九世紀のイギリスのパブの役割」。

・「ロンドンとオリンピック」。十八世紀の文壇の大御所 サミュエル・ジョンソンは「ロンドンに飽きたものは人生に飽きたものだ。ロンドンには人生が与えるものがすべてあるからだ」と言い放った。さて、これをどうオリンピックの話につないでいくか。

書きたいものはたくさんある。のんびりと書きつづりたいものだ。

サロン21

平成二十三年は多事多難の年でした。特に東日本大震災は福島原発事故とともに大きな爪痕を残しました。当サロンでも、地震や原発、さらにはエネルギー問題が大きく取り上げられました。とくに後者の問題は今後長期にわたって日本経済に深刻な影響を与えかねません。国内54基の原発はほとんどが操業停止状態で、再稼働のめども立たず、不足分を火力発電で補っているのが現状です。これは液化天然ガスや原油の輸入増となり、我が国の経常収支にマイナスの影響を与えています。核開発をめぐってイランと欧米諸国は対立し、イランはホルムズ海峡の封鎖をちらつかせています。原油の85%をこの地域に依存する我が国としては深刻な問題です。

平成二十三年は世界で想定外の出来事が起こりました。チュニジア、エジプト、リビアで起こった民衆蜂起と政権打倒、シリアの反体制派の動き等、まさかの成り行きです。さらにギリシャに端を発したEU諸国の財政危機が起っています。かつては世界のリーダーはアメ

リカでしたが、今は違います。急速に台頭する中国もその本質においては依然発展途上国です。リーダー不在の中で次々と難しい問題が起こる可能性があります。日本のみならず、世界で次々と起こる問題を注視し、その意味するところを的確に判断することが求められています。当サロンの一層の発展を期待します。

私事になりますが、過去十年にわたり当サロンのプロマネを努めてまいりましたが、平成二十三年十二月をもって退任させていただきました。長きにわたるご後援ご支持を深謝いたします。（プロマネ 金京法一）



ペン俳句のこの一年

佳句鑑賞

西川 知世

二〇一一年のペン俳句にとつて、石川素屯さんのご逝去は大きな喪失であった。ペン俳句創設以来、たゆまず句作に励まれ、句会に臨まれる姿勢には心打たれるものがあった。ペン俳句に大きな功績を遺してくださいましたことに感謝は尽きない。心よりご冥福をお祈りします。

ペン肝臓の美(は)しき人逝き大夕立 知世

二月の句会より、猪股重子さん、保坂令華さんがゲストとして参加を続けられ、九月からは新入会員の伊藤文明さんの参加を得た。既メンバーの奮闘に加え、充実した句会となっている。重子さん、令華さんは今年からペンクラブに入会された。さらなるご活躍を期待したい。

六月、初めての試みとしてメール句会を持った。八月、恒例の納涼句会。十月、横浜三溪園にて吟行句会。十一月、中村雅道さんのお世話で伊豆一泊吟行を敢行できたことは望外の喜びであった。

雅道さんを中心に、メンバーの活躍で活発な実り多い一年となったことを感謝し、ペン俳句の成果をまとめさせていただく。

凍て戻る夜や金つばの餡甘し

東京は脆し卯の花腐しかな

原子力でふ不可解やラムネ抜く

すずなりの桐の木の下黙祷す

太陽に育つ黒点曼珠沙華

老ふことの自由に紅き芙蓉かな

鰯雲八ヶ岳（やつ）の向かうに母住まひ

伊藤 文明

冬紅葉旅の始めの独り酒

色数多紅葉を沈め一碧湖

近づけばそれだけ退り鴨の陣

熱爛に雨の吟行仕舞ひけり

九月の句会に冒頭の句でデビューされた。吟行に参加下さり、帰りの東海道線でも句会をして、下車ぎりぎりまで熱く俳句を語り合ったことは楽しい時間であった。「冬紅葉」「熱爛に」お酒が大好きらしいことが垣間見える。酒を詠う二句だが、俗に陥らず大人の雰囲気のある句。

シャツの糊効かせて暑き街へ出づ

大泉 子泉

公園の池に休める通し鴨

群がりて赤を吐き出す曼珠沙華

大池に薨を映す秋日和

仰ぎみる冬樹毛細管の如

子泉さんの句は真摯な視線が特徴。いつも眼前の対象をよく見ることを怠らない。俳句の基本である。「群がりて」の句は曼珠沙華がかたまつて咲く状態をよく表している。かたまることによって力を得て、目の前で花々が赤を吐き出していると感じたのは作者の詩的感性である。

風鐸の庇に落花しきりなり

上田 信隆

箸袋裏に句のあり暑氣払ひ

木戸押せば畔まで道に曼珠沙華

金色に耀く午後の芒かな

湖の見えぬ遠より鴨の声

お忙しい中、熱心に作句を続けられている。俳人協会主催第五十回俳句大会では「波郷忌や胸に冷たき聴診器信隆」で星野麥丘人の選を受けられた。「湖の」の句は伊豆吟行でものにされた句である。湖を付きつ離れつしながら、巡っている道の静けさが句の中に感じられる。

芝畑大霜に富士静もれり

志村 良知

豆撒きの子の声かすか高階に

地震の日に桂の丸き芽立ちかな

木洩れ日の螢袋を灯しけり

談志逝くをラジオの告げる夕時雨

今に生きる身辺りを俳句に読み込もうとされる姿勢に共感する。「芝畑」の句、富士裾野のあたりは日本屈指の芝生の生産地。芝一面が真白く輝き、その輝きを従えて富士山が静かに聳えている。大きな景である。「談志逝くを」は、その日の感覚を読み返す度に思い起こす句であるう。

春嵐火山灰（よな）降る国の芋焼酎

中村 晃也

バス停が尾瀬の入り口花辛夷

梅雨明けや鉄錆にほふ造船所

山の辺の道尽きるまで鰯雲

どこまでが秋空どこからが宇宙

中村 雅道

日の差して蟬梅の香をふりまけり

川風とひねもす遊び花辛夷

蒲公英や無数の絮の旅支度

曲屋の風鈴山の風を呼ぶ

冬ざれや湖畔に立ちし晶子の碑

雅道さんは俳句を大切に作られる。見倣いたいと思う。初学の頃からの思いを貫かれているのだらう。「蒲公英や」の句は少しの試みがある。無数のタンポポの絮にそれぞれの旅が待っているという難しい感覚に挑戦された句。「冬ざれや」は伊豆一碧湖に吟行した時の作。

なるままにまかす人生宝船

玉山 和夫

何事もなくて七草粥の膳

生き延びて後期高齢鰯食う

絹ごしの喉ごしのよき葉月かな

仰向けば青空かくす楡大樹

玉山さんはペン俳句の毎月の句会には参加しておられないが、年に一度、悠遊のこの欄に出句していただく。いつもながら悠々闊達な句柄で、読むのを楽しみにさせていただいている。「仰向けば」の句は、若々しい句で、空を隠すほどの大きな樹に生命の息吹を感じる作者である。

風花の遊ぶ八坂や暮れはじむ

水原 亜矢子

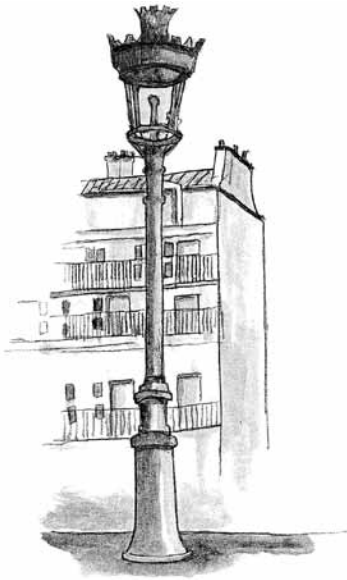
開き始む花色は白し初時雨

病む母の髪梳く冬の薄明り

暁の冷たき寝息霧の閨

また逢わん夢にのぞみの冬の夜

「風花」と題されて、上記の五句が届いた。お母様を看取られた慟哭の句である。きっと夢でお元気なお母様に会われることだろう。昨年はご母堂の看護に、御一門の俳句にとお忙しい毎日を過ごされ、ペン俳句は欠席されたが、また指導いただけることを楽しみにしている。



二〇一一年「ペン川柳」勉強会の成果

川柳勉強会 世話人 平尾富男

「ペン川柳」は、昨年二〇一一年末で九十一回を迎えた長寿分科会です。

十二月の合評勉強会は、諸般の事情で「投句大会」となりましたが、通常は黒薩摩銀座店に於いて、喉をビールで潤しながらの昼間の勉強会に続き、五時から呑み放題の懇親会を大いに楽しみました。

メンバー十人に変更はありませんでしたが、体調の関係で投句だけの参加メンバーが二名となりました。新しいメンバーの参加を期待しています。

「賞味期限」に限りがある時事・新聞川柳も時には面白いですが、企業OBらしい悲哀と余裕を詠う川柳で、仲間意識を高めながら「飲み喋る」の楽しい勉強会の伝統を維持していきたいと念じています。

以下は、常任メンバー十名が二〇一一年に詠んだ句から自薦の優秀（！）三句です。今回もメンバーの過去の人生が色濃く表出された作品が多く詠まれていますのが興味深いですね。

（順不同）（一部は世話人の選句）

昂

- ① 潮どきに足して2で割る意見出す（出す）
- ② ラッシュ時に靴を踏まれて縁が出来（靴）
- ③ バカ息子孝行しろと孫に言い（息子）

井波

- ① 長寿命余生と財布が噛み合わず（噛む）
- ② 節電で減らしたつけが値上げだと（減る）
- ③ ペン握り道ならぬ恋を成就させ（道）

西貢

- ① 靴を見て客種を知る下足番（靴）
- ② 委員とは口の減らないやつばかり（減る）
- ③ 黒雲の渦巻く中に衛星（ほし）の屑（卷く）

不言

- ① 新婚の旅の終りに角(つの)が見え(旅)
- ② 筋道を付けたと言って修羅場逃げ(道)
- ③ 陰口を聞こえるように声高に(声)

損得

- ① もう飽きた貧乏神との二人旅(旅)
- ② 流し目について行く馬鹿帰る阿呆(流す)
- ③ 息子今嫁なし職なし情けなし(息子)

安兵衛

- ① 旅行くは酒とさかなにねむの花(旅)
- ② 怖ろしやドルもユーロも紙っ切れ(紙)
- ③ ドタ靴もライムライトを浴びて跳ね(靴)

零門

- ① 正社員手取り減ってもしがみつく(減る)
- ② 巻きずしが一番だった運動会(巻く)
- ③ 近道を探し続けて遠回り(道)

酔深

- ① 紙おむつ孫は卒業ジジの番(紙)
- ② 夜の蝶昼間は飛ばず子を育て(飛ばす)
- ③ 左遷でも道草だよと胸を張る(道)

だし

- ① ひとり旅ダブルベッドをもてあまし(旅)
- ② パラサイト息子の重み年金に(息子)
- ③ その勝負審判次第紙一重(紙)

酔雅

- ① 長続き巻いて巻かれて夫婦仲(巻く)
- ② 障子紙今じゃよろけて指で穴(紙)
- ③ 息子との壁も緩んだ小さな手(息子)

「800字文学館賞」 特別企画

第三回の「800字文学館賞」は、3月に起きた東日本大震災をテーマにした作品を公募することになった。5月から7月にかけて、およそ200点の作品が寄せられ、その中から次の4編が入選作品として選ばれた。

「3・11に寄せて」

（福島県） 吉田 恵子

「悲しみを乗り越えて」

（神奈川県） 渡辺 司郎

「水玉模様の紙おむつ」

（青森県） 竹内 武智子

「ちゃんと生きる」

（山形県） 丹野 綾乃

入選作品の一編、「水玉模様の紙おむつ」を以下に掲載します。他の作品については、残念ながら紙面の都合で掲載できませんが、ホームページの「800字文学館賞」で読むことができますので、興味のある方はどうぞ開いてみてください。

水玉模様の紙おむつ

竹内 武智子

3月11日の大震災の後は、日本列島のどこかで毎日強い余震が起きている。4月7日の深夜も大きく揺れて、いきなり家中が真つ暗闇になり電化製品の音も止まってしまった。

入院中の夫が気になるが、どうする事も出来ない。翌日、交差点の信号機も作動していない道路を車で30分かけて病院に辿り着いた。事務室は仄暗く、業務停止状態である。昼食の時間だったので、歩ける患者や、車椅子の人が、介護職員に手助けされながら食事だった。窓から入る明かりだけでは普段より暗く、食事風景がモノクロに見える。

ホールを通り抜け、夫のいる病室の入口に立った時、息を吞んでしまった。4人部屋に9台のベッドが盛り上がる様に並べられ、部屋中が蠢く光景は凄まじい熱を發している。

夫のベッドは入口近くだったので、すぐ見つけたが、狭いので横歩きになってやっと側に行けた。

電気なしでは、床擦れ予防のエアマットも使えず、代りにクッションやバスタオルを丸めて体位を維持してくれていた。職員は黙々と機敏に働いている。気管切開の人、痰の吸引器を使用する患者を一部屋に集中避難させたらしい。

夜中の停電を、限られた人数の夜勤者で、どんなに変だったか想像もつかないが、勤務時間前に駆け付けた人、休み返上で応援に来た職員など、患者を守る為に懸命に動いてくれた事を知った。

この東日本大震災の死者、行方不明は2万人を越す。働き盛りの子供も命を奪われてしまったと言うのに、5年も寝たきりの我が夫。これから回復して社会貢献が出来る筈もない。ただただ、申し訳なく、消えてしまいたいと思った。そんな私にベテラン看護師が「今まで充分働いてきてくれた人たちですから、出来る限りの看護をさせて戴きますよ」と、笑顔さえ見せたのである。

自分たち夫婦の年月考えて、減入った気分で毛布を捲いたら、夫が水玉模様のおむつをしていることに気がついた。震災による品不足の為、別な業者から取り寄せ

た物と聞く。青い小さな水玉模様が何とも可愛いらしく、思わずクスツと笑ったら、もやもやが晴れた。そうだ。限りなく、いとoshii命がここにある。

(プロマネ 野瀬、志村、田谷)



追悼

石川正達さん



平成23年7月23日ご逝去
90歳
平成3年4月当クラブ入会

ペンクラブ育ての親

中川路 明

京都大学四年先輩の石川さんと私の初対面は古く、ラグビー東西大学OBの懇親会です。

一九八九年二月国際感覚の啓蒙を旨に、異文化交流、国際的経営が要と、駐在員経験者が企業OB作家連盟（後ペンクラブと改名）を創立しました。一方、私は

一九九二年、石川、柴垣、北田の京都球友から、自由に書き、話すおもしろい会やからお前も来いと誘われ、クラブに入会しました。

創立時から日本ペンクラブ逸材はじめプロ級の文筆家がマネジメントなど出版社の協力を得、出版第一号『知らぬは日本人ばかりなり』を皮切りにシリーズ物、時代

先取テーマ、有名雑誌への投稿エッセイにと、全会員が執筆に集中です。一編二頁千二百字で一冊百編共著方式が素人集団クラブの基準になりました。企業出身の素人文章は唯我独尊、論理混乱が悩みで、八木さんが九一年入会の元毎日新聞で記事校正の第一人者だった石川さんに講師を依頼し、文章教室を発足された。石川さんは「文章

は書くだけでは駄目。読者の心に残り、面白いことが第一歩。次に起承転結」と、他人の手でプライドを傷つけられ易い成人を知る静かな指導は流石で、会員文章は長足に進歩し、九二年には春秋各三冊を出版、年末のクラブ準備金は二百万円に達しました。

九二年『あつと驚く国際マナー』を最後に、一転して経済の停滞と相次ぐ退会に活動は窄み、八木会長の挽回策も叶いません。鳴澤、北田の後継会長は内部研鑽を強化、役員も補佐し、商社業界・最新テクノ・国際マナー辞典と出版を維持できたのは、全会員の広汎な知識・体験が糧でした。

続く不況、二〇〇〇年丸の内から新日鉄の代々木寮へ会場を移動、

二〇〇四年、事務局の仕事をして下さっていた西川さんは家庭事情で辞められ、後任に石川さんが愛娘山内めぐみさんを起用して下さいました。会員は個人出版、公募に励むも、クラブは混迷しました。

世代交代に組織再編成が急務と二〇〇四年創立十五周年を期し、平尾、松谷の新理事が起用され、ホームページの本格化、情報誌連載、電子出版模索と大活躍でした。二〇〇六年には、会計に清水さんが入り、新体制は整いました。

入会間もなく私は石川さんから何でも書こう会の検討を依頼され、ベテランの浅野さんと石川さんの読者の心に響く面白さを求めました。更に新リーダー野瀬さんのものと出席者は月毎に増え月二回に、

議論は活発化、石川さんから適時コメントを頂きました。書こう会の成果の集大成であり、自ら命名された同人誌「悠遊」も、担当者の努力の結果、昨年の十八号は楽しい読物に成長しました。生前に全部お読みになったか伺えませんでした、今は美しい花園で好きだったピアノ曲を聴きながらのお姿が思い浮かびます。

既刊「悠遊」の頁を繰ると石川さんと親友水谷・遠藤・林三氏の情愛籠もる追悼文を拝見、重鎮大先輩により穏やかに進行していたクラブの会を想起しました。

最後に、クラブを離れて、石川さんの畢生の作品をご紹介します。
『京都大学ラグビー部六十年史』(A四版五百頁余)です。自ら膨大な

資料を整理、執筆され、他の部史と異なり、相手チームの歴史・戦略・プレイ解説を監修されました。三高・慶應義塾の部史と共に、百年を超える日本学生ラグビーの貴重な礎として尊重されています。先の葬場入口で、ユニフォーム姿の石川さんの肩に手を添えためぐみさんとお二人の遺影に、涙が溢れご冥福を祈りました。

クラブは西川会長の「外向けチャネルに努力」をモットーに、新規出版企画の充実、電子出版積極挑戦、各自のプロジェクト提案と二十年振りの第二の発展期を目指しています。

なにとぞ皆をお見守り下さい。
ありがとうございました。

台掌

追悼

吉田邦彦さん



平成24年1月3日ご逝去
73歳
平成16年2月当クラブ入会

エズ村の絵

大平 忠

『悠遊』十三号の表紙を飾った吉田さんの絵は、南仏の明るさの中に、ローマ時代の名残りを留める古いエズ村の片隅が描かれて、見る人にふと懐かしさ呼び起こさせた。

私は、十四号から編集担当となつて吉田さんと知り合い、『悠遊』を

きっかけにお付き合いが始まったのである。

吉田さんには、その後、十五号で「祈り」、十七号では「追憶のはざま」と、表紙の絵を描いていた。いずれも、人の気持に安らぎを与える素敵な絵であった。挿絵は、異国の人形や玩具を描かれて、ノスタルジーを誘った。

これらの絵は、吉田さんのお人柄と、過ごされた人生の象徴のように思えてならない。

吉田さんは、静かにゆっくりと話をされる。しばらく話をしていると、こちらも穏やかな気分になり、いつのまにか、話に惹きこまれてしまう。吉田さんが国内外に数多くの友人を持たれるにいたつ

た所以であろう。しかも、親しくなった人々との交流は深く長く続いて、横から見て羨ましく感じられてならなかった。

吉田さんご夫妻は、ウズベキスタンの留学生の面倒をみておられた。これは、一寸した機縁で始まったとか。留学生は卒業して帰国すると、次の後輩に吉田さんの話をする。そして、新しい留学生がまた吉田家にやってくる。自然に出来上がったサイクルである。

いつだったか、卒業の近づいた学生の就職活動に奔走されておられた。留学生との交流は、卒業されても続き、吉田さんがウズベキスタンに招かれたり、仕事を持った人が再び吉田家へ訪れたり、と、途切れることがなかった。この長

い交流は、吉田さんご夫妻の細やかな思いやりと心遣いがあったはじめてできたことであろう。

吉田さんはオランダにも、親しい何人かの友人を持つておられた。そのご縁で、明治の初め「岩倉使節団」派遣に貢献したフルベッキの故郷・ザイストへも行かれた。これらのエピソードは、数年前の『悠遊』に記されていた。

絵画は、早稲田大学美術部以来、趣味を超えて吉田さんの半身ともいうべきものであった。近所の絵画グループでの活動以外に、ボランティアとしてご老人の方たちの絵を描くお世話もされた。さらに、油絵、水彩画の他に、フレスコ画も勉強し、フランスの中央部オー

タンにある修道院へ行つて、壁画を描く作業に参加されたりした。

一度、「その修道院に連れて行つて下さい」とお願いしたが、とうとう叶わぬ夢になってしまった。

吉田さんは、ご夫妻でスキー、テニス、ゴルフを楽しんでいた。

草津に別荘を持ち、冬にはスキーや雪の森の中の散策、春秋には、古くからのテニスのお仲間と合宿をされていた。スキー、テニスのできない私は、ゴルフを一昨年の秋、婦恋村で一緒にした。それが最初で最後であった。

春、『悠遊』が出来上がると、表紙・挿絵の絵画グループと一緒に、六、七人で打ちあげを行うのが恒例だった。いままで、新宿、神楽坂、

横浜、千駄木と会を重ねてきた。昨年は、六月十日に新宿で行った。吉田さんをはじめ全員揃い、たいへん楽しい会だった。そのとき、息子さん家族と一緒に住むための、家の大改築も終わったと、喜んでおられた。その庭に置く鳥の餌箱の話も『悠遊』十八号に書かれていた。

六月の会が終わってまもなくだった。体調を崩されお悪いと聞いてたいへん驚いた。

そして、新年早々の訃報である。あまりの早さに、ただただ呆然として言葉も出ない。

お別れの式に飾られた遺影は、いつもの優しい笑みをたたえて、静かに語りかけてくるようだった。

吉田さん、さようなら

企業OBペンクラブの本年の歩み

＝平成二十三年(二〇一一年)＝

(会員への敬称略)

一、役員人事

二〇一〇年～二〇一一年の任期の二年目に当る

二〇一一年は、前年に引き続き、左記の役員が務めた。

任期途中の九月に田谷広宣担当理事が急遽退会したが、野瀬運営委員長が広宣担当を兼務した。

会長 西川 武彦 (出版担当)

副会長 平尾 富男 (事務局長)

副会長 大泉 潤 (財務担当)

理事 野瀬 隆平 (運営委員長)

理事 浜田 道雄 (副運営委員長)

理事 田谷 英浩 (広宣担当)

理事 清水 勝 (会計担当)

監事 山縣 正靖

継ぐが、特に次の二点に注力する―

①リレー式投稿の推進＝「会員談話室」で新しいテーマを設けてこれを継続する一方で、外部向けエッセ

イ・コラムでも試みたい。

②電子書籍への挑戦＝当クラブの分科会活動で発表され、蓄積されたものを電子書籍の形で発信すること
に挑戦したい。

三、月例会

一月例会(二十日)

・退会会員＝莊司忠志、亀井弘次、三宅劭、小野

寺満憲、道村美恵子、斉藤進

・新春ゲスト講演＝久元祐子氏(ピアニスト、モーツァルト研究家)

『モーツァルトと現代』虚像と実像』

・新年会＝①会員参加 四十三名

②ゲスト、その他＝二十九名

二、年度方針

二〇一一年度の年度方針の概要は、前年の方針を引き

・「何でも書こう会」熱海合宿Ⅱ昨年に続き、勉

強会有志が一泊の合宿勉強・懇親会に参加

二月例会（十七日）

・新入会員Ⅱ矢澤正二、新田由紀子

退会会員Ⅱ大塚卓夫

・会員講演Ⅱ小寺裕子

『自分を知る』

会員講演Ⅱ富岡喜久雄

『ボランティアーラオスへ、そして』

・「ペンフォト句会」の公開Ⅱ従来会員専用ペー

ジでのみ閲覧されていた毎月の成果の公開

・『会員名簿』（二〇一一年二月現在）の確定・配

布（会員総数七十名）

三月例会（東日本大震災発生の為、急遽休会）

・新入会員Ⅱ市川忠夫

四月例会（二十日）

・ゲスト講演Ⅱ（財）東亜留学生育英会が日本の大

学院に受け入れた中国と韓国の学生お二人

・東日本大震災の被災地・被災者への義援金募集

活動開始

・『悠遊』第十八号の印刷完成・配布

五月例会（十九日）

・新入会員Ⅱ佐藤洋子、池田隆

・特別「800字文学館賞」の公募Ⅱ五月、六月、

七月の三ヶ月間、東日本大震災をテーマで公募

・『悠遊』第十八号の合評会

六月例会（十六日）

・新入会員Ⅱ西田昭良

・会員講演Ⅱ馬場真寿美

『昭和一桁生まれの人々に囲まれて……』

会員講演Ⅱ志村良知

『D・D&Nルマンディ オマハビーチ・二本

の映画とキャパの写真』

七月例会（十五日）

・会員の計報Ⅱ石川正達（七月二十七日、大腸癌

享年九十歳 合掌！）

・ゲスト講演Ⅱ板見浩史氏（フォトエディター）

『新しい文芸―フォト五七五の誕生』

・義援金の送金Ⅱクラブの有志による募金と、クラブの会計から補助金を足し、合計五万円を石巻日日新聞社に送金

八月例会（夏休み）

・新入会員Ⅱ原田信

九月例会（十五日）

・退会会員Ⅱ田谷英浩

・ゲスト講演Ⅱ井口武夫氏（元ニュージーランド大使）

『太平洋戦争に係わる日米両国の歴史認識』

・選挙管理委員の選出Ⅱ上原（二期目）、松谷（新任）

十月例会（二十一日）

・新入会員Ⅱ伊藤文明

・ゲスト講演Ⅱ水谷仁氏（元宇宙科学研究所教授・現「ニュートン」誌編集長）

『小惑星の謎【はやぶさ】が挑んだもの』

十一月例会（十七日）

・会員講演Ⅱ福本多佳子

『アートを通じてアメリカ人女性との交流』
会員講演Ⅱ野上浩三

『株式市場の長期不況と原因』

・次期役員選挙Ⅱ投票締め切り

十二月例会（十六日）

・退会会員Ⅱ渡里清、下平紀代子

・ゲスト講演Ⅱ日米学生会議

（恒例の現役大学生による活動報告と、世代を超えた意見交換と懇親）

四、次期役員人事

二〇一二年～二〇一三の二年間を務める役員が、会則に従って会員投票により選任された。

会長 西川 武彦（出版担当） 再選

副会長 平尾 富男（事務局長） 再選

副会長 大泉 潤（財務担当） 再選

副会長 浜田 道雄（運営委員長） 新任

理事 大越 浩平（運営副委員長兼

広報宣伝担当） 新任

理事	志村 良知	(副事務局長)	新任
理事	清水 勝	(会計担当)	再選
監事	山縣 正靖		再選

まとめ(総評)

二〇一一年三月十一日に起こった東日本大震災と福島原子力発電所の事故による未曾有の災害に見舞われた日本は、地震と津波の恐ろしさを世界に知らしめ、同時に、原子力の利用に関して世界に大きな問題を提起した。

クラブの会員の間でも「原発廃絶」で活発な議論が展開された。その一環として、大震災をテーマとした特別「800字文学館賞」の公募も行った。

会員総数の推移としては、二〇一一年二月の「会員名簿」に掲載された総数は七十名であったが、六人の新入会員を迎えることが出来た。一方、逝去・病氣他で四人が退会され、年末には七十二名となった。

分科会活動としては、当クラブで最も参加人員が多い「何でも書こう会」が、毎月二回の開催となり、その成果をホームページに掲載する機会も分散して増えた。会員の「書く」ことへの意欲が高まり、外部への発信が増える結果となったことは、プロマネの負荷が増えたといえ、クラブの発展に大いに寄与している。

「ペンフォト句会」の成果を、会員専用ページから公開ページに移行することによって、会員の活動の成果の外部発信に貢献した。

電子書籍・印刷出版の分野については、関係会員の努力にも拘らず、必ずしも成果を挙げることは出来なかったが、将来に向けての準備は整い、二〇一二年には大いに期待出来る状況となった。

更なる外部発信への積極的な対応を、会員各位のご理解とご協力によってお願いしたい。

文責＝事務局長 平尾 富男

氏 名		出 身 会 社
田原 敬	たはら けい	和田製本工業
玉山 和夫	たまやま かずお	通産省、日英協会
垂水 健一	たるみ けんいち	中日新聞（東京新聞）
寺井 融	てらい とおる	民社党本部、産経新聞
都甲 昌利	とこう まさとし	日本航空
富岡喜久雄	とみおか きくお	フジタ（藤田組）
鳥海 博	とりうみ ひろし	山一証券
中川路 明	なかかわじ あきら	ダイセル化学工業
中村 晃也	なかむら あきや	三菱化学
中村 爽	なかむら そう	日本工営
中村 將陸	なかむら まさみち	富士通
新山章一郎	にいやま しょういちろう	在日米国海軍基地
西川 武彦	にしかわ たけひこ	日本航空
西川 知世	にしかわ ちよ	三菱倉庫
西田 昭良	にしだ あきよし	東京放送
新田由紀子	にった ゆきこ	Springer-Verlag Tokyo
野上 浩三	のがみ こうぞう	日本生命保険
野瀬 隆平	のせ りゅうへい	石川島播磨重工業
橋本 政彦	はしもと まさひこ	日商岩井
馬場真寿美	ばば ますみ	ヤマハ
浜口須美子	はまぐち すみこ	稲畑産業
浜田 道雄	はまだ みちお	労働省
濱田 優	はまだ ゆたか	三菱化学エンジニアリング
原田 信	はらだ まこと	NHK
平尾 富男	ひらお とみお	キャノン
廣澤 重穂	ひろさわ しげほ	シータス
福本多佳子	ふくもと たかこ	日本航空、Creative Tours
藤岡 豊	ふじおか ゆたか	三菱商事
古川 幸雄	ふるかわ さちお	安宅産業、石川島播磨重工業
保坂 令子	ほさか れいこ	
細谷 博	ほそや ひろし	日立製作所、日立メディコ
松浦 武弘	まつうら たけひろ	伊藤忠
松谷 隆	まつたに たかし	富士通
水原亜矢子	みずはら あやこ	東急電鉄
矢澤 正二	やざわ しょうじ	信金中央金庫
山縣 正靖	やまがた まさやす	三菱銀行
吉崎 清己	よしざき きよみ	関西ペイント

會員名簿 (五十音順)

氏 名	出 身 会 社
阿久澤 泰子	興和企画
阿部 洋己	キリンビール、キリンビバレッジ
阿部 典文	石川島播磨重工業
新井 良侑	ダイセル化学工業
安藤 晃二	三菱商事
池田 隆	東芝
市川 忠夫	東芝
伊藤 文明	明治製菓
稲宮 健一	三菱電機
猪股 重子	
岩崎 洋一郎	三菱レイヨン
上田 信隆	東芝情報システム
上原 利夫	住友商事
鵜飼 直哉	富士通
大泉 潤	三菱化学
大越 浩平	NECインフロンティア
大月 和彦	労働省
大西 宏	松下電器
大平 忠	三菱化学
大野 晃	三井物産
大庭 定男	三井物産、野村総研
門屋 信行	監査法人／中央会計事務所
上山 裕次	近畿日本ツーリスト
金京 法一	三菱商事、三菱総研
倉藤 金助	桜井会計事務所
黒崎 昭二	新日本製鉄
高口 恵子	
児玉 忠雄	三菱銀行
小寺 裕子	
佐藤 洋子	劇団「呼華（こはな）」在籍
宍戸 三春	住友商事
清水 勝	明治安田生命（安田生命）
志村 良知	リコー
杉浦 右蔵	NTT、三菱電線工業
高橋 孝蔵	丸紅、松竹

将来を考えると、自分自身を見つめると樂觀と悲觀の種はどちらも尽きない。今号は、日本については努めて樂觀の種探しをやろうという試みである。そして、これらを若い世代に引き継いでいきたいと思う。引き継ぎたくなかったことも……。ようやくそれらを、我々は他人に語れる年令になったようである。

(大平)

もともと支持者じゃないからどうでもいいことだが、政権を失った自民党の無能力と品位のなさにはあきれるばかり。こんな政党に六十年も国を支配させていたかと思うと日本の繁栄も虚しい。といって、政権をとった民主党も内輪もめばかりで、一步も前へ進めない。新党や大阪の「なんとか会」もまだ得体が知れない。こんなないづくしで、これからの日本どうなるんだろう。

(浜田)

パソコンが世界を席卷し、横書き主流の中で日本の書籍は今も縦書きを固持している。幽遠なる文化継承の想いが潜んでいるとも思えないが、書の流れるような美は、縦書きなればこそ可能な筆はこびの賜物。浮世絵や戯画も毛筆の筆使いと墨の濃淡だけで表現されてきた。我が国の現状を憂いながらも諦めずに未来に希望を託す人々がここにいます、それも日本の宝ものの一つであらう。

(三春)

企業OBペンクラブ同人誌

「悠遊」第十九号

二〇二二年四月二〇日発行

発行者 企業OBペンクラブ会長

西川 武彦

印刷所 株式会社 毎日新聞東京センター

東京都千代田区一ツ橋一―一 (〒一〇〇―〇〇三)

TEL 〇三―三三二二―〇四七九

連絡先 企業OBペンクラブ事務局 平尾 富男

横浜市青葉区田奈町三三―二 (〒二二七―〇〇六四)

Eメール: hira03321@04.iiscom.net

クラブURL: http://www.obpen.com

口座 三菱東京UFJ銀行海老名支店(409)

企業OBペンクラブ 会計担当 清水 勝

(普通 1086096)

ペン・フォト句会（生活編）



平尾 富男

三 春



大月 和彦

上山 裕次





白鷺の
一歩一歩が
芝居めく

中村 晃也